# 製八尾市文化財調查研究会報告54

I 小阪合遺跡(第30次調査)

Ⅱ 竹渕遺跡(第4次調査)

Ⅲ 竹渕遺跡(第5次調査)

IV 東郷遺跡(第49次調査)

V 東郷遺跡(第51次調査)

VI 中田遺跡(第31次調査)

VII 八尾南遺跡(第22次調査)

Ⅷ 八尾南遺跡(第24次調查)

1996年

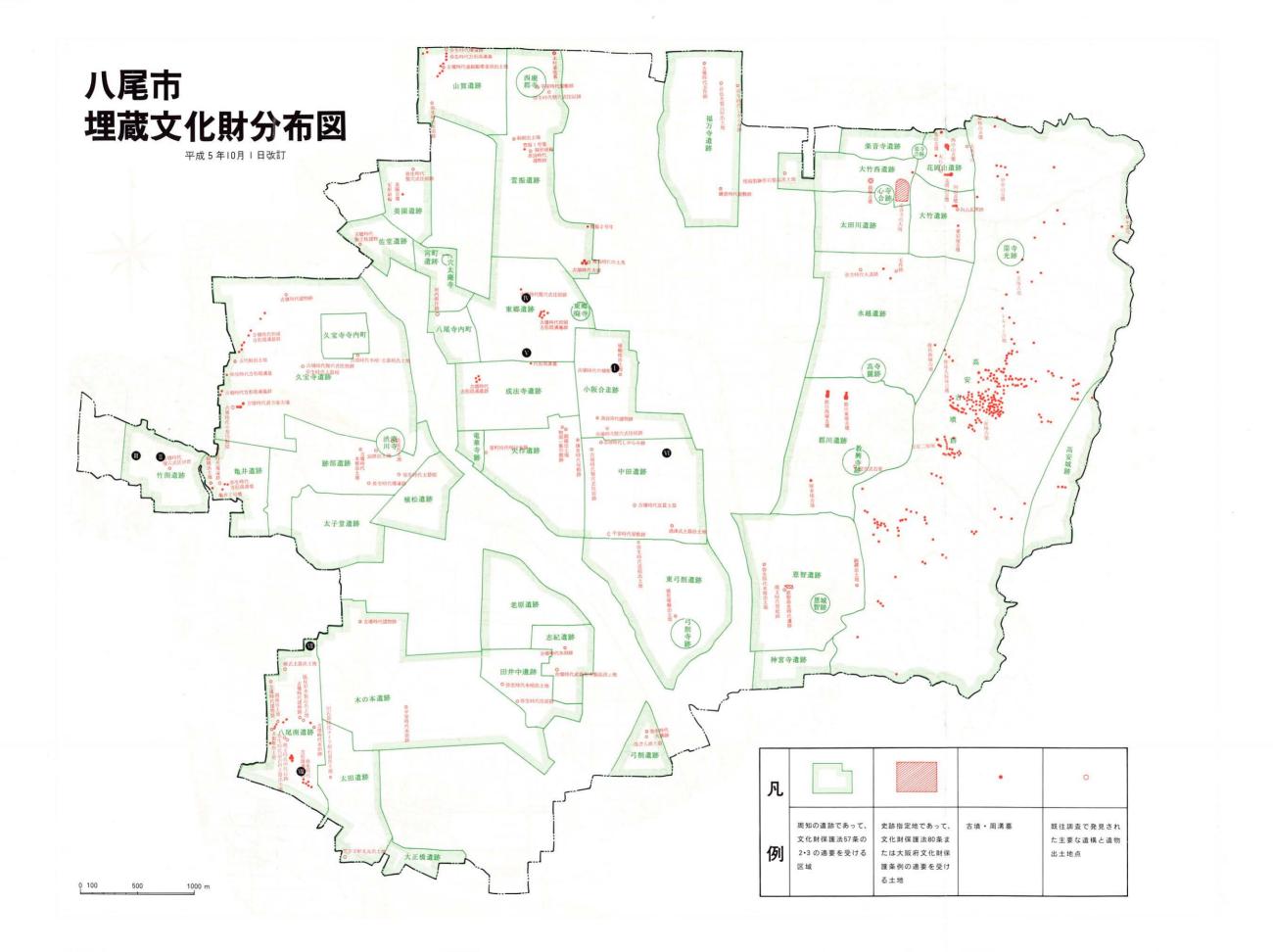
財団法人 八尾市文化財調査研究会

# 関八尾市文化財調査研究会報告54

- I 小阪合遺跡(第30次調査)
- Ⅱ 竹渕遺跡(第4次調査)
- Ⅲ 竹渕遺跡(第5次調査)
- IV 東郷遺跡(第49次調査)
- V 東郷遺跡(第51次調査)
- VI 中田遺跡(第31次調査)
- VII 八尾南遺跡(第22次調査)
- Ⅷ 八尾南遺跡(第24次調査)

1996年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



## はしがき

八尾市は東に生駒山地、西に上町台地、南に羽曳野丘陵に囲まれた河内平 野の中に位置しています。

平野部は、淀川や旧大和川および生駒山地の西麓から西へ流れる中小の河川によって運ばれてきた土砂の堆積作用によって形成されています。堆積した土砂は水田や畑に適した土壌であります。この肥沃な土壌がひろがっている平野には古来より人々が生活していた遺跡が多く存在しています。また、生駒山地の西麓にも古来より人々が生活していた遺跡が多く存在しています。

現在、その遺跡のほとんどは河川等の堆積作用や近年の土地区画等の整地によって地中深くに残っています。近年、平野部では住宅建設や工場建設等の大規模な開発が多く行なわれるようになり、地中深く眠っていた遺跡が破壊されることが頻繁に起きてきました。そこで、これらの文化財を開発による破壊から守り、先人が残した文化遺産を後世に永く伝承させることが我々の責務と認識し、文化財の保護・保存の徹底をはかってきたところであります。

本書は、平成7年度に実施しました小阪合遺跡(第30次調査)、竹渕遺跡 (第4・5次調査)、東郷遺跡(第49・51次調査)、中田遺跡(第31次調査)、八 尾南遺跡(第22・24次調査)の5遺跡発掘調査を記したものであります。

本書が、今後の学術研究及び本市の地域史の一資料として広く活用され、 その一助となれば幸いです。

末筆となりましたが、調査におきましてご協力いただきました関係各位の 皆様方に深くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご支 援を賜りますようお願いいたします。

1996年9月

財団法人 八尾市文化財調査研究会 理事長 木 山 丈 司

- 1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成7年度に実施した発掘調査成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現場終了後に着手し、平成8年9月をもって終了した。
- 1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
- 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市市役所発行の2.500分の1 (昭和61年8月)・八尾市教育 委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成5年10月1日改訂)をもとに作成した。
- 1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。
- 1. 本書で用いた方位は磁北及び国土座標の座標北を示している。
- 1. 遺構は下記の略号で表した。

竪穴住居-SI 溝-SD 井戸-SE 土坑-SK 小穴-SP 自然河川-NR 掘立柱建物-SB 落ち込み-SO 土器棺墓-土器棺 土器集積-SW

- 1. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。 弥生土器・土師器・瓦器・埴輪・石類-白、須恵器-黒、木製品-斜線。
- 1. 各調査に際して、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、 広く利用されることを希望する。

# 目 次

はしがき

序

#### 八尾市埋蔵文化財分布図

I	小阪合遺跡	第30次調査	(KS95-30)		1
П	竹渕遺跡	第4次調査	(TK95-4)		15
Ш	竹 渕 遺 跡	第5次調査	(TK95-5)		25
IV	東郷遺跡	第49次調查	(TG95-49)		43
V	東郷遺跡	第51次調査	(TG95-51)		57
VI	中田遺跡	第31次調査	(NT95-31)		71
VII	八尾南遺跡	第22次調查	(YS95-22)		87
VIII	八尾南遺跡	第24次調查	(YS95-24)	······1	05
報告書	<b>書抄録</b>				

# I 小阪合遺跡第30次調査(KS95-30)

# 例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市南小阪合町1丁目21番地で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する小阪合遺跡第30次調査 (KS95-30) の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第埋458-4号 平成7年12月20日) に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が阪奈住宅株式会社から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成8年1月8日から1月22日 (実働9日間) にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は104㎡を測る。調査においては岸田靖子・中西明美・西田真紀・西村和子が参加した。
- 1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成8年9月30日に完了した。
- 1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-沢村妙子 図面トレース-北原清子。
- 1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

# 本文目次

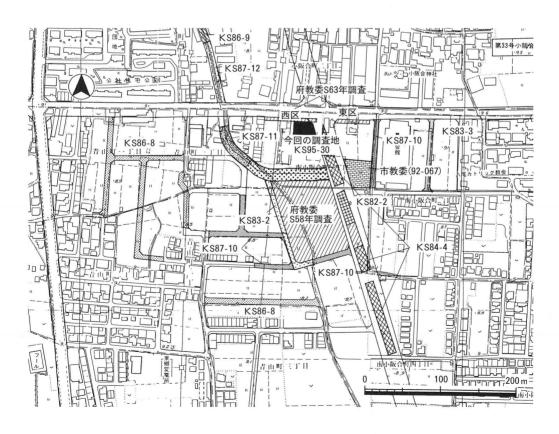
1.		はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		調査概要	
	1)	)調査の方法と経過	
	2	)基本層序·····	
	3 )	)検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	)
	4 )	)出土遺物観察表	)
3		まとめ1	n

# I 小阪合遺跡第30次調査(KS95-30)

### 1. はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央部の小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1~5丁目、若草町、山本町南7・8丁目一帯の東西0.45~1.0km、南北1.0kmに広がる弥生時代中期~近世に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれて、八尾市二俣地区を基点として南北方向に展開する低位沖積地の標高8~9m付近に位置している。小阪合遺跡の成立を見たこの低位沖積地は、水稲耕作を生活基盤とする弥生時代前期以降、比較的安定した地形的条件を背景として数多くの遺跡が成立しており、考古学的な資料の蓄積も多い。当遺跡周辺に限っても、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡が隣接している。

小阪合遺跡は昭和30年に若草町で行なわれた、大阪府営住宅供給公社の建築工事に際して、 古墳時代の土器が多量に出土したことに端緒を発するもので、昭和57年以降は南小阪合地区を



第1図 調査地周辺図

中心とする区画整理事業に伴う発掘調査が当調査研究会により継続して実施されてきた。その 結果、弥生時代中期~近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認 された。なかでも、古墳時代前期における集落の広範囲な分布や、数多くの地域から搬入され た土器群の存在は、当時の地域間交流の一端を知る上で貴重な資料を提供する結果となった。

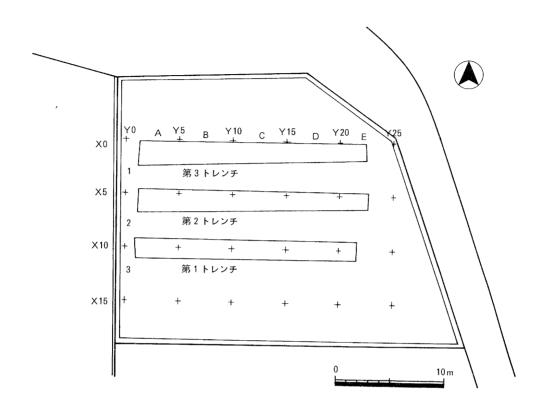
このような情勢下、阪奈住宅株式会社から八尾市南小阪合町1丁目21において、共同住宅の建設を行う旨の届出が市教育委員会文化財課へ提出された。工事が予定された地点は遺跡範囲の北東部にあたり、調査地点に北接する府道服部川久宝寺線では、昭和63年度に拡幅工事に伴う発掘調査が大阪府教育委員会より実施されているほか、東接する地点では、当調査研究会が昭和59年度に区画整理事業に伴う第4次調査(KS84-4)を実施している。これら一連の調査では、古墳時代前期から鎌倉時代に至る集落が検出されており、申請地においても当該期の集落が存在した可能性が高いものと推定された。これらを確認する目的で、平成7年11月21日に八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査が実施された結果、古墳時代中期後半~中世に至る遺構・遺物が検出された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・阪奈住宅株式会社・(財)八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。

## 2. 調査概要

#### 1)調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建設工事に伴う発掘調査で、基礎杭構築部分に沿って東西方向に伸びる3本のトレンチを設定し、南から第1トレンチ~第3トレンチと呼称した。各トレンチの規模は、第1トレンチ幅1.7m、長さ20m。第2トレンチ幅1.7m、長さ21m。第3トレンチ幅1.7m、長さ21m。調査面積は約104㎡を測る。調査地の地区割りについては、調査地の北西隅の $X0 \cdot Y0$  地点を基点として東西25m、南北20mにわたって設定した。一区画の単位は5m四方で、東西方向はアルファベット(西からA~E)、南北方向は算用数字(北から1~3)で示し、地区の表示は1A区~3E区と呼称した。地点の表示には、東西線( $X0 \sim X15$ )・南北線( $Y0 \sim Y25$ )の交点の数値を使用した。調査は第1トレンチ、第3トレンチ、第2トレンチの順で行った。掘削に際しては、現地表下約1.6mまでを機械掘削した後、以下0.1~0.2mについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下1.7m前後(標高7.6m前後)に存在する第5層上面で、古墳時代後期中葉に比定される溝1条(SD-1)、平安時代末期~鎌倉時代初頭に比定される土坑1基(SK-1)、溝11条(SD-2~SD-12)、小穴11個(SP-1~SP-11)を検出した。ただ、平安時代末~鎌倉時代初頭の遺構としたものの中には、第4層上面を構築面とするもの



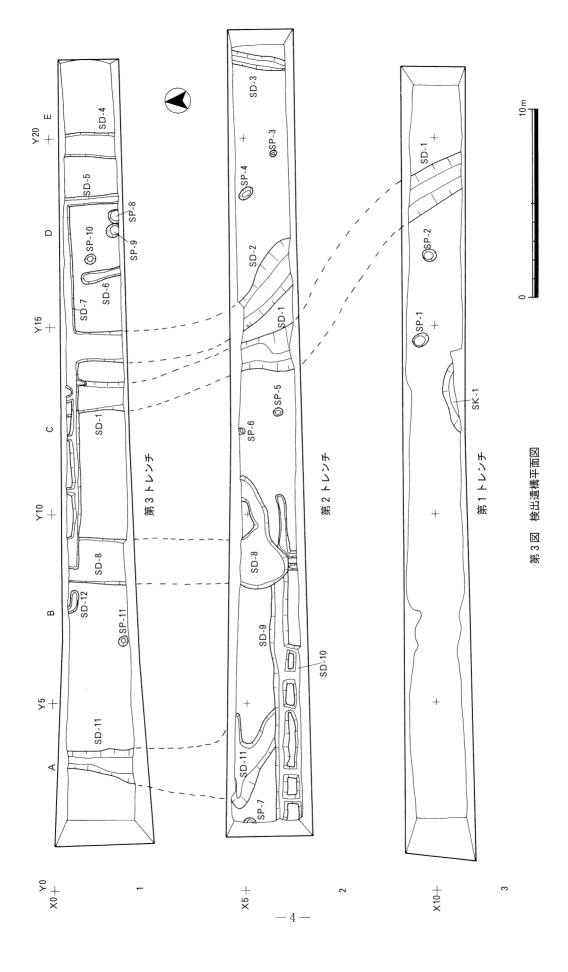
第2図 調査区設定図

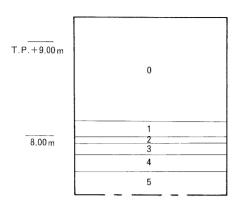
があり、時期幅があるものが含まれている。出土遺物は包含層および遺構内からコンテナ1箱程度が出土している。

### 2) 基本層序

客土を除けば、第1層の耕土から遺構検出面である第5層上面までが0.5~0.6m程度と浅く、 古墳時代後期以降、付近一帯の沖積作用が緩慢であったことを示している。さらに中世以降は おもに耕地としての土地利用が看取されており、農事作業に関わる度重なる掘削のため、遺物 包含層が攪拌を受けたためか、出土した土器類も磨耗した小片が大半であった。ここでは、普 遍的に存在した5層を摘出して基本層序とした。

- 第0層 客土。層厚1.1~1.2m。上面の標高はT.P.+9.4m前後。
- 第1層 N6/ 灰色粘質シルト。耕土。層厚0.1~0.2m。
- 第2層 10BG5/1青灰色粘質シルト。床土。層厚0.1~0.2m。 近世遺物を極少量含む。





第3層 10BG6/1緑灰色粗粒砂混砂質シルト。層厚0.1~0.25m。中世~近世の遺物を少量含む。

第4層 2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混砂質シルト。層厚0.1~0.3m。古墳時代中期末~中世の遺物を少量含む。

第5層 10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルト。層厚 0.2m以上。上面が遺構検出面。

第4回 基本層序模式図(S=1/40)

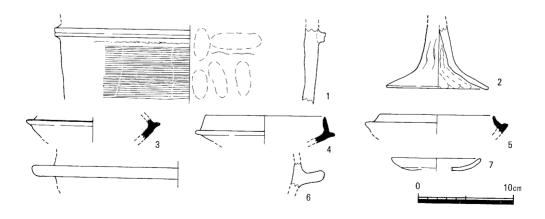
#### 3)検出遺構と出土遺物

• 古墳時代後期中葉の遺構

溝(SD)

#### SD-1

第1トレンチの3D区から第3トレンチの1C区にかけて北西方向に蛇行して伸びるもので、第3トレンチの北端はSD-7に切られている。検出長11.8m、幅0.8~1.2mを測る。深さは第3トレンチで0.15m、第1トレンチで0.4mで南部に行くに従って深くなっている。埋土は第1トレンチでは上層の灰色粗粒砂混砂質土と下層の灰黄褐色粗粒砂混粘質シルトの二層で構成されている。遺物は古墳時代中期後半から後期前半に比定される土師器高杯、須恵器杯身、円筒埴輪等の小片が極少量出土している。図化したものは円筒埴輪片(1)・土師器高杯(2)・須恵器杯身(4)の3点である。(1)は円筒埴輪の小片で胴部復元径27cmを測る。タガは端面が窪む台形で突出度は高い。外面調整はB種ヨコハケ、内面調整は指ナデである。胎土中



第5図 SD-1(1・2・4)、SD-7(5)、SK-1(6・7)、SP-6(3)出土遺物実測図

に石英・長石の小砂粒が多量に含まれている。色調は赤灰色で焼成は良好である。川西宏幸氏編年のN期(5世紀中葉~後葉)に対比されよう。(2)は土師器高杯の脚部である。柱状部に縦方向に走る粘土紐接合痕が見られる。(4)は須恵器杯身の小片で口縁部の1/8程度が遺存している。水平方向に小さく伸びる受部から、立ち上がりが内傾して伸びるもので、口縁端部は丸く終っている。TK10型式に対比されよう。円筒埴輪(1)を別にすればおおむね、6世紀中葉の帰属時期が推定される。

• 平安時代末期~鎌倉時代初頭の遺構

土坑(SK)

#### SK-1

第1トレンチの3C区で検出した。一部を検出したのみで、南部の大半が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.85m、南北幅0.24m、深さ0.4mを測る。埋土は2層に分層され、堀方の断面形状に沿って堆積しているが、2層ともに粘質のブロックを含む不均質な土質で構成されている。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀・甕等の小片が少量出土している。図化したものは土師器小皿(7)と土釜(6)の2点である。(7)は口縁部の1/6程度が遺存している。復元口径9.4cm、器高1.2cmを測る。色調は淡褐灰色で、胎土は精良な粘土が使用されている。(6)は土釜の鍔部分の小片である。鍔はほぼ水平方向に伸びており、端部に外傾する面を持つ。鍔裏面に煤が付着している。2点共に小片であるため不明な点が多いが、概ね平安時代末期から鎌倉時代初頭の所産と推定される。

### 溝(SD)

#### SD-2

第2トレンチの2D区から第3トレンチの1C区にかけて蛇行して北流する。検出長 $6.5 \,\mathrm{m}$ 、幅 $0.7 \sim 1.0 \,\mathrm{m}$ 、深さ $0.3 \,\mathrm{m}$ を測る。埋土は $3 \,\mathrm{m}$ を成る。遺物は土師器小皿・土釜等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

#### SD-3

第2トレンチ東端の2E区で検出した。本来の構築面は第4層上面である。南北方向に伸びるもので、検出長1.6m、幅0.38m、深さ0.1mを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### SD-4

第3トレンチの1D・E区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長1.3m、幅0.68m、深さ0.08mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器の小片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

### SD-5

第3トレンチの1D区で検出した。南北方向に伸びるもので、北端でSD-7と合流している。検出長1.28m、幅0.2m、深さ0.1m前後を測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### SD-6

第3トレンチの1D区で検出した。北北西に伸びるもので、北端は調査区内で終息している。 検出長1.0m、幅0.24m、深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトの単一層 である。遺物は瓦器椀の小片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

#### SD-7

第3トレンチの1B区~1D区の北部を東西方向に伸びるもので、西端でSD-8を切り、屈曲し北に流路を変えているほか、東端はSD-5に合流している。なお、この溝を基点として北に伸びる3条の小溝が存在している。全長9.7m、幅0.2m、深さ0.05~0.1mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトである。遺物は土師器・須恵器・瓦器等の小片が極少量出土している。須恵器杯身(5)を図化した。(5)は遺存率が1/10程度の小片である。丸味を持って水平方向に伸びる受部から、立ち上がりが内傾し、口縁端部は丸く終わる。TK209型式(7C初頭)に対比されよう。ただ、挟雑遺物であり帰属時期を示すものではない。

#### SD-8

第 2トレンチの 2 B区で屈曲して流路を南北方向に変えた後、第 3トレンチ 1 B区にかけて伸びるものである。各遺構との関係では、第 2トレンチで S D - 9 を切り、第 3トレンチの北端は S D - 7 に切られている。検出長は東西方向が 1.8 m、南北方向が 5.8 m を測る。幅は 0.4  $\sim$  1.2 m、深さ 0.1 m を測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトとオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトの互層である。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

#### SD-9

第2トレンチで検出した。 2 A区から 2 C区にかけて直線的に伸びるもので、SD-11を切り SD-8 に切られる関係にある。検出長8.6m、幅 $0.2\sim0.48$ m、深さ0.12mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトである。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

#### SD - 10

第2トレンチで検出した。2A区~2B区にかけてSD-9の南側に並行して伸びるもので、南肩は調査区外に伸びるため幅等は不明である。検出長4.6mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトである。遺物は土師器小皿、瓦器椀、屋瓦等の小片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

#### SD-11

第2トレンチの2A区で屈曲して流路方向を南北方向に変えるもので、北部の第3トレンチの1A区に続いている。検出長5.4m、幅0.4~0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は粘質シルトを主とする2層で構成されている。遺物は土師器土釜、瓦器椀等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

#### SD - 12

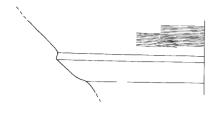
第3トレンチ1B区の北部で検出した。東西方向に約0.6m伸びた後、西端で屈曲し流路を 北に変えている。検出長0.56m、幅0.18m、深さ0.02mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混 砂質シルトである。遺物は土師器片が1点のみ出土している。

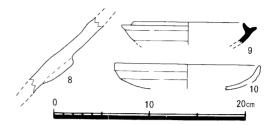
### 小穴(SP)

小穴は全体で11個( $SP-1\sim SP-11$ )を検出した。大半が調査区の中央部から東部にかけて分布している。調査区別の内訳は第1トレンチで2個( $SP-1\cdot SP-2$ )、第2トレンチ5個( $SP-3\sim SP-7$ )、第3トレンチ4個( $SP-8\sim SP-11$ )である。上面の形状では、SP-4が楕円形を呈する以外は円形を呈している。規模は、径 $0.16\sim 0.4$ m、深さ $0.04\sim 0.14$ mを測る。埋土はSP-4が灰色砂質シルトであるが、他は暗灰色砂質シルトである。埋土が暗灰色砂質シルトのものは、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が高いが、限定された範囲のため規則性は見出せなかった。そのうち、遺物の出土が確認されたものは、 $SP-1\cdot SP-2\cdot SP-6\cdot SP-8\cdot SP-10\cdot SP-11$ で、土師器・須恵器・瓦器が出土しているが全て小片で量的にも少なかった。図化し得たものは、SP-6から出土した須恵器杯身(3)の1点のみである。

#### ・遺構に伴わない遺物

第3層および第4層から古墳時代中期末~近世に比定される土器類が少量出土している。前述したように中世後半期以降は主に耕地としての土地利用が計られており、度重なる掘削・削平により遺物包含層が攪拌を受けたためか、出土した土器類も磨耗した小片が大半を占めた。図化し得たものは朝顔形埴輪(8)、須恵器杯身(9)、土師器中皿(10)の3点である。(8)は朝顔形埴輪の頸部から口縁部にかけての小片である。夕ガの幅は約4㎝を測り、一般にみられるものに比して幅広である。器面調整は口縁部外面がヨコハケ、内面にはナデが施されている。白灰色の色調で、胎土中に石英・長石の細粒が多量に含まれているほか、チャート粒が散見される。第2トレンチ2C区第4層出土。(9)は須恵器杯身で、口縁部の1/8程度が遺存している。水平方向に伸びる受部から、立ち上がりが内傾して短く伸びる。TK209型式(7世紀初頭)に対比されよう。第3トレンチ1D区第4層出土。(10)は鎌倉時代に比定される土師器の中皿である。全体の1/6程度が遺存している。第3トレンチ1E区第4層出土。





第6図 第4層出土遺物実測図

## 4) 出土遺物観察表

・凡例 粒径-L1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-◎多量 ○多い △少ない ▲希少 ※赤-赤色酸化土

								400.		•	حد ت		_ <del>= π</del> υ	26.01	から取し工
遺	図		法量(cm)	調整・手法	色調			胎 土		土				残	
物	版	器種	口径	外面	外面	素	長	石	雲	角	チ	そ	焼成		備考
番	番	新 愽	器高 底径	内面	内面					閃	+	の	保存	存	地区
号	号		() 復元値	r that	PAIRI	質	石	英	母	石	1	他	PRIJ	繂	PES PY
1	Ξ	円筒埴輪	- - - 胴部径(27.0)	外面:胴部B種ヨコハケ。タガョコナデ。 内面:胴部ユビナデ。	淡褐灰色 淡橙色	やや粗	© S   L	© S I L					良好	胴部 小片	S D - 1
2	Ξ	土師器高杯	    	外面:脚部ナデ。 内面:裾部ユビナデ。柱状部シボリメ。	赤褐色 "	精良	s						良好	裾部 2/3	S D – 1
3		須恵器 杯身	ー ー 受部径(13.9)	外面:底体部回転ナデ。 内面:底体部回転ナデ。	青灰色	精良	s s						堅緻	1/10	SP-6
4		須恵器 杯身	(12.4) - - 受部径(14.5)	外面: 立ち上がりおよび底体部 上半回転ナデ。 内面: 立ち上がりおよび底体部 上半回転ナデ。	淡灰色 ″	精良							堅緻	口縁 部 1/8	外面 灰かぶり SD-1
5		須恵器 杯身	(12.2) - - 受部径(15.0)	外面:受部および立ち上がり回転ナデ。 内面:立ち上がり回転ナデ。	青灰色	精良							堅緻	口縁 部 1/6	S D - 7
6		土師器 土釜	- - - 鍔径(30.6)	外面:鍔および体部ヨコナデ。 内面:体部ヨコナデ。	褐灰色 赤褐色	やや粗	O M	O M L					良好	鍔 小片	鍔裏面煤付 着 S K - 1
7		土師器小皿	(9.3) 1.3 –	外面:口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 ア。 内面:ナデ。	乳灰色 <i>"</i>	良好	∆ M					赤 △ M	良好	口縁 部 1/4	S K - 1
8	Ξ	朝顔形埴輪	_ _ _	外面:口縁部ヨコハケ。頸部ヨコナデ。 ウ面:ナデ。	白灰色 ″	やや粗	© S L	⊚ S L			L L		良	口縁部 小片	第2トレン チ2C区 第4層
9		須恵器 杯身	(11.4) - - 受部径(14.1)	外面:立ち上がり、受部、底体 部回転ナデ。 内面:立ち上がりおよび底体部 回転ナデ。	淡青灰色 ″	精良	<b>≜</b> S						堅緻	口縁 部 1/8	第3トレン チ1 D区 第4層
10		土師器 中皿	(15.2) (2.6)	外面:口縁部ヨコナデ。底部ナ デ。 内面:口縁部ヨコナデ。底部ナ デ。	淡褐灰色 "	精良							良好	口縁 部 1/6	第3トレン チ1E区 第4層

#### 3. まとめ

今回の調査では、古墳時代後期中葉(6世紀中葉)と平安時代末期~鎌倉時代初頭の遺構が 検出された。

古墳時代後期中葉の遺構については、溝1条(SD-1)を検出している。調査地に北接する地点で昭和63年度に大阪府教育委員会により、実施された府道拡張工事に伴う発掘調査(西健工 側調査区)では、SD-1に続く溝(SD-18)が確認されており、今回の調査と同様、円筒埴輪片の出土が確認されている。さらに、調査地の南東約40m地点で行なわれた小阪合遺跡第4次調査(KS84-4)の第10調査区で埴輪円筒棺(5世紀初頭)が検出されている他、南東約80m地点で八尾市教育委員会により実施された発掘調査(92-067)でも、円筒埴輪片のほ産30m地点で八尾市教育委員会により実施された発掘調査(92-067)でも、円筒埴輪片のほ産30m地点で八尾市教育委員会により実施された発掘調査(92-067)でも、円筒埴輪片のほ産30m地点で八尾市教育委員会により実施された発掘調査(第2-067)でも、円筒埴輪片のほ産30m地点(青山町1丁目)で実施された、小阪合遺跡第8次調査(KS87-8)および第26次調査(KS93-26)では、当該期の居住域が検出されており、当調査地周辺で検出されている墓域と有機的な関係を持つ居住域であった可能性が高い。

平安時代末期~鎌倉時代初頭の遺構については、土坑・溝・小穴等を検出したのみで不明な点が多いが、八尾市教育委員会が事前に行った遺構確認調査では、2 D地区付近で井戸遺構が検出されている他、北接する府道拡張工事に伴う調査においても、当該期に比定される遺構群が多数検出されいる。これらの集落は、おそらく、調査地の南部に存在した当時の主要幹線道路である信貴越道や北東約130m地点に鎮座する式内社の阪合神社を中心に展開した集落であったと推定されよう。

#### 註記

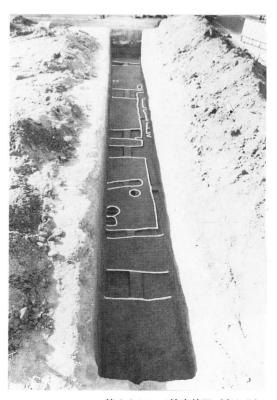
- 註 1 山上 弘 1989 『小阪合遺跡発掘調査・一八尾市南小阪合町所在一』大阪府教育委員会
- 註 2 高萩千秋 1988 『小阪合遺跡(昭和59年度 第 4 次調査報告書)』(財)八尾市文化財調査研究会 報告15 (財) 八尾市文化財調査研究会
- 註3 消 斎 1993「6.小阪合遺跡(92-067)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書』 八尾市文化財報告27 八尾市教育委員会
- 註 4 高萩千秋 1990 『小阪合遺跡〈昭和61年度第 8 次調査報告書〉』(財)八尾市文化財調査研究会報告26 (財)八尾市文化財調査研究会
- 註 5 坪田真一 1994「14. 小阪合遺跡第26次調査(KS93-26)」『平成5年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』 (財) 八尾市文化財調査研究会
- 註 6 吉田野乃 1996「4. 小阪合遺跡 (95-458) の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書 I』 八尾市文化財調査報告33 八尾市教育委員会



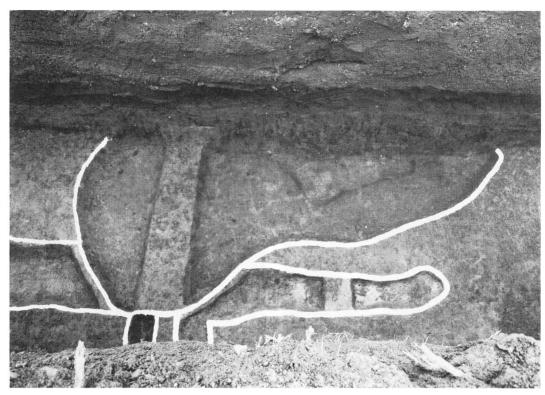
第1トレンチ検出状況(東から)



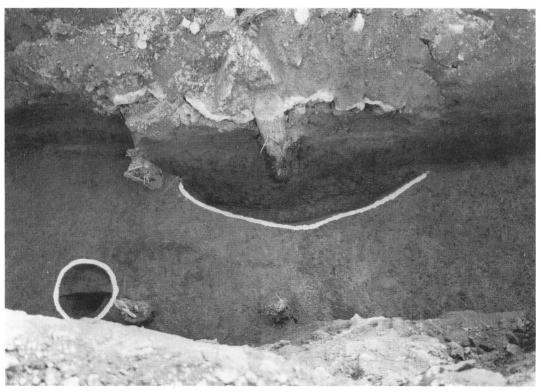
第2トレンチ検出状況 (東から)



第3トレンチ検出状況(東から)



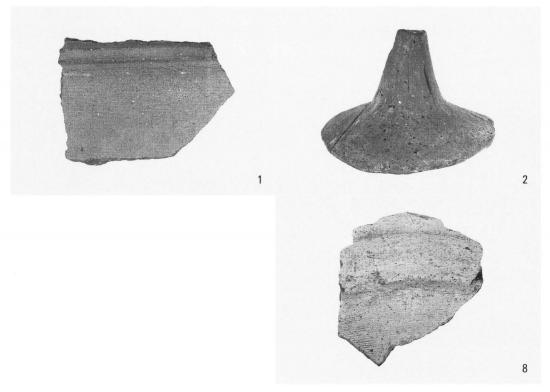
第2トレンチ SD-8・SD-9検出状況(南から)



第1トレンチ SK-1・SP-1 検出状況 (北から)



第3トレンチ SD-1検出状況(北から)



SD-1(1·2)、第4層(8)出土遺物

# Ⅱ 竹渕遺跡第4次調査 (TK95-4)

# 例 言

- 1. 本書は大阪府八尾市竹渕 1 丁目223-1,224-1,225-1,226-1 で実施した共同住宅工事に伴う発掘調査である。
- 1. 本書で報告する竹渕遺跡第埋 4 次調査(T K 95-4)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋38-3号 平成7年3月31日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が(株)平野木材住宅から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成7年6月19日から6月30日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。 調査面積は64㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・赤澤茂美・島野鋼一・中村百合・ 西岡千恵子・市森千恵子が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウトー中村・西岡、トレースー市森が行った。
- 1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

# 本文目次

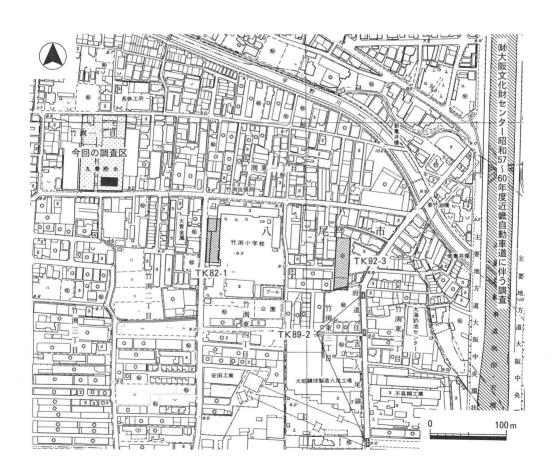
1		13	: じめに・・・・・・・15
-	•	10	10
2		調	]査概要
	1	)	調査の方法と経過・・・・・・・・16
			基本層序
	3	)	検出遺構と出土遺物・・・・・・19
	4	)	遺構に伴わない出土遺物・・・・・19
	5	)	出土遺物観察表21
			とめ
_		-	

# Ⅱ 竹渕遺跡第4次調査 (TK95-4)

### 1. はじめに

竹渕遺跡は八尾市西部の竹渕1~5丁目、竹渕東1~4丁目に広がる弥生時代から平安時代に至る遺跡である。地理的には旧大和川の主流の一つである長瀬川から分岐し、北西方向に流れる平野川の左岸に広がる沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には東に平野川を挟んで亀井遺跡・跡部遺跡、南に長原遺跡(大阪市)、北に久宝寺遺跡・加美遺跡(大阪市)が隣接している。

当遺跡の契機は昭和57年度、八尾市教育委員会が市立竹渕小学校校舎増築に先だって行われた遺構確認調査で発見された遺跡である。発掘調査(TK82-1)は当調査研究会が実施し、現地表下(G.L.)1.8mの地層から古墳時代後期に比定される集落遺構(竪穴住居・土坑・溝など)が存在することが判明した。しかし、その後しばらくは発掘調査もなく当遺跡の状況を掴



第1図 調査地位置図及び周辺図

むことができなかったが、平成元年度、当地区で公共下水道工事が行われることになり、それに伴う発掘調査(T K89-2)が実施された。その結果、現地表下4.5m前後で弥生時代前期の遺構(土器棺)。また、平成4年度、工場建設に伴う発掘調査(T K92-3)で弥生時代前期の土坑・古墳時代後期の方墳・平安時代中期の土坑などが検出された。これらの調査成果により、竹渕遺跡が弥生時代から近世に至る集落遺跡であることが認識された。

今回の発掘調査は当調査研究会が竹渕遺跡内で実施した第4次調査(TK95-4)にあたる。 以下、今回の調査について記す。

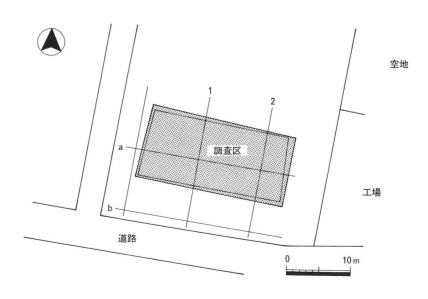
## 2. 調査の概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に先だって実施したものである。当調査地は市教育委員会が 事前の遺構確認調査を実施し、調査地の北部は河川の埋没した地層と思われる砂層の堆積。南 部では古墳時代前期の遺物包含層が厚く堆積していることが確認された。その結果により、調 査地南部で建築される部分を対象とした。調査区は検出した地層が深く、隣接地の建物への影響などを考慮し、建築基礎で破壊される部分に設定した。

掘削は調査指示書に基づき、現地表下 3.2mまでを機械掘削し、以下、0.4mは人力掘削を 行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査区の地区割りについては、調査区西部中央に任意の基点を設定した。調査区設定方向に合わせ、調査区の記録保存の作成に使用した。主軸はN-10°-Eをはかる。



第2図 調査区設定図

### 2) 基本層序

調査区で検出した土層内で普遍的に見られる26層を摘出して基本層序とした。以下、各層に ついて記す。

- 第1層 盛土。層厚40㎝前後。共同住宅建設前は工場跡(丸善撚糸工場)。
- 第2層 旧耕土。層厚10~20cm。近世以降の耕作土である。既設(工場)の建造物の基礎に より削平及び撹乱されている。
- 第3層 床土。層厚5~10cm。旧耕土と同様、削平及び撹乱を受けている。
- 第4層 暗灰褐色砂礫混粘質土。層厚20~40cm。平安時代中期から後期の遺物を含んだ土層である。
- 第5層 淡褐灰色粘質シルト。層厚15~30cm。
- 第6層 褐灰色粘質シルト。層厚10~20cm。
- 第7層 淡灰褐色微砂混シルト。層厚20~40cm。
- 第8層 褐灰色シルト。層厚50~100cm。
- 第9層 褐灰色粘質シルト。層厚20~25cm。
- 第10層 明茶灰色粘質シルト。層厚5~50cm。
- 第11層 淡青灰色シルト。層厚20cm。
- 第12層 青灰色粘質シルト。層厚20~40cm。
- 第13層 青灰色粘土混微砂。層厚15~30cm。洪水層。古墳時代後期の遺物が少量含まれる。
- 第14層 暗灰色粘土混微砂。層厚20cm。
- 第15層 灰青色微砂混粘土。層厚10~30cm。
- 第16層 青灰色粘土混粘土。層厚15~30㎝。
- 第17層 青灰色粘土。層厚20~25cm。
- 第18層 暗灰色粘土。層厚20~30cm。
- 第19層 暗灰色粘質土。層厚15~20cm。粘着のある粘土で、炭化物が少量含まれている。
- 第20層 灰黒色粘土。層厚20~60cm。古墳時代前期(布留式古相)の遺物を含む。調査区北東部で盛り上がったような堆積状況である。
- 第21層 暗灰色シルト混粘土。層厚5~10cm
- 第22層 暗灰青色粘土。層厚20cm。
- 第23層 暗灰色粘質シルト。層厚20~40cm。
- 第24層 青灰色粘土。層厚20㎝。南西部で堆積する。
- 第25層 暗青灰色粘土。層厚20cm。白色魂が班点状にみられる。庄内期の土器を少量含む。
- 第26層 灰色細砂混微砂。層厚30cm以上。古墳時代前期のベース面で、南西が低い。

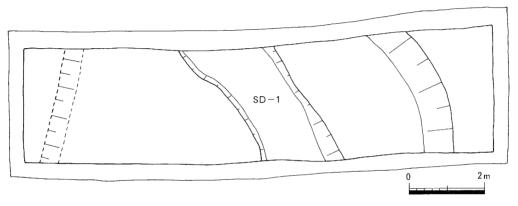
暗灰色粘質士 灰黒色粘土 暗灰色シルト混粘土 暗灰音色粘土 暗灰色粘質シルト 青灰色粘土 南灰色粘土 での絶対 での絶対に続い	
19 20 21 22 23 24 25 25 26	
明茶灰色粘質シルト 淡青灰色シルト 青灰色粘質シルト 青灰色粘土混微砂 暗灰色粘土混微砂 下青色微砂混粘土 青灰色粘土混粘土 青灰色粘土混粘土 青灰色粘土混粘土	
11 11 11 11 11 11 11 12 11 14 11 14 11 14 11 14 14 14 16 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17	
盛士 旧耕士 床士 暗灰褐色砂礫混粘質士 淡褐灰色粘質シルト 褐灰色粘質シルト 褐灰色粘質シルト 淡灰褐色微砂泥シルト 淡灰褐色微砂泥シルト	を一つに
- 7 C 4 L 9 V 8 D	0

第3図 北壁断面図

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下3.2~3.9m(標高5.4~6.0m)付近に存在する第26層上面で古墳時代前期(庄内期~布留期)の溝状遺構(SD-1)を検出した。また、北東部の角で第20層の高まり、その下層面切り込む土坑状の窪みが断面で観察された。遺物は第20層~第22層内からコンテナ箱1箱程度が出土している。そのほか、第3層で平安時代の土器片、第13層~第15層の古墳時代後期の土器片が少量出土している。





第4図 調査区平面図

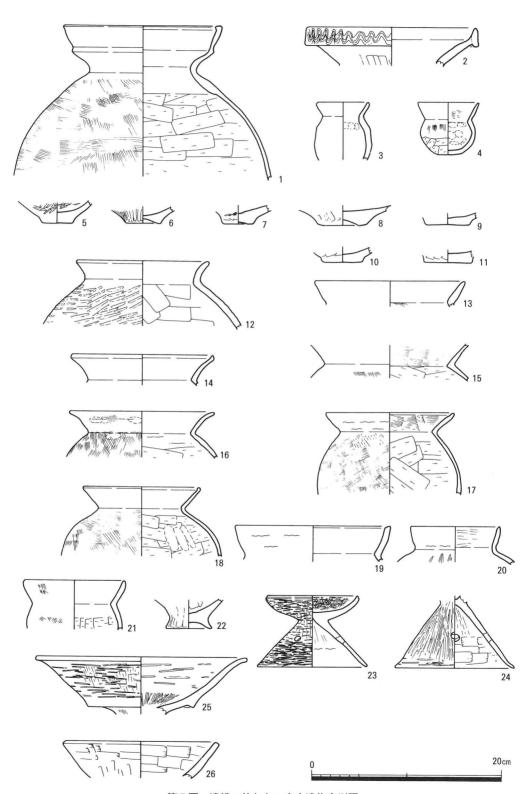
### 溝状遺構

#### SD-1

調査区の中央で検出した。北東の高まり部分から南西に落ち込み、南西角で少し上がっている。深さは60cmで、最深部面の標高は約(T.P.+5.4m)を測る。堆積土は暗灰色粘質土・灰黒色粘土・暗灰青色粘土である。遺物は灰黒色粘土より布留式古相に比定される小型丸底壺・器台・布留式甕などの破片が少量出土している。また、北部溝底より木製品1点を出土した。全長89cmで丸木を4分1にカットしたものである。径7~8cmで片側端部に長さ20cmにわたり、一辺2.5cm及び3.5cmの方形に加工し、握りやすいように細く加工を施している。この木製品の用途等については現在のところ不明である。

#### 4) 遺構に伴わない出土遺物

第2層・第10層・第20層内で出土した。第2層は平安時代後期に比定される土師器が少量含まれている。第10層は古墳時代後期に比定される土器片がごく少量含まれている。第20層は古墳時代前期に比定される土師器を少量出土した。図示できたものは26点である。古墳時代前期に比定される二重口縁壺(1)・壺(2)・小型壺(3)・小型丸底壺(4)・壺(5~11)・甕(12~20)・鉢(21・22)・器台(23・24)・高杯(25・26)である。



第5図 遺構に伴わない出土遺物実測図

## 5) 出土遺物観察表

□ 土田湖 口胚 16.4 日本的人科学でファナット 内 元 説以来色 いいに下のがれを多数合	5) 出	土遺物額	元宗衣							
日本	遺物番号	器種	法量	口径			胎土	焼成	遺存状況	備考
1 日本   17.4     17.4   17.5   17.			口径	16, 4	内面肩部ナデ・他へラケスリ	11.0CM		良好	2/5	煤付 着
1/2   1/	<u>=</u>	同上	口径	17. 4	文 ( 5 条 )、内面ヨコナデ。   体部外面ヨコナデ•ヘラナデ、	1	3mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母・チャート)	良好	□縁1/6	
1	<u>3</u>		口径 最大	5.2 径 6.0	部外面ナデ、内面ナデ・指頭	淡黄灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母・石英)	良好	1/2	
1	<u>4</u>	同上	口径器高	6. 2 5. 6	│ケナデ。体部外面上部ハケ │ナデ、下部ヘラケズリ、内	一内:乳橙茶灰	2mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母・石英)	良好	2/3	黒班有り
10   成後 3.0   本書の面の今まから、	5	壶 土師器	底径	2.8	体部内外面へラミガキ。底 部外面ヨコナデ		3mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母)	良好	底部完形	
10   DE   DE   DE   DE   DE   DE   DE   D	6	同上	底径	3. 4	体部外面へラミガキ、底部 ナデ、内面へラナデ・工具痕 を有す	外: 黒灰色 内: 乳灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む(長石・石英)	良好	底部2/3	
10	7	同上	底径	3, 0	体部外面へラミガキ・ヘラ押さえ、底部ナデ。内面へラナデ・工具痕を有す	淡灰黄色		良好	底部ほぼ 完形	
10   同上   既経 4.0   能経 4.0   に成任	8	同上	底径	4.8	デ、底部指押さえ。内面へ	淡黄灰色	む(長石・雲母・石英・チャー	良好	底部完形	
10   同上   底径 4.0   底部外面 コナデ、底部	9	同上	底径	4.4	体部外面ヨコナデ、底部ナ デ。内面ヘラケズリ	外: 黒灰茶褐色 内: 淡赤黄茶色		良好	底部ほぼ	
12	10	同上	底径	4. 0	底部外面ヨコナデ、底部ナ デ。内面ヘラナデ・工具痕を 有す	外:淡灰黑色		良好	底部ほぼ	
13   同上   口径 15.6   口線的外面ヨコナデ。体	11	同上	底径	5, 0	体部外面へラナデ、底部へ ラミガキ。内面へラナデ	淡黒灰色	1mm以下の砂粒を少量含む(長石・石英)	良好	底部完形	
14   同上   日径 14.6   日線部内外面ヨコナデ。体   際次案褐色   おし、   日線18/8   名子   日線   日線   日線   日線   日線   日線   日線   日		獲 土師器	口径	13, 6	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面タタキ (3本)、内面 ヘラナデ	外:暗灰赤茶色 内:淡黄灰色	3mm以下の砂粒を多量含	良好	口縁1/10	煤付 着
14   同上   口径 14.6   口線部内外面ヨコナデ。体	13	同上	口径	15. 6	口縁部内外面ヨコナデ。体 部内面ハケナデ	淡灰茶色		良好	口縁1/8	黒斑 有り
15   同上	14	同上	口径	14.6	口縁部内外面ヨコナデ。体 部内面ヘラケズリ	淡灰茶褐色	4mm以下の砂粒を多量含	良好	口縁1/8	煤付
日  日  日  日  日  日  日  日  日  日  日  日  日	15	同上			ハケナデ。体部外面ハケナ	灰黄褐色	1mm以下の砂粒を微量に	良好	□縁1/6	
18	16 =	同上	口径	15.0	圧痕・接合痕残存、内面ハ   ケナデ。体部外面ハケナデ   (7本)、内面上部ナデ・接合   痕残存。他ヘラケズリ	外:淡灰茶褐色 内:暗茶褐色	む(角閃石・長石・石英・	良好	口縁1/6	
18		同上	口径	13.4	口縁部外面ヨコナデ・接合痕 残存、内面ハケナデ。体部 外面タタキ (5本)後ハケ ナデ(8本)、内面ヘラケズリ	淡黄灰褐色	3mm以下の砂粒を少量含む(角閃石・長石・雲母)	良好	口縁完形	
19	18 =	同上	口径	12.0	口縁部外面ヨコナデ、内面 板ナデ。体部外面ハケナデ (6本)、内面肩部ナデ。他	淡黄灰色	む(角閃石・雲母・石英・	良好	口縁・ 体部1/8	
1	19	同上	口径	16.0	残仔、内面ヨコナデ。 体部	外:淡灰色 内:淡茶灰色		良好	口縁1/8	
21     口径 10.4     小ケナデ、内面ヨコナデ。 体部外面ハケナデ、内面上 部ナデ。他へラケズリ (素灰色)     淡茶灰色     3mu以下の砂粒を微量に含む (長石・石英・雲母・日東・日東)     良好     口縁1/8       22     同上     口径 9.4 底径 11.4 家高 7.6     外面へラナデ、底部ナデ。 内面へラナデ (工具裏有す)     乳茶灰色     7mu以下の砂粒を少量含む (長石・雲母・石英・角 設合。 (長石・雲母・石英・角 関石)     良好     底部ほぼ完形       23     底径 12.4     外面へラケズリ後へラミガキ・ 持合。 (大元・大利有す 京・三方孔有す     暗灰赤茶褐色     1mu以下の砂粒を微量に含む (長石・雲母・角)     良好     ほぼ完形       24     同上     底径 12.4     脚部りほり目・ナデ・接合痕域 不、三方孔有す     溶灰茶色     2mu以下の砂粒を少量含 む (長石・雲母・チャート)     良好     脚部ほどの・ラナデ、四方孔有す       25     口径 22.0     「本部外面へケナデ後へラミガキ ガキ、内面へラミガキ     暗黄灰茶色     2mu以下の砂粒を微量に含む (長石・雲母・チャート)     良好     「本部/2       26     同上     口径 15.6     「本部外面へラリガラス後へラ 日本区の 3mu以下の砂粒を少量含 日本区の 15.10     日本区の 15.10 <t< td=""><td>20</td><td>同上</td><td>口径</td><td>9.2</td><td>口縁部外面ヨコナデ・接合 痕残存、内面ハケナデ。 体 部外面へラミガキ、内面ナデ</td><td>淡茶灰色</td><td>含む(長石・石英・チャー</td><td>良好</td><td>口縁1/5</td><td></td></t<>	20	同上	口径	9.2	口縁部外面ヨコナデ・接合 痕残存、内面ハケナデ。 体 部外面へラミガキ、内面ナデ	淡茶灰色	含む(長石・石英・チャー	良好	口縁1/5	
22   同上   底径 11.4   内面へラナデ、以記がナテット   大部に 7.6   内面へラナデ、以記がナテット   大部に 7.6   内面へラナズリ後へラミガキ・	21		口径	10.4	ハケナデ、内面ヨコナデ。     体部外面ハケナデ、内面上	淡茶灰色	3㎜以下の砂粒を微量に 含む(長石・石英・雲母)	良好	口縁1/8	
1mm以下の砂粒を微量に   24   接合度核存、内面环部放射状へ   1mm以下の砂粒を微量に   25   日径 22.0   「本部外面へラミガキ   25   日径 22.0   「本部外面へラミガキ   100以下の砂粒を微量に   25   日子 22.0   「本部外面へラミガキ   100以下の砂粒を微量に   25   日子 22.0   日子 20.0   日	22	同上	底径	11.4	外面へラナデ、底部ナデ。 内面へラナデ(工具痕有す)	乳茶灰色	む(長石・雲母・石英・角)	良好	底部ほ ぼ完形	
25	23 Ξ		底径	12.4	接合痕残存、内面坏部放射状へ ラミガキ後水平にヘラミガキ、 脚部しぼり目・ナデ・接合痕残	暗灰赤茶褐色		良好	ほぼ完形	
25   日径 22.0   「本部外面ハケナデ後へラミ   暗黄灰茶色   2mm以下の砂粒を微量に   良好   大部1/2   26   同上   日径 15.6   「本部外面へラ押さえ後へラ   日本区は   3mm以下の砂粒を少量含   日本区は   1.5   1.	24 =	同上	底径	12.4	脚部外面へラミガキ、内面 ヘラナデ、四方孔有す	淡黄灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母・チャート)	良好	脚部ほぼ完形	
26 同ト 口径 15.6 坏部外面へう押さえ後へう 明太正存 3m以下の砂粒を少量含 内皮 になり	25 =		口径	22.0	坏部外面ハケナデ後ヘラミ ガキ、内面ヘラミガキ	暗黄灰茶色	2m以下の砂粒を微量に 含む(長石・雲母・赤褐色 酸化粒)	良好		
	26	同上	口径	15.6		明茶灰色		良好	坏部1/5	

#### 3. まとめ

今回の発掘調査は小面積で、しかも掘削深度が深いなどの諸条件の中の調査であり、詳細に 遺跡状況を把握することが困難であった。しかし、古墳時代前期の溝状遺構など遺構の検出。 コンテナ箱にして2箱分の遺物を出土することができた。以下、周辺の調査成果と今回の調査 結果について記す。

周辺の調査状況では調査区から南東部約150m地点で当調査研究会が実施している第1次(TK82-1)調査地がある。この調査では古墳時代後期に比定される集落遺構(竪穴住居・土坑・溝など)を検出、さらに南東部へ250~300m地点では第2次(TK89-2)・第3次(TK92-3)調査地があり、その調査成果では弥生時代前期~中期の墓域・古墳時代後期の墓域・平安時代の土坑などが検出されている。また調査区から南西部へ約100m地点で同年度、市教育委員会が下水道工事に伴う調査で実施した結果、古墳時代前期の遺物を含む土層を検出している。調査地敷地内では遺構確認調査の結果、調査区北部で河川跡と考えられる砂層が検出されている。これらの周辺調査と当調査区の成果から総合すると当調査区で検出した古墳時代前期の時期のものは、南西側への広がりが想定されるが、東部と北部にはこの時期の遺構の広がりがあまりないものと考えられる。南部については未調査であり、今後の調査にゆだねる。

今回の調査で特筆できることは調査区北東部で確認された第20層の高まりである。堆積状況や埋没状況から推測すると古墳の墳丘の可能性が強い。また、調査区中央で検出された溝状遺構は墳丘を巡る周濠の一部と考えられる。しかし、前文でも述べたように検出深度が深く、調査面積が狭いため拡張することが不可能であり、その詳細なことが掴めず、古墳として取り扱わなかった。今後、隣接地で調査を行う機会があれば、これらの検出遺構が多少となり、明白になると考える。

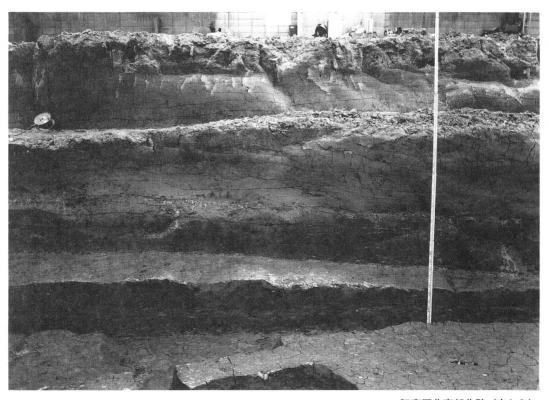
また、今回の調査では断面観察のみであったが上層(第3層)で検出された層内より平安時代中期頃の黒色土器・土師小皿などが含まれていた。これらの遺物や堆積状況からみて、当地周辺には集落域の存在を示唆するものであり、この時代についても注意を払わなければならないであろう。

#### 参考文献

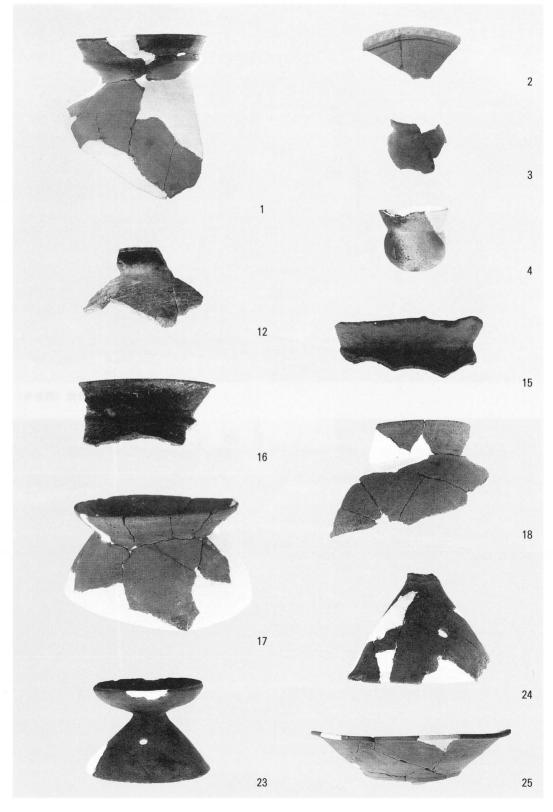
- 高萩千秋 1989「II 竹渕遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研 究会報告23
- 坪田真一 1992「Ⅲ竹渕遺跡(第2次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』(財)八尾市文化財調査 研究会報告35
- 原田昌則 1993「19.竹渕遺跡第3次調香(TK92-3)」『平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』



調査区全景(西から)



調査区北東部北壁(南から)



# Ⅲ 竹渕遺跡第5次調査 (TK95-5)

# 例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市竹渕 4 丁目33-1 で実施した共同住宅建築工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する竹渕遺跡第5次調査(TK95-5)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋179-3号 平成7年8月29日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が岸田 貢氏から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成7年9月25日から10月4日(実働8日間)にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は135㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・西田真紀が参加した。
- 1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成8年9月30日に完了した。
- 1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測ー岸田 遺物レイアウトー原田 図面トレースー北原 清子 遺物写真撮影ー原田が行った。
- 1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

# 本文目次

1.	l	はじめに25
2.	iii I	周査概要・・・・・・26
	1)	) 調査の方法と経過
2	2)	) 基本層序27
;	3)	) 検出遺構と出土遺物・・・・・・29
1	1)	) 出土遺物観察表
3.	o to	まとめ37

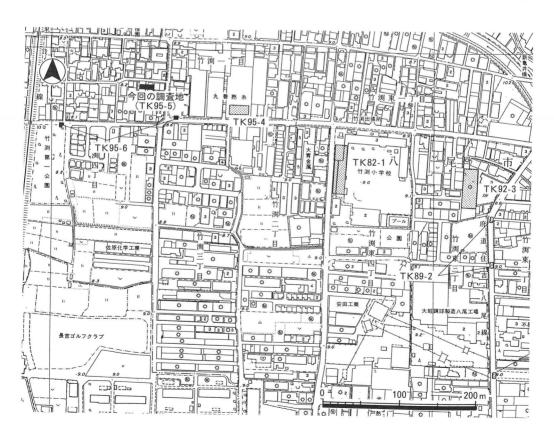
# Ⅲ 竹渕遺跡第5次調査 (TK95-5)

### 1. はじめに

竹渕遺跡は八尾市西部の竹渕、竹渕  $1\sim5$  丁目、竹渕東  $1\sim4$  丁目に広がる弥生時代前期~平安時代に至る複合遺跡である。地理的には平野川の左岸一帯に広がる沖積地上の標高 9 m付近に位置している。

当遺跡周辺では、東に亀井遺跡、北東に久宝寺遺跡、南東に城山遺跡(大阪市)、北に加美 北遺跡・加美遺跡(大阪市)が存在している。

当遺跡は、昭和57年度に八尾市教育委員会により実施された、市立竹渕小学校の校舎建て替え工事に伴う遺構確認調査で発見された遺跡である。この調査結果を受けて当調査研究会が実施した第1次調査(TK82-1)では、古墳時代後期の居住域に関連した遺構・遺物が検出され、当該時期の集落の存在が明らかとなった。その後、平成元年度には竹渕東2丁目で公共下水道工事に伴う第2次調査(TK89-2)が実施され、弥生時代前期~中期の遺構・遺物が検



第1図 調査地周辺図

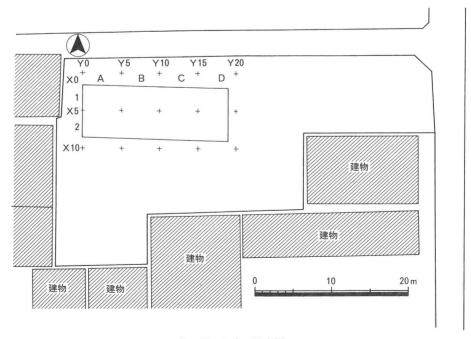
出されているほか、平成4年度に竹渕東3丁目80-3で行われた工場建設に伴う第3次調査(TK92-3)では、弥生時代前期の土坑・古墳時代後期の方墳・平安時代中期の土坑などが検出されている。さらに、竹渕1丁目223-1他で平成7年度に行った第4次調査(TK95-4)では、古墳時代前期(布留式古相)の溝状遺構が検出されている。

今回の発掘調査は、竹渕4丁目33-1で計画された共同住宅建築工事に伴うもので、八尾市 教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、事業者・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化 財調査研究会との三者間で取りかわした協定書締結後、現地調査を実施した。

### 2. 調査概要

### 1)調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建築に先だって実施したもので、建物の建築予定地に東西幅19m、南北幅7mの調査区を設定した。しかし、市教育委員会による遺構確認調査で調査最終深度が現地表下3.0mに達し、しかも多量の湧水が予想されたため、隣家への影響等を考慮した調査方法を選択した結果、下幅で東西幅15m、南北幅3m程度の調査規模となった。調査の地区割りは、調査地の北西隅のX0・Y0地点を基点として東西20m、南北10mにわたって設定した。一区画の単位は5m四方で、東西方向はアルファベット(西からA~D)、南北方向は算用数字(北から1~2)で示し、地区の表示は1A~2D区と呼称した。地点の表示には、東西線(X0~X10)、南北線(Y0~Y20)の交点の数値を使用した。



第2図 調査区設定図

掘削に際しては、現地表下2.5m前後までを機械掘削した後、以下0.5m前後については層理にしたがって人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下2.4~2.8m(標高6.0~5.7m)で古墳時代中期末から後期初頭の遺物を包含する第 9 層の存在が確認されたほか、第10層・第11層上面(標高5.8~5.7m)では、古墳時代中期末から後期初頭に比定される土坑 6 基(S K - 1 ~ S K - 6)、小穴 5 個(S P - 1 ~ S P - 5)を検出した。なお、第 4 層上面を構築面とする焼土坑を 1 基検出している。遺物の総量はコンテナ 2 箱程度である。

### 2) 基本層序

調査地の層序については、古墳時代中期末の遺物包含層である第9層が形成された後、調査地一帯は水性粘土である第8層が厚く堆積しており、その上層は極細粒砂~粗粒砂を主体とする河川堆積土層である第7層を挟んで上層まで比較的安定した砂質シルトが堆積していた。遺構は第10層・第11層上面で古墳時代中期末~後期初頭に比定される土坑・小穴が検出されたほか、第4層上面を構築面とする平安時代中期以降に比定される焼土坑が北壁面で確認されている。また、北壁のY15.5地点では第11層から第8層上面に達する噴砂痕が確認されている。ここでは、普遍的に存在した11層を摘出して基本層序とする。

- 第0層 客土。層厚0.3~0.7m。上面の標高はT. P+8.5m前後である。
- 第1層 N5/ 灰色砂質シルト。旧耕土。層厚0.1~0.2m。
- 第2層 10GY 6/1 緑灰色砂質シルト。床土。層厚0.05~0.1m。
- 第3層 2.5 Y 6/2 灰黄色砂質シルト。層厚0.4 m 前後。
- 第4層 2.5 Y 7 / 4 浅黄色砂質シルト。層厚0.2~0.45m。上面で焼土坑を確認。
- 第5層 2.5 Y 6/3 にぶい黄色砂質シルト。層厚0.2~0.3 m。
- 第6層 5 Y 6 / 1 灰色極細粒砂。層厚0.2~0.3 m。
- 第7層 5 Y 8 / 4 浅黄色極細粒砂~粗粒砂。層厚0.1~0.4m。河川堆積層。
- 第8層 10GY 5 / 1 緑灰色粘土。層厚0.2~0.4m。上部には7.5GY明緑灰色細粒砂が堆積している。無遺物層。
- 第9層 N4/ 灰色粘質シルト。層厚0.1~0.4m。炭を含む不均質な土層。5世紀後半から6世紀初頭を中心とする遺物を包含する。
- 第10層 N 4 / 灰色粘土と10GY 7 / 1 明緑灰色砂質シルトの互層。層厚0.1~0.2 m。 不均質 な土層で 5 世紀後半から 6 世紀初頭の遺物を少量含んでいる。上面が遺構検出面である。
- 第11層 10GY 7/1 明緑灰色極細粒砂〜細粒砂。層厚0.6m以上。河川の氾濫に起因する土層で、上面の一部が遺構検出面である。

検出遺構平断面図 第3図

0 1 2 3 2 1 0

### 3) 検出遺構と出土遺物

・第10層、第11層上面検出遺構 土坑(SK)

### SK-1

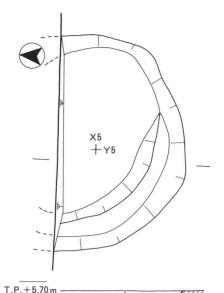
調査区の西端で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分からみて楕円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅0.7m、南北幅1.1m、深さ0.25mを測る。埋土は炭を含むやや不均質な緑灰色シルトの単一層である。遺物は古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器・須恵器の小片が少量出土したが図化し得たものはない。

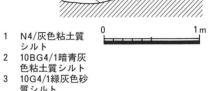
### SK-2

SK-1の東に隣接している。北部は調査区外 1に至るため全容は不明である。検出部分では半円 2形を呈している。検出部分で東西幅2.26m、南北幅1.35m、深さ0.23mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする3層で構成されている。遺物は古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器甕、須恵器杯蓋、韓式系土器の小片が極少量出土している。そのうち図化し得たものは土師器鉢1点(1)である。(1)は小片ではあるが、口縁部の形状や全体に丁寧な作りで器壁が薄い点から、韓式系土器の平底鉢と推定される。なお、内外面の調整にハケナデを使用する点は、平底鉢のなかでも新しい様相を示すものと推定される。

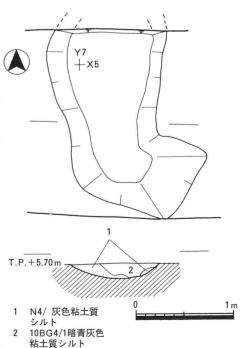
### SK-3

1・2 B区で検出した。不定形を呈する土坑で、 北端は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.95m、 南北幅2.0m、深さ0.18mを測る。埋土は掘形の 形状に沿って2層が堆積している。遺物は古墳時 代中期末から後期初頭に比定される土師器甕の小





第4図 SK-2平断面図

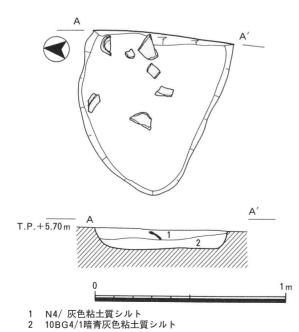


第5図 SK-3平断面図

片が極少量出土したほか、山モモの種子が出土している。図化し得たものは土師器甕1点(5)である。(5)は口縁部の1/12程度の小片である。口縁部中位が強いヨコナデにより明確な段を有している。白灰色の色調で、胎土中に0.5mm程度の砂粒が多量に含まれている。

### SK-4

2 B・C区で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅 0.75m、南北幅0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は上層の灰色粘土質シルトと下層の暗青灰色粘土質シルトの 2 層から成る。遺物は上層から古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器 甕、須恵器杯身・杯蓋・高杯、製塩土器の小片が少量出土している。図化し得たものは 6 点(2・7・8~11)である。その内訳は土師器甕1点(2)・壺1点(7)、須恵器杯蓋2点(8・9)・杯身2点(10~11)である。土師器甕(2)は「く」の字状に屈曲する口縁部を有するもので、口縁端部は内傾した後、肥厚気味に丸く終る。口縁部内面はやや単位の粗い横方向のハケナデ、外面も同様の調整具を使用した縦方向のハケナデが想定される。(7)は球形の体部に上外方に小さく伸びる口頸部が付く土師器短頸壺である。口頸部内面中位にヨコナデによるやや深めの凹線が一周している。(8・9)は須恵器杯蓋で、遺存率は(8)が1/3程度、(9)が1/4程度である。(8)は平らに近い天井部を持つもので、稜は鋭く口縁部はやや内湾気味に垂直方向に下り端部は平らで内傾する面を有している。(9)は口縁部が垂直方向に下り、端部付近で短く外反している。(10・11)は須恵器杯身で共に1/2程度遺存しているが、(11)は立ち上がりを欠いている。(10)は丸味がありやや深目の底体部を持つもので、受部は

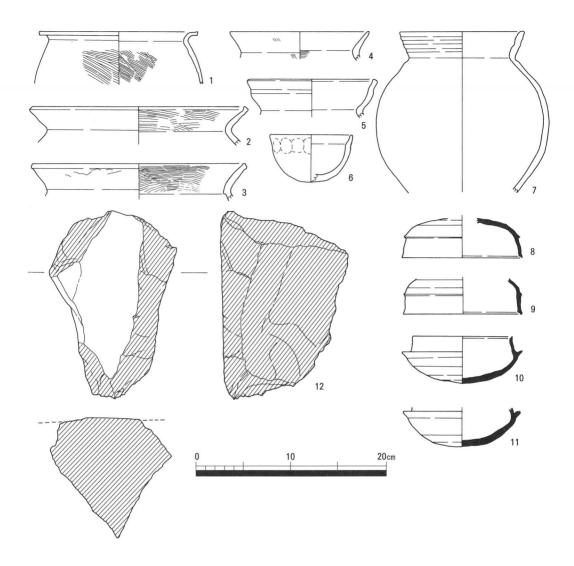


第6図 SK-4平断面図

やや上外方に短く伸びる。立ち上がりは 内傾して伸び、内傾する端部に沈線を有 している。各部の数値は口径10.5cm、器 高5cm、受部径12.8cm、立ち上がり高1. 6cmを測る。底部外面に灰かぶりが認め られる。(10・11) 共に底部外面のヘラ ケズリの方向は時計回りである。図化し た須恵器類は5世紀後半に比定されるT K23型式に対比されよう。

### SK-5

1・2 C区で検出した。不定形を呈する土坑である。東西幅1.45 m、南北幅 1.5 m、深さ0.1 mを測る。埋土はSK-4と同様の2層から成る。遺物は古墳時



第7図 SK-1 (1)、SK-3 (5)、SK-4 (2・7・8~11)、SK-6 (3・6)、 SP-1 (12)、SP-2 (4) 出土遺物実測図

代中期末から後期初頭に比定される土師器甕、須恵器甕の小片が極少量出土している。

### SK-6

調査区南東隅で検出した。南部および東部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出部分で東西幅0.9m、南北幅1.1m、深さ0.2mを測る。埋土はSK-4と同様である。遺物は古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器甕・鉢、須恵器杯蓋・杯身、製塩土器が極少量出土している。土師器甕(3)・土師器鉢(6)の2点を図化した。(3)は土師器甕の口縁部の小片で1/8程度が遺存している。口縁部内面に横方向のハケナデが施されている。(6)は小型の鉢で、手づくね成形のため全体に作りは雑である。

小穴(SP)

### SP-1

2 B地区で検出した。円形を呈するもので、南部でSP-2に切られている、東西径0.5 m、南北径0.45 m、深さ0.23 mを測る。上層の灰色粘土質シルトと下層の暗青灰色粘土質シルトの2層から成る。底部に根石の可能性がある石材が存在している。遺物は根石に使われた石材のほか土師器の小片が1点のみ出土している。石材1点(12)を図化した。縦20cm、横13cm、厚さ13cm程度の大きさで、検出時点では図化した側面の平坦部分を上にして設置されていた。上面に使用痕跡を示す研磨痕が認められ、本来は台石として使用されたものが後に根石に転用されたようである。石材は安山岩である。

### SP-2

円形を呈するもので、北部ではSP-1を切っている。検出部分で東西径0.65m、南北径0.47m、深さ0.26mを測る。埋土はSP-1と同様である。遺物は土師器、製塩土器の小片が極少量と山モモの種子等が出土している。土師器甕1点(4)を図化した。(4)はやや小型の土師器甕で、口縁部の1/8程度が遺存している。体部内面にハケナデ調整が施されている。

### SP-3

SP-2の東に近接している。円形を呈するもので、東西径0.55m、南北径0.47m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器、製塩土器の小片が極少量出土している。

### SP-4

SK-5 の北東部に近接している。円形を呈するもので、東西径 $0.35\,\mathrm{m}$ 、南北径 $0.3\,\mathrm{m}$ 、深  $20.08\,\mathrm{m}$  を測る。埋土はSP-1 と同様である。遺物は出土していない。

### SP-5

2 C地区の南部で検出した。南端は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西 径0.3m、南北径0.23m、深さ0.08mを測る。埋土は暗青灰色粘土質シルトの単一層である。遺 物は出土していない。

### • 第 4 層上面検出遺構

### 焼土坑

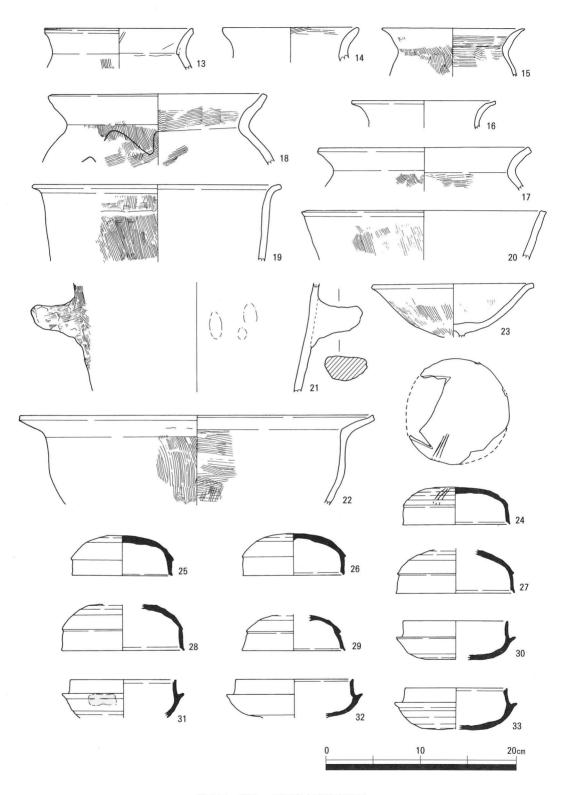
平面的には捉えられなかったが北壁のY12.1~Y12.9地点で焼土坑を1基検出した。検出部分で「U」字形を呈するもので、上部幅0.8m、下部幅0.63m、深さ0.4mを測る。掘形の断面形に沿って火熱により焼土化したにぶい赤褐色砂質シルトが堆積した後、内部には第4層浅黄色砂質シルトが堆積していた。遺物は、底部から骨片が少量出土している。従って、火葬に関連した焼土坑であった可能性が高い。土器類が出土していないため帰属時期は限定できないが、

調査地の東約100m 地点で行われた第4次調査(TK95-4)の調査成果からみて、平安時代 中期以降のものと考えられる。

### 4) 遺構に伴わない出土遺物

第9層および第10層が古墳時代中期後半を中心とした遺物包含層であるが、量的には第9層 出土のものが大半を占めている。

出土遺物の内訳は土師器・須恵器を中心とした土器類の他、山モモの種子等がコンテナ1箱 程度出土している。出土した土器類は小片化したものが大半を占めている。図化した遺物は21 点(13~33)である。その内訳は、土師器甕6点(13~18)・甑3点(19~21)・鉢1点(22) ・高杯1点(23)、須恵器杯蓋6点(24~29)・杯身4点(30~33)である。土師器甕は6点 図化した。全て口縁部を中心とした1/8~1/10程度の小片である。そのうち(13~16)が復元 口径14~17㎝程度の小型品で、(17・18) が復元口径22㎝前後の大型品である。小型品は口縁 部が緩やかに外反するもので、口縁部径と体部最大径がほぼ等しい形態が推定される。大型品 は体部最大径が口縁径を陵駕するもので、小型品に比して器壁は厚い。器面調整は小型品およ び大型品共に、内面が横方向、外面が縦方向のハケナデ調整が行なわれている。(18)の体部 上半にはヘラによる波状文が施文されている。(19~21) は甑の小片である。(19・20) が甑の 口縁部で、口縁部が外反する(19)とやや内傾する面を持つ(20)がある。(21)は把手で、 ほぼ水平に貼り付けられている。幅4.2cm、長さ4.9cm、厚さ2.5cmを測る。器面調整は外面が単 位の密なハケナデ、内面はナデ調整が行なわれている。(22) は大型の鉢で遺存率1/12程度で ある。口縁部内外面ヨコナデ、体部は内面は横方向、外面は縦方向のハケナデ調整が行なわれ ている。(23) は椀形の杯部を有する高杯で、杯部は完存している。口径16.6㎝を測る。口縁 部内外面ヨコナデ、杯部内外面ハケナデを行う。須恵器杯蓋は6点(24~29)図化した。(24) が3/4以上遺存している他は、 $1/8\sim1/4$ 程度である。天井部はおおむね平らに近い形状で、(24)を除けば稜は鋭い。口縁部は下外方に下る(29)を除けば、ほぼ垂直方向に下るものが大半を 占めている。口縁端部は一様に平らで内傾している。(24)の天井部に「Ⅲ」のへラ記号が行 なわれているほか、灰かぶりが(25・26・28)に認められる。なかでも(28)は内外面に灰か ぶりが見られる希なケースである。天井部のヘラケズリの方向は確認できた(25~27)の全て が時計回りである。杯身は4点(30~33)図化した。いずれも遺存率が1/4~1/8程度の小片で ある。受部は共に小さく斜上方に伸びるもので、立ち上がりの方向は直立する(30)以外は内 傾して伸びる。口縁端部は(30)が丸く終るほかは、平らで内傾する面を持つ。(31)の底体 部外面の上半に赤色顔料が塗布されている。灰かぶりが(30)の底体部に認められた。図化し た須恵器類は5世紀後半を中心とするTK23型式に対比されよう。



第8図 第9・10層出土遺物実測図

### 4) 出土遺物観察表

・凡例 粒径-L1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-◎多量 ○多い △少ない ▲希少 ※赤-赤色酸化土

物番	図版		法量(cm)	調整・手法	色調			胎		土.				T-P-	
番	版					1		ЛII						残	
			口径	外面	外面	素	長	石	雲	角	Ŧ	そ	焼成		備考
号 -	番	器 種	器高 底径				-	-	_	閃	+	0	/U +=	存	
-	뮹		() 復元値	内面	内面	历行	7	- 141-	181.		1		保存	cta	地区
	_			H = - C + D		質	石	英	舟	石	h	他	-	率	
1 2	三	韓式系	(16.6)	<b>外面</b> :口縁部ヨコナデ。 体部   ハケナデ。	灰褐色	p	O S	∆ M	<b>≜</b> S		M M			口縁	
	_	平底鉢	_	内面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	茶褐色	や粗	L		~		""		良好	部 1/8	S K - 2
-	-		(00.1)	ケナデ。		-	ъ	-				ļ		1,70	
2	_	土師器	(22.4)	外面:□縁部ヨコナデ。体部ハ ケナデ。	淡茶褐色	l e	∆ S							口縁	
2   -	트	甕	_	内面:口縁部ハケナデナデ。体	"	良好							良好	部 1/6	S K - 4
			(00.4)	部ナデ。	20.000		ļ	-	<u> </u>					1,0	
3		土師器	(22.4)	外面:口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	自	<b>≜</b> S			ĺ				口縁	
3		甕	_	内面:口縁部ハケナデ。	"	良好							良好	部 1/8	SK-6
	-		(115)	bl =		-	-				_			1,76	
4		土師器	(14.5)	<b>外面</b> :口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	糖								口縁	
7	İ	甕	_	内面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	"	精良							良好	部 1 /8	SP-2
	-		(19.0)	ケナデ		-		-						/ 0	
5		土師器	(13.0)	外面:口縁部ヨコナデ。	白灰色	10	© S	© S						口縁	
"		甕	_	内面:口縁部ヨコナデ。	"	粗	M	M					良好	部 1/12	SK-3
-	$\dashv$		(8.5)	   外面:口縁部指頭圧痕。体部ナ	WE TO CO	-		141							
6		土師器	(5.0)	ア山:口豚部指頭圧促。体部ナーデ。	淡灰色 	7	©   S	ĺ						4 /0	手づくね品
		鉢	_	内面:ナデ。	淡灰褐色	や粗	© S L						良好	1/2	SK-6
_	+		(12.8)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ナ	<b>土担</b> 存			_		_					
7 3	Ξ	土師器	(12.0)	デ。 14 かいココナナ。14 かテ	赤褐色	粗	© S I	© S I	© S	© S			n la	1 /4	生駒西麓産
		壺	_	内面:口縁部ヨコナデ。体部ナ	茶褐色	11.11	L	L					良好	1/4	SK-4
			(12.6)	外面:回転ヘラケズリ。回転ナ	灰色	<u> </u>	_								
8 3	Ξ	須恵器 杯蓋	\	デ。		良好	S						堅緻	1/3	灰かぶり
		你盃	_	内面:回転ナデ。	青灰色	好	M						土椒	1/0	SK-4
			(12.3)	外面:回転ナデ。	淡青灰色	<del>                                     </del>	<b>A</b>								
9		須恵器 杯蓋	_	内面:回転ナデ。		精良	S						堅緻	1/4	大井部灰か ぶり
		小声		門風:凹転りで。	灰色	艮							1.100	-/ .	SK-4
			10.5	外面:底体部1/3回転ヘラケズ	灰色		Δ				İ		-		
10 =	Ξ	須恵器   杯身	5.0	り。他は回転ナデ。 内面:回転ナデ。	淡青灰色	精良	M						堅緻	1/2	底体部外面 灰かぶり
		11/24	受部径12.8	Г <b>уд</b> . Е <del>Г</del> ДД / / 0	灰目灰色	DQ.	Ĺ					ĺ			S K - 4
	T		_	外面:底体部1/3回転ヘラケズ	淡灰色		(O)				$\exists$				
11		須恵器   杯身	_	リ。他は回転ナデ。 内面:回転ナデ。	灰色	やや粗	©S-						堅緻	1/2	S K - 4
			受部径12.3	17m 1 m/m/ 7 0	<b>Х</b> С	粗	Ĺ	İ				i	ĺ		
		L for the	(15.4)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	淡灰褐色	4	0							口妇	
13		土師器 選	_	ケナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ナ	茶褐色	やや粗	© S 			-			良好	口縁	1・2 B区 第9層
				デ。	A1140	租	Ĺ				İ			1/4	X7 3 /E
		土師器	(14.2)	外面:口縁部ヨコナデ。	赤褐色		Δ					赤		口緑	
14		土師希	_	内面:口縁部ヨコナデ。	"	良好	M					L	良好	部	1 · 2 A区 第 9 層
-				-			Ĺ							1/8	A14 € /IEI
		土師器	(12.4)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	淡茶褐色		$\triangle$		△ S	T		T		口縁	
15 =	=	獲	_	ケナデ。 <b>内面</b> : 口縁部ハケナデ。体部ハ	"	良好	∆ S I	ĺ	S				良好	部	1・2 C区 第9層
	$\perp$			ケナデ。			L							1/6	rud
		土師器	(15.0)	外面:口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色	, t.	Δ M	Δ M		T	<b>A</b>	T		口縁	
16		- 選	-1	内面:口縁部ヨコナデ。	黄褐色	良好	IVI	M			L		良好	部	1・2B区 第9層
														1/8	

・凡例 粒径-L1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-◎多量 ○多い △少ない ▲希少 ※赤-赤色酸化土

			凡例 粒径-	- L 1 mm以上 M0.5~ 1 mm未満	S 0.5mm未満	<u>m</u>	93	霊	03	٠.		'A.V.	▲希少	26.00	一赤色酸化土
遺	図		法量(cm)	調整・手法	色調			胎		土				残	
物	版	UU 1016	口径	外面	外面	素	長	石	雲	角	チ	そ	焼战	<u></u>	備考
番	番	器 種	器高 底径	内面	内面					閃	† 1	の	保存	存	地 区
号	号		() 復元値	rym	L 2000	質	石	英	母	石	۱ ۱	他		率	
			(22.0)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	赤褐色										
17	Ξ	土師器	- (55.0)	ケナデ。		良好	S						良好	日縁部	1 · 2 C区
.,	_	甕		内面:□縁部ヨコナデ。体部粗   いハケナデ	淡茶灰色	好							2007	1/8	第 9 層
-			(22.1)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	淡灰褐色			_	_					- 67	口縁部煤付
18		土師器	-	ケナデ。体部上半に1条の波状	//	やや	os S	M	S				良好	口縁 部	着
		甕	_	文。   内面 : 口縁部上半ヨコナデ、中		粗	L							1/8	1・2 C区 第9層
			(25.8)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	淡灰褐色		0							□縁	
19	Ξ	土師器 甑	_	ケナデ。   内面:口縁部ヨコナデ。体部ナ	"	やや粗	S S						良好	部	1・2 C区 第9層
		HA		デ。		粗	Ĺ							1/10	N, 0 /E
			(25.6)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	淡灰褐色	p	O S		△ S					□縁	
20	Ξ	土師器 甑	_	ケナデ。  内面:□縁部ヨコナデ。体部ナ	"	や粗	S		S				良好	部	1・2 A区 第9層
		134		デ。		柤								1/8	
		土師器	_	外面: 乱方向のハケナデ。	淡灰褐色	40	o s	Δ M			M			im ≖	1・2 B区
21	四	工師器		内面:ナデ。	黒褐色	やや粗	3	IVI			IVI		良好	把手 完存	第9層
						111		_							
		土師器	(36.8)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハ   ケナデ。	淡赤褐色	10	S S	M	∆ S					口縁 部~	1・20区
22	Ξ	鉢	_	内面:口縁部ヨコナデ。体部ハ	"	や粗		L					良好	体部	第9層
				ケナデ。	1.1			Ь						1/12	
	_	土師器	16.6 杯部高 5.2	外面:□縁部ヨコナデ。杯部ハ  ケナデ。	赤褐色	p	O S	S	S				d lo	杯部	1 B区
23	Ξ	高杯	_	内面:口縁部ヨコナデ。杯部風	"	や粗	L	M					良好	完存	第10層
	-		11.0	化のため調整不明瞭。 外面: 天井部2/3回転ヘラケズ	暗青灰色		-								天井部外面
24	四	須恵器	11.2 4.0	り。他回転ナデ。		精							堅緻	3/4	ヘラ記号1・
27		杯蓋	_	内面:回転ナデ。	"	良								0/ 1	2 D区第 9 層
H			10.4	<b>外面</b> : 天井部2/3回転ヘラケズ	淡青灰色										天井部外面
25		須恵器	4.2	り。他回転ナデ。	"	良好							堅緻	1/4	灰かぶり1・
		杯蓋	_	内面:回転ナデ。	//	好	L								2 B区第9 層
			10.6	外面: 天井部2/3回転ヘラケズ	淡青灰色		0				ļ				天井部~口縁
26	四	須恵器 杯蓋	4.4	り。他回転ナデ。 内面:回転ナデ。	"	良好	OS	İ					堅緻	1/4	部外面灰かぶ り1・2 B 区
		1111 益				21	М								第9層
			(12. 4)	外面: 天井部2/3回転ヘラケズ	淡灰色		Δ								
27	四	須恵器 杯蓋	_	り。他回転ナデ。	白灰色	良好	M						良好	1/3	1 • 2 A区 第 9 層
		11300													
		Appropriate tree	(12. 8)	外面:天井部2/3回転ヘラケズ	灰色	plant e									内外面に灰
28	四	須恵器 杯蓋	_	リ。他回転ナデ。   <b>内面</b> :回転ナデ。	"	精良							良好	2/3	かぶり 1・2 C区
							_	_		_		ļ			第9層
		須恵器	(10.8)	外面:天井部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。	暗灰色	ゃ	OS I								1・2 B区
29		杯蓋	_	内面:回転ナデ。	"	や粗	Į						良好	1/6	第9層
					l	+	L	-	-						
		須恵器	(10.8)	外面:底体部2/3回転ヘラケズ   リ。他回転ナデ。	暗灰色	結								. /^	底体部灰か ぶり
30		杯身	-	内面:回転ナデ。	"	精良							良好	1/8	2 A 🗵
-	-				F-6	-	-	-				<u> </u>			第9層
<b> </b>		須恵器	(11.0)	外面:底体部2/3回転ヘラケズ リ。他回転ナデ。	灰色	自							良好		底体部上半赤色颜料塗
31		杯身	_	内面:回転ナデ。	"	良好							1/8		布1・2 B 区 第9層
								<u> </u>	<u> </u>			L	L		ム ポッ暦

			プログリ 作工日土	上 门间以上 10.5 门间间水洞	3 0.3 IIIII / N	386.	93	.000.	03			. O. V	■和シ	26.01	ما رو	1X TULL
遺	図		法量(cm)	調整・手法	色調			胎		土				残		
物	版	器種	口径 器高	外面	外面	素	長	石	雲	角	チ	そ	焼成	+	備	考
番	番	岙 悝	底径	内面	内面					閃	+	の	保存	存	地	Ø
号	号		() 復元値			質	石	英	母	石	۲	他		率		
32	四	須恵器 杯身	(12.2) — —	外面: 底体部2/3回転ヘラケズ リ。他回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	灰色	良好	S S L						堅緻	1/4	1 · 2 第 9 層	
33	四	須恵器 杯身	(10.6) —	外面:底体部4/5回転ヘラケズ リ。他回転ナデ。 内面:回転ナデ。	灰色	良好	M						堅緻	1/4	1 · 2 第 9 層	

・凡例 粒径-L1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-◎多量 ○多い △少ない ▲希少 ※赤-赤色酸化土

### 3. まとめ

今回の発掘調査は小面積であったにも拘わらず、古墳時代中期末~後期初頭・平安時代中期 以降に比定される遺構・遺物が検出され、竹渕遺跡内における当該期の集落の動向を知るうえ で貴重な資料を提供する結果となった。

古墳時代中期末~後期初頭の集落については、当調査地の南東約420m 地点で行われた第3次調査(TK92-3)で同時期の方墳が1基検出されているほか、南東約300m 地点で行われた第1次調査(TK82-1)では堅穴住居・土坑・溝・小穴を中心とした古墳時代後期中葉以降の居住域が検出されている。なかでも、第1次調査(TK82-1)で検出されたSD-1からは土師器・須恵器類が多量に出土しており、これらの集落形成を推進した氏族の安定した生活基盤を一端を示すものと理解されている。今回の発掘調査で検出した遺構群は、第1次調査(TK82-1)で検出された集落よりわずかに古い時期(古墳時代中期末~後期初頭時期)の集落であることから、古墳時代後期中葉段階に当調査地付近から第1次調査(TK82-1)地付近に集落が移動したことが明らかとなった。

平安時代中期以降の集落については、当調査地の東約100m 地点で行われた第4次調査(TK

95-4) で当該期の遺物包含層の存在が確認 されている程度で不明な点が多い。

一方、北壁のY15.5付近で検出した噴砂痕については、第11層から第8層に達するもので、5世紀後半から6世紀初頭の遺物を包含する第9層を切ることから、6世紀初頭以降の地震によるものと推定され、記紀にみる推古7年(599)の地震に対応する可能性が考えられる。



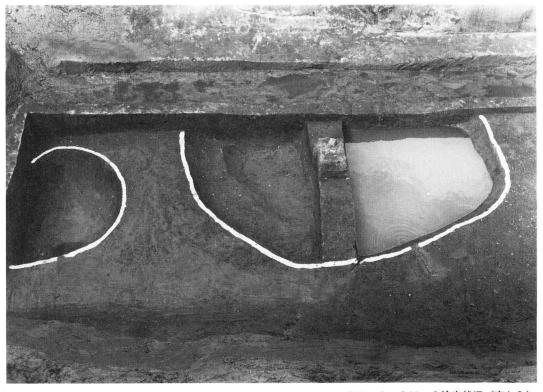
写真 1 北壁 (Y15.5付近) 検出噴砂跡

### 参考文献

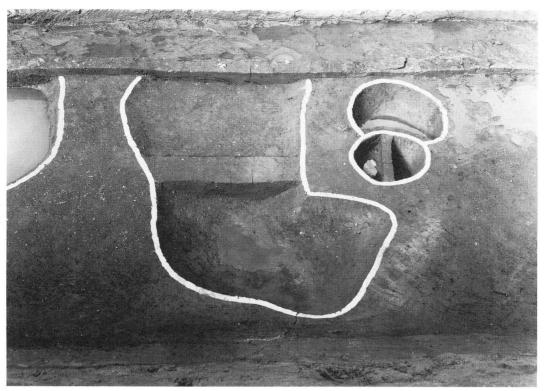
- 原田昌則 1993「XV竹渕遺跡(第3次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八市文化財調査 研究会報告23
- 高萩千秋 1989「II 竹渕遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査 研究会報告39
- 高萩千秋 1996「16. 竹渕遺跡第4次調査(TK95-4)」『平成7年度 (財)八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会



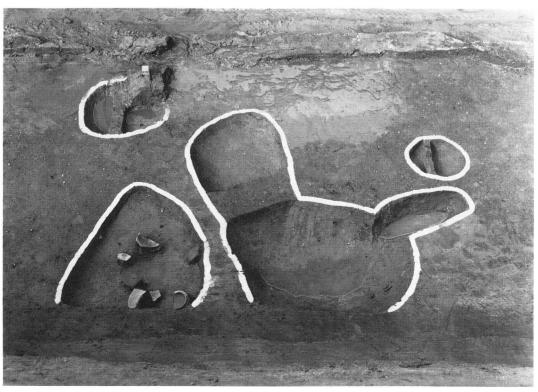
調査区全景(東から)



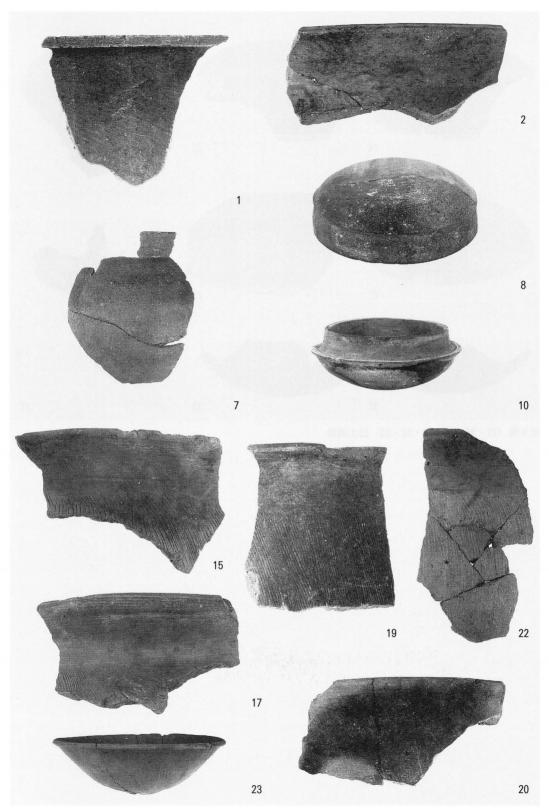
SK-1・SK-2検出状況(南から)



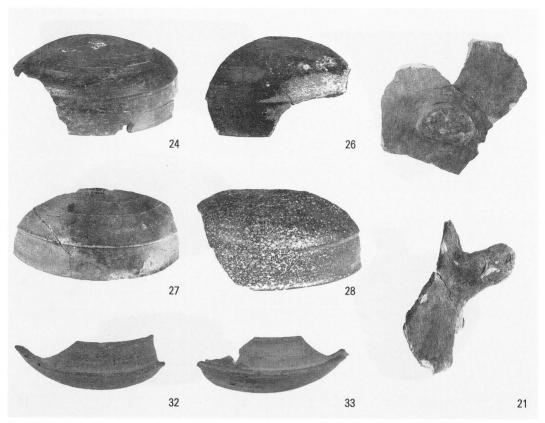
SK-3・SP-1・SP-2 検出状況 (南から)



SK-4・SK-5・SP-3・SP-4検出状況(南から)



SK-1(1)、SK-4(2・7・8・10)、第9層(15・17・19・20・22)、第10層(23)出土遺物



第9層(21・24・26~28・32・33)出土遺物

# Ⅳ 東郷遺跡第49次調査 (TG95-49)

## 例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市光町2丁目20番. 22番で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する東郷遺跡第49次調査(TG95-49)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋727-3号 平成7年3月16日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が岡田徳一氏から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成7年6月14日から6月23日(実働8日間)にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は140㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・西田真紀が参加した。
- 1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成8年9月30日に完了した。
- 1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-沢村妙子 図面トレース-北原清子。
- 1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

# 本文目次

1.	は	じめに	43
		a查概要······	
1	(1	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
4	2)	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	46
	3)	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	46
4	1)	出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	52
3.	ま	とめ	53

### IV 東郷遺跡第49次調査(TG95-49)

### 1. はじめに

東郷遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地の標高8~9mに展開する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市中央部の本町1・7丁目、北本町2丁目、東本町1~5丁目、光町1・2丁目、桜ケ丘1~3丁目、荘内町1・2丁目一帯の東西1.3km、南北0.9kmがその範囲とされている。東郷遺跡周辺では南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡、西に久宝寺遺跡、北に菅振遺跡が位置している。

本遺跡は、昭和46年に八尾市東本町2丁目の光明寺東側道路で行われた水道工事に際して、 奈良時代の墨書人面土器が出土したことに端緒を発している。その後、発掘調査により遺跡の 実態が明らかにされるのは、昭和55年の近鉄八尾駅の現地点への移転以降のことで、駅の北部 を中心に急速な市街化の進行に伴う開発行為が顕在化したことによるものである。さらに近年 においては、やや沈静化した近鉄八尾駅北部から開発行為が周辺に拡大する傾向が顕著で、発



-43 -

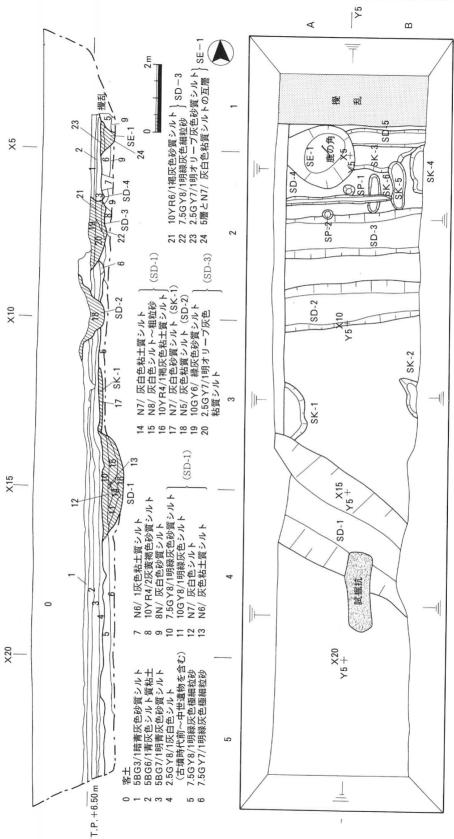
掘調査件数も増加しており、八尾市域遺跡のなかで最も発掘調査件数が多く、遺跡の実態が比較的明らかな遺跡の一つと認識されている。これまでの発掘調査で本遺跡が、弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが確認されている。なかでも、近鉄八尾駅の北部を中心とする古墳時代前期(庄内式期・布留式期)~古墳時代後期に至る集落の動態や、遺跡の東部で検出された飛鳥時代後半(7世紀中葉)の創建とされる東郷廃寺の存在は特筆に値するものである。

このような情勢下、八尾市光町2丁目20、22番において、岡田徳一氏から共同住宅の建設を行う旨の届出が市教育委員会文化財課へ提出された。申請地点は遺跡推定範囲ほぼ中央部に位置し、西隣では昭和57年度に行った第11次調査(TG82-11)で、古墳時代前期の竪穴住居3棟を中心とする居住域の一部が検出されており、これらの居住域の広がりが申請地にまで及ぶものと推定された。これらの既往調査の結果から、市教育委員会では、当該地の掘削工事に際して発掘調査が必要であると判断し、事業者と協議を重ねた結果、工事部分で遺跡が破壊される部分を対象として、発掘調査を実施することが両者間で合意された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・事業者・(財)八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。

### 2. 調査概要

### 1)調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に先立って実施したもので、建築予定建物に沿って東西幅 6 m、南北幅23mの調査区を設定した。なお、調査地内での残土処理の関係から調査区を南区と北区に二分する方法をとった。調査地の地区割りについては、調査地の北西隅の X 0・ Y 0地点を基点として東西10m、南北25mにわたって設定した。一区画の単位は 5 m四方で、東西方向はアルファベット(西から A・ B)、南北方向は算用数字(北から 1~5)で示し、地区の表示は 1 A~ 5 B地区と呼称した。地点の表示には、東西線(X 0~ X 25)・南北線(Y 0~ Y 10)の交点の数値を使用した。掘削に際しては、現地表下約1.7m前後までを機械掘削した後、以下の0.3mについては、人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、現地表下1.7~1.9m(標高6.3~6.1m)付近に存在する第5層上面で弥生時代中期の土坑1基(S K - 1)、古墳時代前期(庄内式期)の土坑1基(S K - 3)・溝1条(S D - 1)、鎌倉時代の井戸1基(S E - 1)、近世の土坑4基(S K - 2・S K - 4~S K - 6)・溝4条(S D - 2~S D - 5)・小穴2個(S P - 1・2)を検出した。遺物は遺構内および第2層~第4層からコンテナ箱1箱程度が出土している。



第2図 検出遺構平断面図

### 2) 基本層序

調査地点付近は今回の調査でも明らかなように、弥生時代以降の堆積が比較的緩慢な地域であったようで、客土を除けば旧耕土以下約0.6m付近に弥生時代中期の遺構の存在が認められている。このような堆積状況や、各時期の遺構密度が粗いことも相俟ってこの地点では良好な包含層を形成するに至っていない。ここでは、普遍的に存在した5層を基本層序とした。

第0層 客土。層厚1.4m前後。上面の標高はT.P.+7.6m。

第1層 5BG3/1暗青灰色砂質シルト。層厚0.1~0.2m。旧耕土。

第2層 5BG6/1青灰色シルト質粘土。層厚0.1m。床土。

第3層 5BG7/1明青灰色砂質シルト。層厚0.1~0.25m。酸化鉄が斑点状に沈着している。 中世~近世の遺物が極小量含まれている。

第4層 2.5GY8/1灰白色シルト。層厚0.1~0.2m。古墳時代前期~中世に比定される遺物 が極小量含まれている。

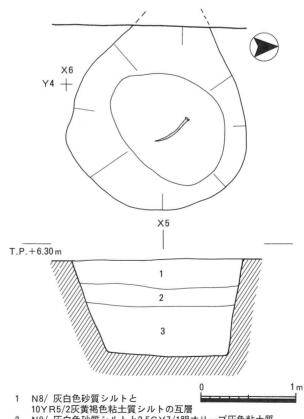
第5層 7.5GY8/1明緑灰色極細粒砂。層厚0.2~0.3m。遺構検出面。

### 3) 検出遺構と出土遺物

井戸(SE)

#### SE-1

調査区北西部で検出した。上面の形状が東西方向に長い楕円形を呈するもので、西部は調査区外に至るため不明である。検出部分で東西径1.95m、南北径1.85m、深さ1.0mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は不均質な3層がほぼ水平に堆積しており、最下層は粗粒砂が優勢な湧水層に達している。遺物は最下層から鹿の角が出土したほか、上層からは土師器小皿、瓦器小皿の小片が極小量出土している。時期的には鎌倉時代に比定されるものと推定されるが



- 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルトの互層 2 N8/灰白色砂質シルトと2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土質 シルトの互層(土師器小皿出土)
- 3 N7/ 灰白色シルトとN7/ 灰白色粘土質シルトの互層 (鹿の角出土)

第3図 SE-1平断面図

詳細は不明である。井戸としたが、埋土の堆積状況からみれ ば掘削直後に埋め戻されたようで、しかも鹿の角が最下部か ら出土していることから、井戸以外の性格を有する遺構の可 能性が考えられる。そのうち図化し得た遺物は瓦器小皿1点 (1) である。小片のため不明な点が多いが、形態からみて おおむね12世紀後半前後の所産と推定される。



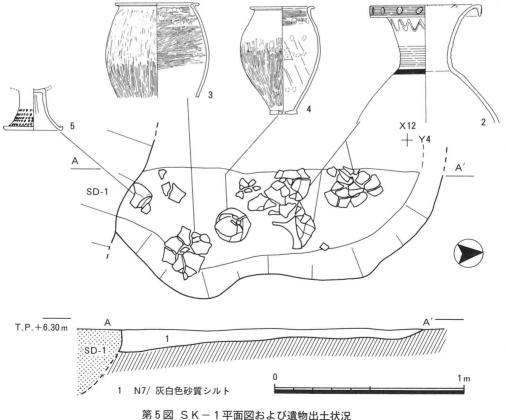
第4図 SE-1出土遺物実測図

土坑(SK)

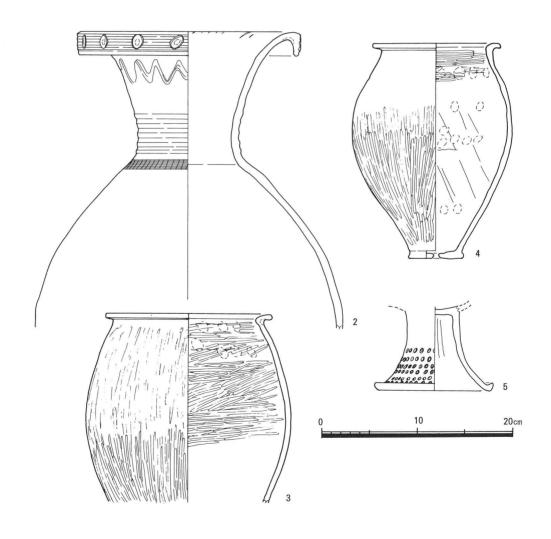
### SK-1

3 A地区で検出した。南部がSD-1に切られており、西部が調査区外に至るため全容は不明 である。検出部分で東西幅0.7m、南北幅1.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰白色砂質シルトの 単一層である。遺物は弥生時代中期後半(畿内第Ⅳ様式)に比定される壺・甕・高杯等が出土 している。全て底面に張り付く形で出土しており、一括性の高い土器群と言える。

そのうち図化し得た遺物は広口長頸壺1点(2)、甕1点(3)、底部有孔甕1点(4)、台 付鉢(5)の4点(2~5)である。(2)は大型の広口長頸壺である。全体に保存状況は不



良であり、器壁面の剥離が著しい。口縁部の形態は端部が上部に垂下するもので、端面は多条の凹線文と円形浮文で飾られている。頸部外面は下部が4条からなる幅広の凹線文、上位が波状文が施文されているほか、頸部内面の上半は不明瞭ではあるが列点文が一周するものと推定される。体部外面上半は簾状文が施文されているが、以下については器面剥離のため不明である。焼成は不良で赤褐色の色調を呈する。形態や施文方法の特長や、胎土中に結晶片岩を含むことから紀伊地域のなかの紀北産と考えられる。(3)は大型甕で底部は欠損する以外は約1/2が残存している。体部外面は保存状態は不良で器壁面の調整は不明瞭である。生駒西麓産である。(4)は中型の底部有孔甕で一部が欠損するものの、ほぼ全容を知る得ることが可能である。口径13.3cm、器高22.8cm、体部最大径16.5cm、底部径5.5cmを測る。生駒西麓産である。



第6図 SK-1出土遺物実測図

(5) は台付鉢の脚部で1/2以上が残存している。裾部径11.5cm、脚部高8.4cmを測る。裾部外面の中位以下に円形竹管文を多用した施文が行われている。土器群の時期については、生駒西麓産の( $3\sim5$ )が広瀬和雄氏による亀井遺跡を中心とした弥生土器編年の中期6に対比され、寺沢薫・森井貞雄両氏による河内地域の弥生土器編年の河内V-3様式に対応するものと考えられる。なお、紀北産とされる広口長頸壺(2)が土井孝之氏編年の紀伊V-1様式に対比され、両地域の編年の併行関係においても矛盾するものでない。

### SK-2

3 B地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.3 m、南北幅1.1m、深さ0.07mを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

#### SK-3

調査区の北部で検出した。検出部分では不定形を呈するもので、北部がSD-5、西部がSE-1、南部がSK-5に切られている。検出部分で東西幅1.75 m,南北幅0.75 m 、深さ0.12 mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単一層である。遺物は古墳時代前期の土器類の小片が極少量出土している。

### SK-4

SK-3の東部で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅 $0.35\,\mathrm{m}$ 、南北幅  $1.4\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.1\,\mathrm{m}$ を測る。埋土は明オリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### SK-5

南北方向に溝状に伸びるもので、北部でSK-3を切っており、南西部でSD-4に切られている。東西幅0.35 m、南北幅1.4 m、深さ0.07 mを測る。埋土は明オリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は弥生土器・須恵器等の小片が極少量出土している。

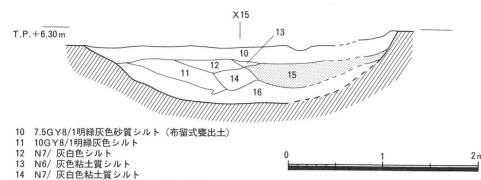
### SK-6

SK-5 の西側で検出した。SK-5 と同様、南北方向に溝状に伸びるもので、南部の一部 が SD-4 に切られている。東西幅0.3 m、南北幅1.1 m、深さ0.07 mを測る。埋土は明オリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### 溝(SD)

#### SD-1

調査地の中央部から南部で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、検出長4.4m、幅2.75m、深さ0.6mを測る。断面の形状は逆台形で底部はほぼ平坦である。埋土は7層(第10層~第16層)から成るもので、第15層で粗粒砂の堆積が認められる以外はシルト~粘土質シルトが優勢な土層が堆積している。遺物は第16層から弥生時代中期後半(畿内第IV様式)の土器



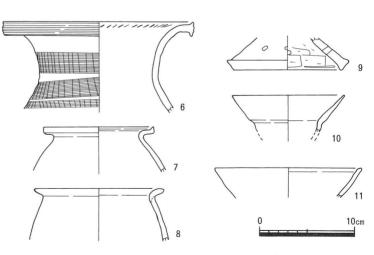
- 15 N8/ 灰白色シルト〜粗粒砂 (小型丸底壺出土)
- 16 10YR4/1褐灰色粘土質シルト

第7図 SD-1西断面図

類が出土した他、第10層・第15層からは古墳時代前期(布留式古相)の土器類が極少量出土している。なお、西側に隣接する地点で行われた第11次調査(TG82-11)で検出されたSD-1と同様の溝と推定される。図化した遺物は弥生土器-壺1点(6)、甕2点(7・8)、高杯1点(9)、土師器-小型丸底壺1点(10)、布留式甕1点(11)の6点である。弥生時代中期後半(畿内第IV様式)に比定される土器群は全て最下層の第16層から出土した。(6)は短い頸部が外方向に開く広口壺である。上下に拡張する口縁部端面に3条の凹線文と口縁部内面上半に列点文が施文されているほか、頸部中位から体部にかけては簾状文が施文されている。生駒西麓産である。(7)は口縁部から体部上半にかけて残存する甕の小片である。形態的には短く伸びる頸部から屈折した後、端部が上方に小さく拡張される甕である。生駒西麓産である。(8)は口縁部が屈折するもので、端部は尖り気味に終わる。器壁面が風化しており調整等は明確でない。生駒西麓産である。(9)は高杯脚部の小片である。非生駒西麓産である。古墳時代前期(布留式古相)のものは小型丸底壺(10)が第15層、布留式甕(11)が第10層から出

は小型丸底壺の口縁 部から体部にかけて の小片である。残存 部分から、半円形の 体部に大きく開く口 縁部が付く形状が想 定される。中河内に おける古式土師器の 分類の小型壺B3に あたり布留II期に盛

土している。(10)



第8図 SD-1出土遺物実測図

行する器種である。(11) は布留式甕の口縁部の小片である。甕 $F_2$ に分類されるもので、(10) と同時期に盛行するものである。 2 点共にローリングを受けており器面調整は不明である。

SD-2

2・3 A地区から2 B地区にかけて東西方向に直線的に伸びるものである。構築面は第1層で、客土が行われた近年まで機能を果たしていた溝である。断面の観察では北側に上幅で約0.4mを測る里道が付随していたようである。また、この溝の両岸付近には流路方向に沿って木杭が多数打たれていた。調査では最下部を検出したに過ぎないが、断面部分では幅2.65m、深さ0.7mを測る。埋土は灰色粘質シルトの単一層である。遺物は須恵器、瓦器、国産陶器・磁器等の小片が少量出土した。

SD-3

SD-2の北側で検出した。SD-2に並行して伸びるもので、SD-2同様、第1層を構築面としている。なお、SD-3の廃絶後にSD-2が開削されたことが断面観察から明らかである。断面部分での数値は幅2.1m、深さ0.5mを測る。埋土は4層から成る。遺物は須恵器、土師器、瓦器、国産磁器等の小片が少量出土している。

SD-4

SD-3の北側で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長3.1m、幅0.2m、深さ0.05mを測る。断面形状が浅いU字状を呈するもので耕作に関連した小溝と推定される。埋土は明青灰色砂質シルトである。遺物は陶器の小片が極少量出土したが時期は不明である。

SD-5

調査区の北部で検出した。南部でSK-3を切り、西部ではSE-1に切られている。検出長2.2m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は明オリーブ灰色シルトである。遺物は出土していない。

小穴(SP)

SP-1

SE-1の南東部で検出した。円形を呈するもので、径 $0.3\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.27\,\mathrm{m}$ を測る。 埋土は明青灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

SP-2

 $2 \text{ A地区で検出した。南部で SD-3 を切っている。円形を呈するもので、<math>{\rm 40.25\,m}$ 、深さ  $0.05\,m$ を測る。埋土は青灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

### 4) 出土遺物観察表

・凡例 粒径-L1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-◎多量 ○多い △少ない ▲希少 ※赤-赤色酸化土

			• 凡例	- L 1 mm以上 M0.5~ 1 mm未満	S 0.5mm未満	重	<b>◎多</b>	重	○多	ĻΊ	$\triangle \mathcal{P}$	ない	▲布少	※亦	一赤色酸化土
遺	図		法量(cm)	調整・手法	色調		·	胎		±				残	
物	版	器種	口径 器高	外面	外面	素	長	石	雲	角	チ	そ	焼成	存	備考
番	番	台 作里	底径	内面	内面					閃	ヤート	の	保存	11	地 区
号	号		() 復元値			質	石	英	母	石	١	他		率	
1		瓦器 小皿	(10.3) - -	外面: 口縁部ョコナデ。体部指 頭圧成形後ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ョ コ方向のヘラミガキ。	暗灰色 暗灰色~灰 白色	精良	Os						良好	口縁 部 1/12	SE-1
2	11	弥生土器 広口 長頸壺	23.3 - 頸部高13.1 頸部径11.0	外面:口縁部端面4条の凹線文。 頸部上半波状文、下半4条の凹 線文。体部上位膝伏文、以下器 壁剥離のため調整不明。 内面:口縁部上半列点文。以下 器壁剥離のため調整不明。	赤褐色 "	やや粗	© S L	OS I				片◎L	やや 不良 器面の 剥離顕 著	口縁 部~ 体部 1/2	紀伊産 SK-1
3	Ξ	弥生土器 甕	(17.4)	外面: 口縁部ヨコナデ。体部上 半風化、下半タテ方向のヘラミ ガキ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヨ	茶褐色~赤褐色 赤褐色	やや粗	⊚ S L	O L	Os	© S M			良好 体部上 半風化	口縁 部~ 体部 1/2	生駒西麓産 SK-1
4	Ξ	弥生土器 底部有孔 甕	13.3 22.8 5. 5 体部最大径 16.5	外面:口縁部ヨコナデ。体部上 半器面剥離、中位以下タテ方向 のヘラミガキ。底部ナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部上 位ヨコ方向のヘラミガキ、以下 板ナデ。底部ナデ。	赤褐色	やや粗	OS I	∆ s	Os s	© S L			良好	2/3 以上	生駒西麓産 SK-1
5	Ξ	弥生土器 台付鉢	脚部高 8.4 裾部径11.5	外面: 脚部ナデ。裾部中位以下 円形竹管文。 内面: 脚部ナデ。杯部ナデ。	茶褐色	やや粗	O S I L	S M	∆ S	© S L			良好	脚部 2/3	生駒西麓産 SK-1
6	Ξ	弥生土器 広口壺	(20.1)	外面:口縁部端面3条の凹線文。 頸部3条の簾状文。 内面:口縁部上半列点文。口縁 部~体部ナデ。	淡褐灰色 灰白色	やや粗	OS L	OS I L	∆ S	Os			やや 不良 磨滅	口縁 部 1/6	生駒西麓産 SD-1 第16層
7	Ξ	弥生土器 甕	(11.6)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	茶褐色 茶褐色~ 黒褐色	やや粗	∆ S		S	⊚ S L			良好	口縁 部 1/12	生駒西麓産 SD-1 第16層
8	Ξ	弥生土器 甕	(13.7)	外面:口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	赤褐色 淡茶灰色~ 黒灰色	粗	©S L	S	S	OS-M			やや 不良	口縁 部 1/6	生駒西麓産 SD-1 第16層
9	Ξ	弥生土器 高杯	福部径(11.4)	外面: 裾部ヨコナデ。 内面: 裾部ケズリの後ナデ。	赤褐色~灰 白色 淡黒灰色	やや粗	1 2	Os	s s		\$		良好	裾部 1/6	スカシ孔 2 個残 SD-1
10	=	土師器 小型丸底 壺(小型 壺B <sub>3</sub> )		外面:器面磨滅のため調整不明。 内面:器面磨滅のため調整不明。	赤褐色淡赤褐色	良好	O M					赤〇S	良好 全体に 磨滅	口縁 部 1/4	SD-1第 15層
11		土師器 布留式甕 (甕F <sub>2</sub> )	(15.5)	外面:口縁部ヨコナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色 淡赤褐色~ 淡茶褐色	やや粗	1 7	OS I	Os			赤〇S	良好 全体に 磨滅	口縁 部 1/12	SD-1 第10層

### 3. まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後半、古墳時代前期、鎌倉時代、近世に比定される遺構・遺物を検出した。

弥生時代中期後半(畿内第IV様式)に比定されるものとしては、SK-1がある。東郷遺跡内では、包含層や河川内からの出土遺物を除けば、この時期の遺構としては本調査地の西約200m地点で実施された第15次調査(TG83-15)の土坑 2 基が唯一であった。今回、新たにこの時期の資料を加えた結果、広範囲にわたって集落が存在する事実が明らかになった。しかし、既往調査の成果から推定すれば、遺構分布は散発的でしかも限定されていることから、短期間で小規模な集落であったと言わざるを得ない。なお、SK-1からは生駒西麓産の土器群と共に紀伊産の広口長頸壺(2)が出土しており、交流の一端や土器の併行関係を知るうえで貴重な資料を提供している。

古墳時代前期の遺構はSD-1、SK-3が検出されたのみであり、遺物包含層からもこの時期の遺物出土は希薄であった。本調査地の西側に隣接する地点で行われた第11次調査(TG 82-11)では竪穴住居を中核とする遺構群が検出されている事実からすれば対照的であり、当調査地付近がこの時期の集落の東端を占めていたものと推定すれば、SD-1が集落を区画する溝であった可能性が高い。

鎌倉時代の遺構としては、SE-1がある。井戸としたが、掘削直後に埋め戻されたことが 堆積状況から明らかであり、さらに最下層に鹿の角が埋置されている等から井戸以外の機能を 果たした遺構の可能性が高い。

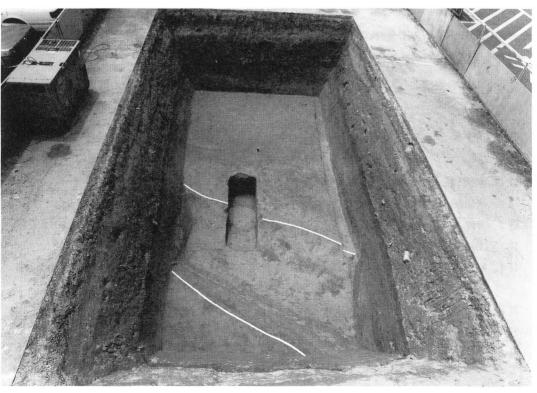
近世時期の遺構としては、耕作に関連した遺構が中心で、中世時期以降の当地における土地 利用を示すものとして注目される。

### 註記

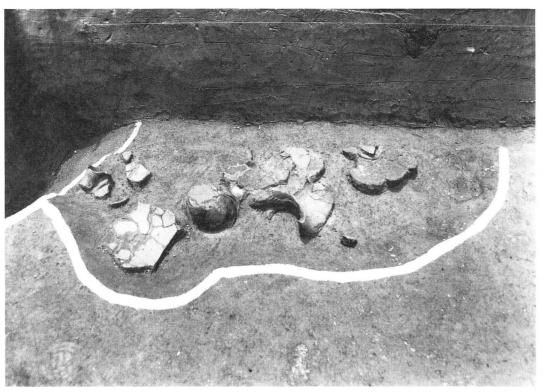
- 註1 高萩千秋 1989「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度 I 東郷遺跡(第11次~第16次・第18 次調査)」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告17』(財) 八尾市文化財調査研究会
- 註 2 寺沢 薫・森井貞雄 1989「各地域の様式 1 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編 I 』 木耳社
- 註3 土井孝之 1989 「各地域の様式 3紀伊地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社
- 註4 原田昌則 1993「八尾市埋蔵文化財調査報告Ⅱ久宝寺遺跡(第1次調査)」『(財) 八尾市文化財調 査報告37』(財) 八尾市文化財調査研究会
- 註5 前掲註1
- 註6 前掲註1



調査区北部遺構検出状況(南から)



調査区南部遺構検出状況(北から)



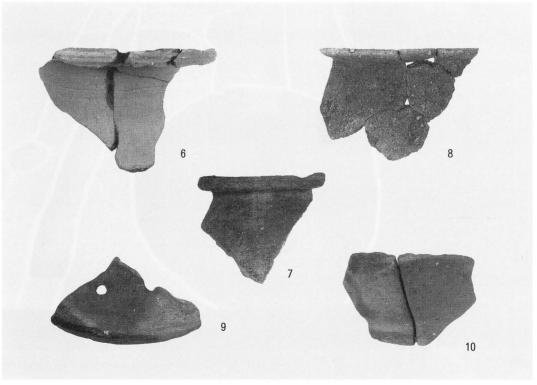
SK-1 検出状況(東から)



SE-1 検出状況(西から)



SK-1(2~5) 出土遺物



SD-1 (6~10) 出土遺物

# V 東郷遺跡第51次調査 (TG95-51)

# 例 言

- 1. 本書は大阪府八尾市東本町4丁目26番地-1の一部,35番地-3で実施した事務所新築工事に伴う発掘調査である。
- 1. 本書で報告する東郷遺跡第51次調査(TG95-51)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋683-3号 平成7年3月13日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が桐山二郎氏から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成8年3月19日から3月28日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。 調査面積は175㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・西岡千恵子・市森 千恵子が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー中村・西岡・市森が行った。
- 1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

# 本文目次

1.	(	はじめに
		調査概要
]	1)	)調査の方法と経過
2	2)	) 基本層序
3	3)	) 検出遺構と出土遺物
4	1)	) 遺構に伴わない出土遺物・・・・・・・63
5	5)	)出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
3.	1	まとめ

## V 東郷遺跡第51次調査 (TG95-51)

#### 1. はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では東本町1~5丁目、北本町2丁目、光町1・2丁目、桜ヶ丘1~4丁目、荘内町1・2丁目一帯にあたる。地形的には旧大和川の主流であった玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には西に久宝寺遺跡、南に成法寺遺跡、北に萱振遺跡、南東に小阪合遺跡が隣接している。



第1図 調査地位置図及び周辺図

当遺跡内では現在までに八尾市教育委員会および当調査研究会によって、50件の発掘調査を 実施している。その結果、弥生時代中期~近世に至る複合遺跡であることが判明している。特 に古墳時代初頭~前期の集落構成に関する遺構や他地域との活発な交流を示す遺物の出土など が確認されている。

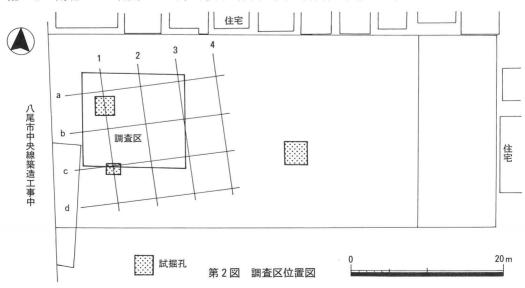
今回の発掘調査は当遺跡範囲の南部付近に位置する東本町4丁目内の貸事務所新築工事に伴なうもので、当調査研究会が当遺跡内で実施する第51次調査である。調査地の近隣では、平成6年度に実施した当調査研究会第46次調査(TG94-46)が北西側(約100m)位置する。その調査では古墳時代前期~近世に比定される土坑・溝等を検出している。また、遺跡名が異なるが南側(約100m)の成法寺遺跡での調査では、大阪府教育委員会が昭和62年度から府道平野高安線拡幅工事に伴なう発掘調査を断続的に実施している。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓(甕棺)、古墳時代前期の集落遺構・周溝墓などを検出している。

#### 2. 調査の概要

#### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、建物基礎工事によって破壊される部分に縦12.5m×横14m(面積約175㎡) 調査区を設定した。掘削の方法は市教委の遺構確認調査結果をもとに、現地表(T.P.+8.6m) 下0.4m前後の土層を機械により排除した後、以下0.15m前後の土層について人力掘削および 精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに、調査対象面の調査が終了後、調査区中央 付近に下層確認トレンチを設定し、深部の地層状況を確認した。

地区割りについては、西に任意の基準点を設定し、南北軸を磁北に合わせ、調査区範囲を包括できる南北20mの範囲に5m角の方眼を作成し、記録保存を実施した。



#### 2) 基本層序

第1層 耕土(層厚15cm)。耕作土である。調 査前まで水田稲作としており、周辺地 より、0.8m前後低い。

第2層 灰色細砂混粘質土 (層厚10cm前後)。 耕作土の床土。

第3層 灰色粘質土 (層厚5~40cm)。褐色の斑 点がみられる。中世の耕作土である。 南西部が厚く堆積する。

第4層 明褐灰色粘質土 (層厚30cm前後)。調 査区の北東部のみでみられる土層であ る。

第5層 茶褐色粘質土(層厚0~10cm)。古墳時 代初頭の包含層である。調査区の南西 部では第3層により削平されており、 存在しない。

第6層 青灰色粘質土~淡茶灰色粘質土(層厚 15cm前後)。古墳時代初頭~中世の遺 構検出面。

- 第7層 淡茶灰色粘質シルト (層厚15cm前後)。
- 第8層 青灰色シルト (層厚10~20cm)。
- 第9層 灰色粘土 (層厚10~20cm前後)。粘着性の強い粘土である。
- 第10層 青白色微砂(層厚100cm以上)。あまり不純物を含まないきれいなシルト層である。 下部付近から地下水が吹き出し、トレンチの壁面崩壊が著しくなり、これより以下 の土層についての観察はできなかった。

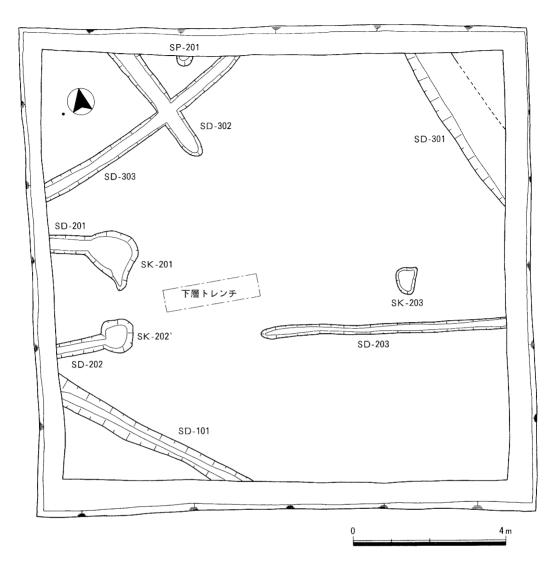
# T.P.+8.0 m T.P.+8.0 m T.P. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m T.D. +8.0 m

- 1 耕土
- 2 床土 (灰色細砂混粘質土)
- 3 灰色粘質土 (褐色斑点有り)
- 4 明褐灰色粘質土
- 5 茶褐色粘質十
- 6 青灰色粘質土~淡茶灰色粘質土
- 7 淡茶灰色粘質シルト
- 8 青灰色シルト
- 9 灰色粘土
- 10 青白色微砂

第3図 基本層序柱状図

#### 3)検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下 $0.5\sim0.6$ m(標高 $8.0\sim8.1$ m)の第 6 層上面で古墳時代初頭の溝 3 条 (SD-301~303)、第 4 層上面で鎌倉時代後期の土坑 3 基 (SK-201・202)・溝 2 条 (SD-201・202)・小穴 1 個 (SP-201)を検出した。第 3 層上面で溝 1 条 (SD-101)を検出した。遺物は遺構及び包含層内からコンテナ箱にして約 2 箱分を出土した。以下、検出した遺構について記す。



第4図 検出遺構平面図

古墳時代初頭の検出遺構

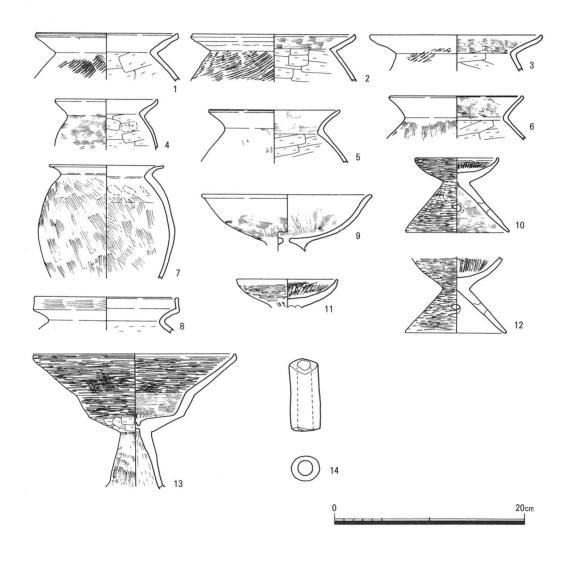
溝(SD)

SD - 301

調査区の北東部 (2b区) で検出した溝で、南東-北西の方向に伸び調査区外に至る。検出面は第6層上面からの切り込みで、検出長約4.0m、幅約2.0m、深さ約0.7mを測る。堆積土は大きく3つ大別できる。上層は暗褐色細砂混粘質土、中層は灰茶色シルト・淡灰茶色細砂・淡茶灰色シルト・青灰色粘質シルトである。下層は暗灰青色細砂混粘土で植物遺体および土器片が多く含まれる層である。これらの堆積状況から言えることは、この溝が機能したある時期は帯水した状態ないしはゆっくりとした水の流れであったことが下層の堆積状況から確認できる。

その後、溝は流れが早くなったのかそれとも洪水によるものなのかは不明であるが短期間に埋没した土層の堆積状況がみられる。上層は溝がほぼ埋没し浅く残った部分に水が溜り、ゆっくりと埋まっていったものと思われる。

遺物は下層より古墳時代初頭(庄内式新相)に比定される庄内式甕(1~6)・四国地方の甕(7)・吉備地方の甕(8)と台付有孔鉢(9)・器台(10~12)・高坏(13)・土錘(14)などを出土している。土器は磨滅痕がみられないことや完形に近いものも出土しており、近接地で破棄されたものと考えられる。



第5図 SD-301出土遺物実測図

#### SD - 302

調査区の北西部(2a・b区)で検出した南西-北東の方向に伸びる溝である。南東は途切れ、SD-303がクロスする。北西は調査区外に至る。検出面は第5層上面からの切り込みで検出長約4.0m、幅0.4~0.6m、深さ約0.1mを測る。堆積土は暗褐灰色粘質土である。遺物は庄内期の土器の小片をごく少量出土している。

#### SD - 303

調査区の北西部(2a・b区)で検出した南東-北西の方向に伸びる溝である。検出面は第5層上面からの切り込みで、検出長約8.0mである。中央付近でSD-302がクロスする。南東・北西ともに調査区外に至る。幅0.35~0.5m、深さは約0.1mを測る。堆積土は暗褐灰色粘質土でSD-302と同一土層である。遺物は庄内期の土器の小片をごく少量出土している。

#### 鎌倉時代後期の検出遺構

土坑(SK)

#### SK - 201

調査区の北西部(1b区)で検出した土坑である。平面形は南部に突起のある楕円形を呈し、西側で溝(SD-201)が伸びる。検出部の規模は径1.2~1.4m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形を呈し、淡灰色粘土が堆積する。遺物は土坑内部から平瓦の小片を1点少量出土している。

#### SK - 202

調査区SK-201 (1c区)の南部で検出した土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、径 $0.8\sim0.9$ m、深さ0.3mを測る。断面は逆状形を呈する。西側で溝(SD-202)が伸びている。堆積土は淡灰色粘土である。遺物は内部から鎌倉時代以降の平瓦片を少量出土している。

#### S K - 203

調査区東部付近(2c区)で検出した土坑である。平面形はやや楕円形を呈し、 ${\rm 40.5}\sim0.8\,\mathrm{m}$ 、深さ約 $0.2\,\mathrm{m}$ を測る。断面は浅い皿形を呈する。堆積土は淡灰色粘土である。遺物は出土していないが  ${\rm 8K-201}$  と同一層であり、同時期のものと思われる。

#### SP-201

調査区北部(2a区)で検出した。平面形は円形を呈し、径0.3m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は淡灰色粘土(褐色の斑点有り)である。遺物は出土していないがSK-201と同一層であり、同時期のものと思われる。

#### SD - 201

調査区の北西部(1b区)で検出した溝で、SK-201から西部の調査区外に伸びる。検出面は第4層上面からの切り込みで、検出長約1.7m、幅0.4m、深さ約0.1mを測る。堆積土は淡灰

色粘土である。遺物は土師器の小片をごく少量出土している。時期的には土坑 (SK-201) と同時期のものと思われる。

#### SD - 202

調査区の北西部(1c区)で検出した溝で、SK-202から西部の調査区外に伸びる。検出面は第4層上面からの切り込みで、検出長約2.0m、幅0.3m、深さ約0.1mを測る。堆積土は淡灰色粘土である。遺物は土師器の小片をごく少量出土している。時期的には土坑(SK-202)と同時期のものと思われる。

#### SD - 203

調査区の北西部(2・3c区)で検出した東西方向に伸びる溝である。西は調査区内で途切れ、東は調査区外に至る。検出面は第4層上面からの切り込みで、検出長約7.0m、幅約0.2m前後、深さ約0.05m前後を測る。堆積土は淡灰色粘土で、第3層の中世耕作土とほぼ同一土層である。遺物は出土していないが、土坑(SK-201・202)と同時期のものである。この溝は耕作に関連する鋤溝などの性格のものと思われる。

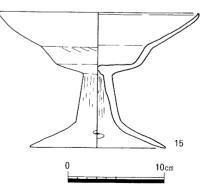
#### 近世の検出遺構

#### SD - 101

調査区の南西部(1c区)で検出した南東-北西方向に伸びる溝である。検出面は第3層上面の中世耕作土からの切り込みである。溝の両方向とも調査区外に至る。検出長約7.0 m、幅0.6~0.8 m、深さ約0.2 mを測る。堆積土は灰色粘質土・乳灰色微砂~細砂の互層である。遺物は出土していないが中世耕作土の上面より切り込んでおり、それ以降の時期のものと考えられる。また、この溝は堆積状況からみるがぎりでは氾濫により短時間でできたものと思われる。

#### 4) 遺構に伴わない出土遺物

第3層・第5層で出土した。第3層は中世の耕作土である。この土層内よりごく少量の土器片が出土している。 土器片はほとんど磨滅を受けており、器種の判別が困難なものが大半である。判別できたものでは古墳時代前期の土師器壺・甕、古墳時代後期~奈良時代の須恵器蓋坏、鎌倉時代以降の平瓦である。第5層は古墳時代前期に比定される土師器が含まれる層である。この土層は調査区南部は第3層の耕作土に削平されており、北部のみの堆



積である。遺物は古墳時代前期に比定される土師器を出 第6図 遺構に伴わない出土遺物実測図

#### 5) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 口径 (cm) 器高	調 整•技 法	色 調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1 =	養 土師器 SD―301	口径 14.8	口縁部内外面ヨコナデ、 体部外面タタキ後ハケナ デ、内面へラケズリ	暗灰褐色	2mm以下の砂粒 を微量に含む (長石・雲母・角 閃石)	良好	□縁1/5	
2 <u>=</u>	同上	口径 17.0	□縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ(7本/cm)後ハケナデ、内面へラケズリ	暗灰褐色	6mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母・角 閃石)	良好	底部1/6	
3 =	同上	口径 18.0	□縁部外面ヨコナデ、内 面ヨコナデ後ハケナデ、 体部外面タタキ、内面へ ラケズリー指頭圧痕	暗灰茶褐色	3mm以下の砂粒 を微量に含む (長石・雲母)	良好	□縁1/4	
4 =	同上	口径 10.6	□縁部外面ヨコナデ、内 面ヨコナデ後ハケナデ、 体部外面タクキ後ハケナ デ、内面へラケズリ	外:淡灰褐色 内:淡灰黄茶 色	3m以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・角閃石・ 雲母)	良好	口縁1/5	
5 <u>=</u>	同上	口径 13.8	□縁部外面ヨコナデ、内 面ヨコナデ後ハケナデ、 体部外面タタキ後ハケナ デ、内面へラケズリ	暗茶灰褐色	2㎜以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母・角 閃石)	良好	口縁1/5	
6 =	同上	口径 13.6	□縁部外面ヨコナデ、内 面ヨコナデ後ハケナデ、 体部外面ダダキ後ハケナ デ、内面へラケズリ	淡茶灰褐色	3mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母・角 閃石)	良好	□縁1/4	
7 =	同上	□径 15.0	口縁部外面ヨコナデ・ヨコナデ、内面ヨコナデ、 体部内面へラケズリ	淡灰茶色	3mm以下の砂粒 を微量に含む (長石・雲母・角 閃石)	良好	□縁1/5	
8 <u>=</u>	同上	口径 15.0	口縁部外面ヨコナデ・ヨコナデ、内面ヨコナデ、 体部内面へラケズリ	外:淡灰茶色 ~明茶色 内:淡灰茶色	3mm以下の砂粒 を少量含む (長石・角閃石・ 雲母)	良好	底部1/2	
9	台付有孔 鉢 土師器 S D-301	口径 17.6	「坏部内外面ハケナデ、坏 部底部に焼成後穿孔(径 8 mm)	乳黄灰色	2mm以下の砂粒 を微量に含む (長石・雲母・赤 褐色酸化粒)	良好	坏部1/2	
10 =	器台 土師器 SD-301	口径 14.0 器高	「本部外面へラミガキ、内面へラミガキ・放射状暗文、脚部外面へラミガキ・ 内面ハケナデ	外:暗灰茶色 ~暗赤褐色 内:灰茶褐色	5mm以下の砂粒 を多量に含む (長石・雲母)	良好	完形	
11 四	同上	脚部径10.6	坏部外面へラミガキ、内面へラミガキ・放射状暗文、脚部外面へラミガキ・ 内面ハケナデ	暗茶灰色	5mm以下の砂粒 を少量含む	良好	坏部のみ	
12	同上	脚部径10.8	坏部外面へラミガキ、内面へラミガキ・放射状の ヘラミガキ、脚部外面へ ラミガキ、内面ハケナデ、 四方孔のスカシ	乳褐灰色	5mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (赤褐色酸化粒)	良好	杯端部欠 損	
13 四	高杯 土師器 SD-301	口径 21.2	坏部外面ハケナデ後へラ ミガキ、底面へラケズリ、 内面ハケナデ後へラミガ キ・放射状のヘラミガキ、 脚部外面へラミガキ、内 面ナデ	外:淡茶灰色 ~灰赤褐色 内:淡橙灰色 ~灰色	5mm以下の砂粒 を多量に含む (長石・雲母)	良好	脚部欠損	
14 四	土錘 土師器 S D -301	長さ 14.0 径 3.0	ナデ	乳茶灰褐色	3mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・赤褐色 酸化粒)	良好	一部欠損	
15 四	高坏 土師器 包含層	口径 20.6 器高 14.3 脚部径14.0	内外面磨耗の為調整不明	淡茶褐色	0.5mm以下の砂 粒を少量含む (長石・石英・チャート)	良好	ほぼ完形	

土している。調査区北西部の試掘孔では完形に近い土器が東西方向に並んだ状態で確認されている。本調査でも試掘孔の北西側で高坏(15)のほぼ完形に近い状態で出土している。

#### 3. まとめ

今回の調査区では古墳時代初頭~近世の遺構・遺物を検出することができた。古墳時代初頭のものは中世の耕作土により調査区の大半が削平を受けた状態で検出した。調査区では北東部が一番削平が少なかった部分である。逆に最も削平されていたのは南西部である。検出した古墳時代初頭のベース面高で比較すると北東部が標高約8.2m、南西部が標高約7.9mを測り、約0.3mの高低差があった。それは削平によるものなのかは明確にできないが、調査区南西部では古墳時代初頭の遺構および遺物は検出しなかった。周辺の調査では東部約300mの当調査研究会第26次(TG89-26)・第42次(TG93-42)の調査、南部約100mの成法寺遺跡で昭和62年度から断続的に行われている府道拡張工事に伴う府教委調査で同時期の集落遺構などを検出しているが、北西部約100mの当調査研究会第46次調査(TG94-46)や当調査地で実施した市教委の遺構確認調査ではごく一部で確認された程度であり、当地付近は居住域とは考えにくい。今回の調査で検出した溝から完形に近い土器・焼成後に穿孔した土器が含まれており、集落域内に位置しているものと考えられる。これらのことから、当地周辺は墓域ないしは集落の中心よりはずれた位置にあたるところであると思われる。

それ以降、古墳時代中期~平安時代の時期については削平を受けたものかは不明であるが、 今回の調査では確認できなかった。中世以降からは生産域として水田耕作の土地利用が現在ま で続いていたものと思われる。

#### 参考文献

山上 弘 1989.3「成法寺遺跡発掘調査概要・IV | 一八尾市高美町所在 - 大阪府教育委員会

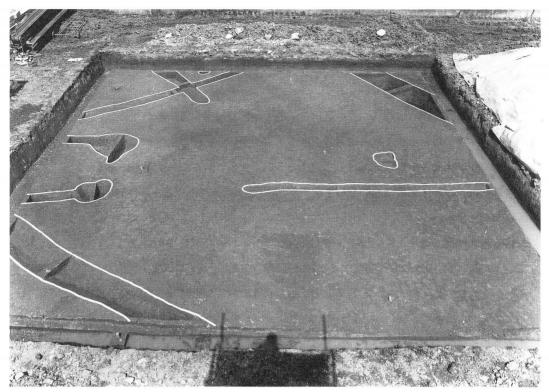
亀島重則 1990.3「成法寺遺跡発掘調査概要 · V」大阪府教育委員会

高萩千秋 1988「15. 東郷遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』(財)八尾市文化調査研究会 会報告16 (財)八尾市文化調査研究会

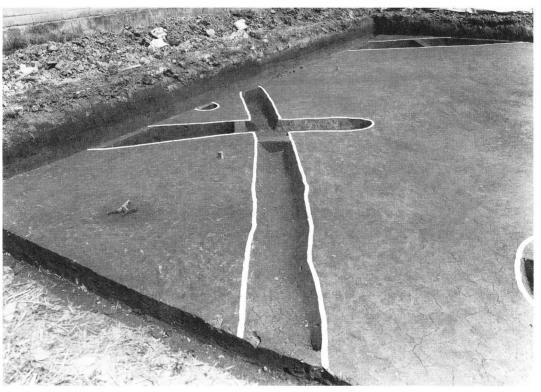
岡田清一 1995 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅱ 東郷遺跡(第42次調査)」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』 (財)八尾市文化調査研究会

岡田清一 1995 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅲ 東郷遺跡(第45次調査)」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化調査研究会

西村公助 1995 (財)八尾市文化財調査研究会「IV 東郷遺跡(第46次調査)」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化調査研究会



調査区全景(南から)



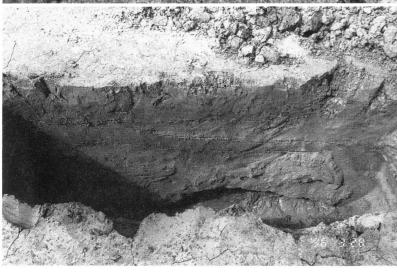
調査区北西部(南西から)



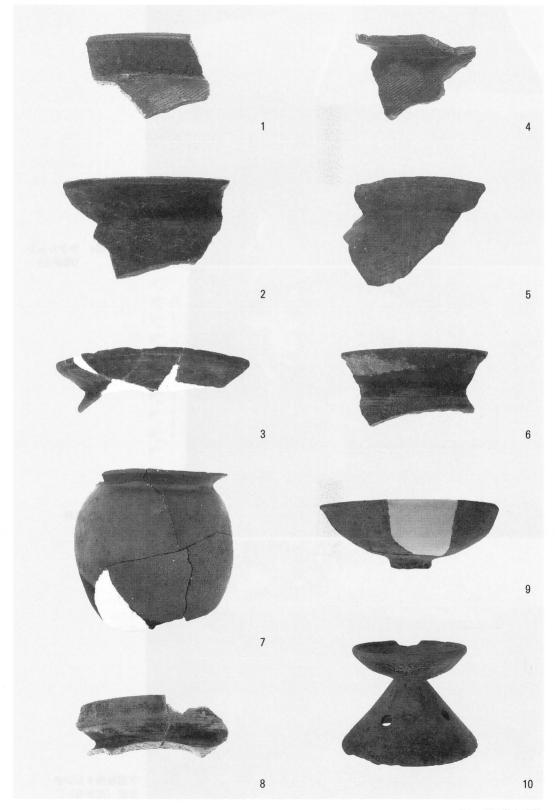
SD-301 セクション (南から)



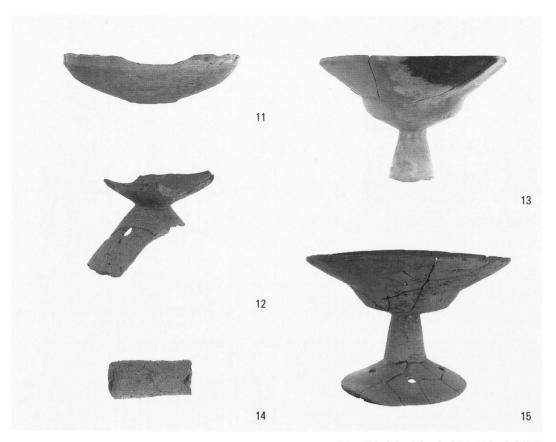
包含層出土高杯 (南から)



下層確認トレンチ 北壁(南から)



SD-301出土遺物



SD-301 (11~14)、包含層 (15) 出土遺物

		*

# VI 中田遺跡第31次調査 (NT95-31)

## 例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市刑部1丁目183. 184で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第31次調査(NT95-31)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋149-3号 平成7年10月26日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が田中政子氏から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成7年11月6日から11月15日(実働8日間)にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は120㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・中西明美・西村和子・松井三千子が参加した。
- 1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成8年9月30日に完了した。
- 1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-岸田靖子・北原清子・沢村妙子・西田真紀・辻野優子、図面トレースー北原、図版レイアウトおよび遺物写真撮影原田が行った。
- 1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本文目次

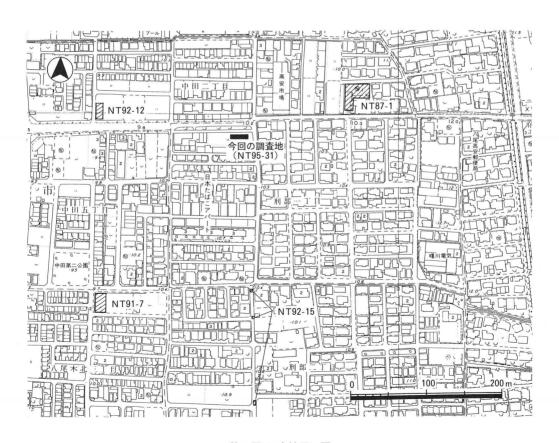
1.	Va	<b>はじめに</b>
2.	訓	<b>月査概要73</b>
	1)	調査の方法と経過・・・・・・・73
	2)	基本層序73
	3)	検出遺構と出土遺物・・・・・・・75
	4)	出土遺物観察表81
3.	큠	; <i>と</i> め

### VI 中田遺跡第31次調査(NT95-31)

#### 1. はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田  $1 \sim 6$  丁目、刑部  $1 \sim 4$  丁目、八尾木  $1 \sim 6$  丁目付近の東西1.1km・南北0.8kmがその範囲とされている。

地理的には、河内平野内を北流した旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川の両河川に挟まれて、南北方向に広がりを持つ低位沖積地上の南部に位置している。なお、遺跡内の微地形を示せば、遺跡範囲の東端部付近が玉串川左岸に形成された自然堤防にあたり、この付近が最も標高が高くT.P.+12m程度を測るもので、そこから西部に向かって下がっており、標高が最も低い地点は、遺跡範囲中央部を南北方向に流下する楠根川付近でT.P.+10.7~9.5mを測る。当遺跡周辺は、これらの地理的条件を背景として、各時期の遺跡分布が密な地域であることが指摘されており、考古学的な資料の蓄積が比較的多い地域と認識されている。当遺跡周辺の遺跡を列挙すれば、南に東弓削遺跡(弥生中期~鎌倉)、西に矢作遺跡(弥生後期~鎌倉)、北西

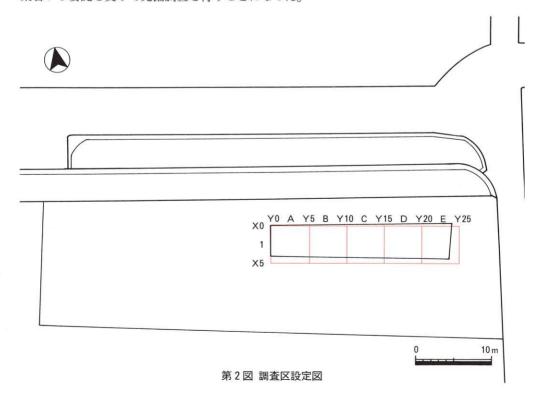


第1図 調査地周辺図

および北に成法寺遺跡(弥生後期~室町)・小阪合遺跡(弥生中期~室町)が近接する位置に 存在している。

当遺跡発見の端緒は、昭和46年に大阪府教育委員会により実施された安中~教興寺線道路工事に伴う調査によるもので、それ以降も、八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施されており、当遺跡が弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが認識されている。

このような情勢下、八尾市刑部1丁目183. 184において、田中政子氏から共同住宅の建設を行う旨の届出が市教育委員会文化財課へ提出された。申請地である八尾市刑部1丁目付近は、中田遺跡の北東部にあたり、昭和62年度に当調査研究会が八尾市中田2丁目29・39で実施した第1次調査(NT87-1)で、弥生時代後期を中心とした居住域の広がりが確認されている。当該地は第1次調査(NT87-1)地の西約120m地点に位置することから、遺構・遺物の有無を確認するため、平成7年10月18日に八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査が実施された。その結果、現地表下1.7m付近に弥生時代後期~古墳時代の土器片を包含する土層の存在が確認され、事業の実施に際しては遺構・遺物の状況を把握することが必要であると判断された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・事業者・(財)八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。



#### 2. 調査概要

#### 1)調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に先だって実施したもので、建物の建築予定地に東西幅 24 m、南北幅5 mの調査区を設定した。調査の地区割りは、調査地の北西隅のX 0・Y 0 地点を基点として東西25 m、南北5 mにわたって設定した。一区画の単位は5 m四方で、東西方向はアルファベット(西からA~E)、南北方向は算用数字(北から1)で示し、地区の表示は1 A~1 E区と呼称した。地点の表示には、東西線(X 0~5)、南北線(Y 0~Y 25)の交点の数値を使用した。掘削に際しては、現地表下1.7m前後までを機械掘削した後、以下0.2mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下1.9m前後(標高8.7m前後)に存在する第9層上面で弥生時代後期の土坑3基(S K - 1~S K - 3)、古墳時代前期初頭(庄内式古相)の土器集積1ヶ所(S W - 1)、古墳時代後期の土坑2 基(S K - 4・S K - 5)・溝5条(S D - 1~S D - 5)を検出した。遺物の総量は、遺構内および包含層出土遺物を含めてコンテナ3箱程度である。

#### 2) 基本層序

調査地全域にわたって、比較的安定した土層堆積が観察された。ここでは、普遍的に存在した9層を摘出して基本層序とした。

- 第0層 客土。層厚0.9m前後。上面の標高はT.P.+10.6m前後。
- 第1層 N6/ 灰色砂質シルト。層厚0.1~0.2m。旧耕土。
- 第2層 7.5G Y 7/1 明緑灰色小礫まじり砂質土。層厚0.1~0.3m。床土。調査区の中央部 より西では欠損している。
- 第3層 7.5GY7/1 明緑灰色小礫まじり砂質シルト。層厚0.1m。
- 第4層 N8/ 灰白色極細粒砂。層厚0.1~0.25m。
- 第5層 7.5GY7/1明緑灰色シルト。層厚0.1~0.15m。
- 第6層 N7/ 灰白色粘質シルト。層厚0.15~0.3m。中世時期の水田耕土の可能性が高い。 平安時代後期から鎌倉時代の遺物を極少量包含する。
- 第7層 N6/ 灰色粘質シルト。層厚0.1~0.2m。古墳時代前期~後期の遺物を包含する。 古墳時代後期の遺構構築面。
- 第8層 N5/ 灰色粘質シルト。層厚0.1~0.2m。弥生時代後期~古墳時代前期の遺物を 包含する。
- 第9層 2.5G Y 7/1 明オリーブ灰色シルト。層厚0.2m以上。弥生時代後期末から古墳時 代前期初頭の遺構構築面。

第3図 検出遺構平断面図

#### 3) 検出遺構と出土遺物

第9層上面を調査対象面とした結果、弥生時代後期の土坑 3 基( $SK-1 \sim SK-3$ )、古墳時代前期初頭(庄内式古相)の土器集積 1 ケ所(SW-1)、古墳時代後期の土坑 2 基( $SK-4 \cdot SK-5$ )・溝 5 条( $SD-1 \sim SD-5$ )を検出した。ただし、古墳時代後期の遺構については、第7層上面が本来の構築面である。

土坑 (SK)

#### SK-1

1 E区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅1.1m、南北幅0.6m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は弥生時代後期に比定される土器類の小片が極少量出土している。

#### SK-2

SK-1の西で検出した。北西部がSD-2により切られているほか、南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.1m、南北幅1.2m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は弥生時代後期に比定される土器類の小片が極少量出土している。

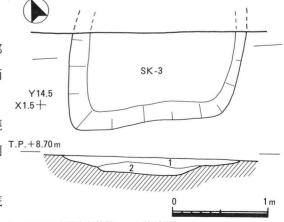
#### SK - 3

1 C区西部から1 D区にかけて検出した。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検 出部分で東西幅1.9m、南北幅1.0m、深さ0.19mを測る。埋土は上層の灰白色粘質シルトと下 層の明緑灰色シルトの2層が、皿状の遺構断面に沿ってほぼ水平に堆積している。遺物は上層 を中心に弥生時代後期後半に比定される土器類が多数出土しているが大半が小片であった。

図化し得たものは8点( $1 \sim 8$ )である。その内訳は弥生土器壺3点( $1 \sim 3$ )、24点( $1 \sim 3$ )、25 へ

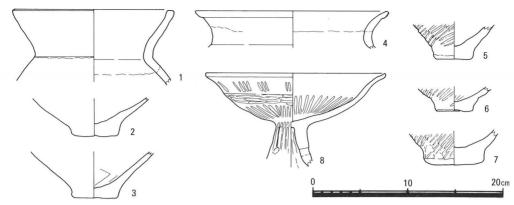
(4~7)、高杯1点(8)である。
 (1)は頸部が外傾気味に伸びた後、中位からさらに外反して伸びる口縁部が付く広口壺の口縁部である。生駒西麓産である。(2・3)は壺底部で、 X1.5+
 (2)が生駒西麓産である。(4)は甕の口縁部である。復元口径19.8cmを測る。(5~7)は甕底部で、(5・6)が底径4cm前後の小型品、(7)が底径5.7cmの大型品に分類される。(6) 1 2.5GY8/

の底部はドーナツ底を呈する。いずれ



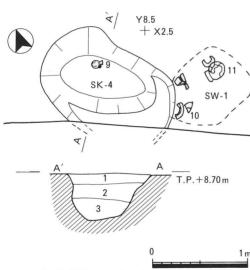
2.5GY8/1灰白色粘質シルト(包含層) 10GY7/1明緑灰色シルト(包含層)

第4図 SK-3平断面図



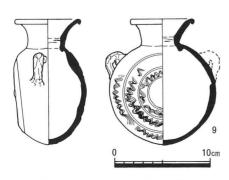
第5図 SK-3出土遺物実測図

も生駒西麓産である。(8)は中型の高杯で裾部が欠損している。非生駒西麓産で胎土中に大 粒のチャートが散見される。



- 1 N5/灰色粘質シルト(提瓶出土)
- 2 10GY7/1明緑灰色粘質シルト
- 3 N5/灰白色粘質シルト

第6図 SK-4·SW-1平断面図



第7図SK-4出土遺物実測図

#### SK-4

1 B区の南部で検出した。南部が調査区外に 至るため全容は不明であるが、検出部分では楕 円形を呈するもので、南部に三日月状のテラス 部分を有する。検出部分で東西幅1.45m、南北 幅1.2m、深さ0.5mを測る。埋土は粘質シルト を主体とする3層がほぼ水平に堆積している。 遺物は第1層から6世紀後半に比定される須恵 器提瓶(9)が1点出土している。(9)は小 型の須恵器堤瓶で、口縁部の一部と輪状把手の 一方が欠損している他は完存している。各部位 の数値は、口径6.8㎝、器高13.2㎝、体部最大 径11.2cm、体部幅7.4cmを測る。口縁部は斜上 方に外反して開くもので、端部は下方に丸く拡 張されている。体部平面形状は円形を呈するが、 側面形状は一方が平らで片側が半球形を呈して いる。半球形を呈する面は3本の沈線により円 が等間隔に描かれており、中央部を除く区画間 にやや雑で不鮮明な櫛描きによる波状文が施文 されている。帰属時期としては、口縁端部が丸 く終わる点や体部外面の波状文がこの器種とし

ては古い様相を示すことから、田辺編年のTK10型式(6世紀中葉)段階に対比されよう。

#### SK-5

1 B区で検出した。SK-4の北に隣接している。不定形を呈するもので、北部はSD-1に切られている。検出部分で東西幅 $0.85\,\mathrm{m}$ 、南北幅 $0.6\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.1\,\mathrm{m}$ を測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は出土していないが、埋土は $SD-1\sim SD-3$ と共通していることから、時期的には古墳時代後期が考えられる。

#### 溝(SD)

#### SD-1

調査区のほぼ中央部を東西方向に伸びるもので、SK-5を切り、 $SD-2\sim SD-4$ とは合流している。規模は検出長19.1m、幅 $0.25\sim 0.4$ m、深さ $0.05\sim 0.15$ mを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は古墳時代後期に比定される土師器・須恵器の小片が少量出土している。

#### SD-2

1 D地区で検出した。南北方向に伸びるものでSD-1と合流し、南部でSK-2を切っている。規模は検出長2.65m、幅 $0.35\sim0.5$ m、深さ0.08mを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

#### SD-3

1 C地区で検出した。南北方向に伸びるもので、SD-1 と合流している。規模は検出長 3.1 m、幅 $0.3\sim0.35$  m、深さ0.08 mを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は土師器 の小片が極少量出土している。

#### SD-4

1 B地区で検出した。南北方向に伸びるもので、SD-1 と合流している。規模は検出長

2.1m、幅0.3m、深さ0.09mを測る。埋土は 灰白色粘土の単一層である。遺物は土師器の 小片が極少量出土している。

#### SD-5

 $1 \, \mathrm{D} \sim 1 \, \mathrm{E}$ 地区で検出した。東西方向に伸びるもので、東端は $\mathrm{SD} - 1$ に切られている。 規模は全長 $2.0 \, \mathrm{m}$ 、幅 $0.55 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.07 \, \mathrm{m}$ を測る。埋土は灰色粘質シルトの単一層である。 遺物は出土していない。

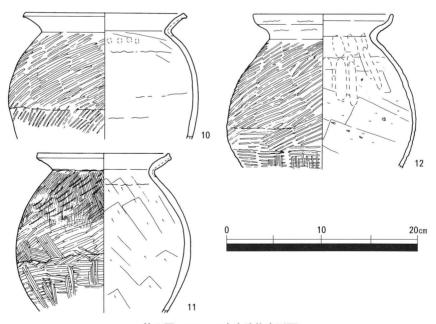


写真1 調査風景(東から)

#### 土器集積(SW)

#### SW-1

1 B区で検出した。SK-4の東に近接しており、東西幅0.9m、南北幅0.9mの範囲に広がっ ている。古墳時代前期初頭(庄内式古相)に比定される甕が3個体が出土しているが、いずれ も底部が欠損している。なお、明瞭な堀形が見られないことから、第9層上面の窪地に廃棄さ れた土器群と理解されよう。甕の中で図化し得たものは3個(10~12)である。そのうち、 (10) がV様式系甕、(11・12) が庄内式甕に分類される。(10) は口縁部が「く」の字に屈曲 するもので、端部は小さく斜下方に拡張され内傾する小さく面を形成している。体部は球形で、 分割成形に沿って右上がりのタタキ調整が行われている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面 は風化のためやや不鮮明であるが、砂粒の動きが見られず、一部に単位幅を示す痕跡があるこ とからヘラナデによる調整が行われたものと推定される。生駒西麓産である。(11・12)は共 に最大径を中位に持つ球形の体部を有する庄内式甕である。口縁部の形態では屈曲部が丸く 「く」の字状を呈することが共通するが、口縁端部の形態では、わずかに内傾する幅広の端面 に凹線を施こす(11)と、口縁部上半で上方に拡張し複合口縁を呈する(12)に区別される。 体部外面はともに三分割成形に沿って上位から中位が右上がり、下位が水平方向ないしは水平 方向に近いタタキ調整が行われており、さらにタタキ調整の上からハケナデ調整が(11)では 上位から中位、(12)では下位に施されている。なお、(11)の下位においてはタタキ調整の上 から、単位が不明瞭ながら上位および中位に見られたハケナデ原体とは明らかに違う原体を使



第8図 SW-1出土遺物実測図

用した弱いナデ状の擦痕が認められた。体部内面のヘラケズリは(11・12)ともに検出部分では水平方向が基本で、屈曲部より少し下がった位置まで施されている点が共通している。共に生駒西麓産である。

今回出土した2点の庄内式甕(11・12)は、底部が欠損しており不明な点もあるが、河内型 庄内式甕の成立期の様相を知るうで重要な資料と言えよう。現在確認されている河内型庄内式 甕の最古型式とされる形態および調整の特徴を以下に列記すれば、形態では口縁部が屈曲外反 し端部が小さな面ないしは丸く終わる。体部は最大径を上位にもち、底部は尖り底あるいは小 さな平底を呈する。調整においては、体部外面は三分割成形に沿って右上がりないしは水平方 向の太めのタタキの後、ハケを粗くに施す。体部内面においては底部から屈曲部ないしはそれ に近い部分までヘラケズリが行われている等の特徴があげられる。

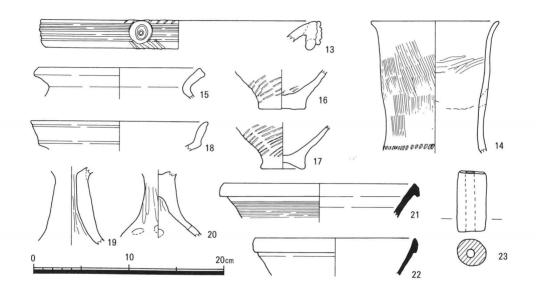
これらの特長と本資料を比較すれば、体部の球形化と(11)に見られる口縁端部のつまみ上げによる明瞭な面を形成する点においては新しい様相が認められるものの、河内型庄内式甕の最古形態の範疇で捉えられるもので、従来から指摘されているように河内型庄内式甕の成立期における多元的な要素を本例が示している。

#### 遺構に伴わない出土遺物

第6層~第8層が遺物包含層である。第8層からは弥生時代後期から古墳時代前期初頭、第7層からは古墳時代前期から後期、第6層からは平安時代後期から鎌倉時代に比定される土器類が出土している。量的にはコンテナ2箱程度が出土しているが、その内の約7割程度が第8層から出土したもので、第6層については極少量出土した程度である。全体に、小片化したものが大半を占めており、図化し得たものは概して少ない。11点(13~23)を図化した。その内訳は弥生土器壺2点(13・14)、甕2点(15・16)、鉢1点(17)、高杯3点(18~20)、須恵器壺1点(21)、白磁碗1点(22)、土錘1点(23)である。

(13) は垂下口縁を有する広口壺ないしは広口長頸壺の口縁部の小片である。端面には4条の凹線文と円形竹管浮文のほか、上下端には刻み目文による加飾が行われている。1 A区第8層出土。(14) は長頸壺の口頸部で、頸部高13.8cmを測る。口頸部下半に刻み目文が施文されている。(13・14) ともに生駒西麓産である。(15) は甕口縁部の小片である。畿内第V様式甕のなかでは、古相に位置対比されるものである。1 D区第8層出土。(16) は甕の底部である。1 D区第8層出土。(16) は甕の底部である。1 D区第8層出土。(17) はあげ底の底部を有する小型の鉢である。1 C区第8層出土。(18) は、口縁部が斜上方に外反気味に小さく伸びる高杯の口縁部の小片である。時期的には(15)に対応するものと考えられる。1 C区第8層出土。(19・20) は高杯の柱状部で、(19) の杯底部は円板充填法により形成されている。(19) が1 E区第8層、(20) が1 A区第8層出土である。(21) は頸部が斜上方に伸びるもので、口縁端部が下方に肥厚し幅広の端面を有する須恵

器広口壺である。 6 世紀前半に対比されよう。 1 D区第 7 層出土。 (22) は玉縁状口縁を有する中国産白磁碗の口縁部の小片である。その特長から横田・森田分類のW-2 類に当たるもので、11世紀中葉から12世紀初頭の時期に対比される。 1 E区第 6 層出土。 (23) は管状式の土錘で完存している。長さ6.3cm、最大径2.7cm、孔径1.0cm、重さ75 g を測る。 1 D区の第 7 層から出土しているため、時期的には古墳時代前期~後期が推定されるが、限定はできない。



第9図 第6層~第8層出土遺物実測図

#### 参考文献

田辺昭三 1996『陶邑古窯址群 I 』平安学園考古学クラブ

横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」 『九州歴史資料館研究論集 4 』

#### 4) 出土遺物観察表

・凡例 粒径~L1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量−◎多量 ○多い △少ない ▲希少 ※赤−赤色酸化土

$\overline{}$	_		・凡例 粒径	- L 1 mm以上 M0.5~ 1 mm未満	S0.5mm未満	量-	量-◎多量 ○多い			$\triangle 4$	なし	\ ▲希/	<b>少 ※</b> 5	ホー赤色酸化:		
遺			法量(cm)   口径	調整・手法	色調	1	胎土						残			
物		器 種	器高	外面	外面	素	長	: 石	雲	角	チ	そ	焼成	-t=	備考	
番	番	-	底径	内面	内面					図	7	の	保存	存	地区	
号	号		() 復元値			質	石	英	母	石		他		率	率	
1	Ξ	弥生土器 広口壺	(17.1)	外面:口頸部ヨコナデ。体部ナデ。 内面:口頸部ヨコナデ。体部ナデ。		やや粗	1 9	S	o s	© S			良好	口縁 部 1/8	生駒西麓産 SK-3	
2	Ξ	弥生土器 壺	4.9	外面:体部および底部側面ナデ。 内面:体部および底部ナデ。	茶褐色 ″	やや粗	OS I	<b>≜</b> S	∆ S	© S L			良好 内底面 磨滅	底部完存	生駒西麓産 SK-3	
3	Ξ	弥生土器 壺	4.5	内面:体部および底部側面ナデ。 内面:体部および底部ナデ。	淡赤褐色	良好	OS I	△ M   L			<b>≜</b> M	赤 M	良好	底部完存	S K – 3	
4	Ξ	弥生土器	(19.8) - -	内面:口縁部ヨコナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。	灰褐色	やや粗	OS L	S I M	∆ S	∆ S	<b>≜</b> S		良好	口縁 部 1/8	S K – 3	
5	Ξ	弥生土器 甕	3.8	内面:体部タタキ。底部ナデ。 内面:体部および底部ナデ。	灰褐色~淡 茶褐色 淡茶褐色	やや粗	OS L	∆ M I L			M         		良好	底部完存	S K - 3	
6	Ξ	弥生土器 甕	3.8	内面:体部タタキ。底部側面ナデ。底部ナデ。底部ナデ。底部ドーナツ底。 内面:体部および底部ナデ。一部工具痕遺存。	赤褐色淡赤褐色	良好	S L	O M			L L		良好	底部完存	S K - 3	
7	Ξ	弥生土器	6.0	内面: 体部タタキ。底部ナデ。 内面: ナデ。	赤褐色淡灰褐色	やや粗	OS L	O S L	∆ S	∆ S	<b>≜</b> L		良好 内底面 一部剥 離	底部 2/3	S K – 3	
8	=	弥生土器 高杯	18.9 - - 体部高 5.0	内面: 杯口縁部ヨコナデ後、ヘラミガキ。杯体部上半横方向、下半縦方向へラミガキ。 柱状部 旅方向へラミガキ。 柱状部 然方向、「杯口縁部ヨコナデ。 杯体部へラミガキ。 柱状部シボリメ。	茶褐色淡茶褐色	やや粗	OS I L	OS-L	∆ s		S − L		良好 杯部底 面一部 剥離	杯部 1/2	S K – 3	
9	Ξ	須恵器 堤瓶	6.8 13.2 体部径11.2 体部幅 7.4	内面:口縁部回転ナデ。体部3 本の沈線間に波状文 内面:口縁部回転ナデ。体部ナ デ。	灰白色	やや粗	OS-L						堅緻	ほぼ完形	片方の把手 を欠く S K - 4	
10	Ξ	土師器 V様式甕	17.3 _ _	内面:口縁部ヨコナデ。体部右 上がりのタタキ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部一 部ヘラナデ、他ナデ。	淡茶褐色	やや粗	OS-L	∆ S I L	∆ S	© S L			やや 不良 全体に 磨滅	体部 中位下 以 欠損	外面煤付着 SW-1	
11	=	土師器 庄内式甕	14.2 - - 体部最大径 18.4	内面:口縁部ヨコナデ。体部中位まで右上がりのタタキ、以下水平方向タタキ(1cm/2本)後、上半から中位ハケナデ、下位単位不明のヘラナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部屈曲付近までヘラケズリ。	茶褐色 灰褐色	やや粗	∆ S L		© S   L	© S L			良好	体部 中位 以下 損	外面煤付着 SW-1	
12	Ξ	土師器 庄内式甕	14.2 - - 体部最大径 19.9	内面:口縁部ヨコナデ。体部中位まで右上がりのタタキ、以下水平方向のタタキ (1cm/3本)。内面:内面:口縁部ヨコナデ。体部屈曲付近までヘラケズリ。	茶褐色 "	粗	©S L L	△ L	!	© S L			良好	体部 中位 以 欠損	外面煤付着 SW-1	
13	Ξ	弥生土器 壺	(29.9)	内面:口縁部 4 条の凹線の後、 円形竹管浮文。端面上下刻み目 文。 内面:ヨコナデ。	茶褐色 "	やや粗	O S			©S L L			良好	口縁 部 1/6	1 A区 第 8 層	
14	Ξ	弥生土器 長頸壺	(13.3) - -	内面:口縁部ヨコナデ。頸部縦 方向のハケナデ、下端部キザミ メ。 内面:口縁部ヨコナデ、他ナデ。	茶褐色	やや粗	OS-M	∆ S	- 1	© S   L			良好		1 B区 第 8 層	

• 凡例 *	粒径-L1mm以上	M0.5~1 mm未満	S 0.5mm未満	量−◎多量	○多い	△少ない	▲希少	※赤-赤色酸化土
--------	-----------	-------------	-----------	-------	-----	------	-----	----------

· utu	100.00		M. H. C. N	調整・手法	各部			胎		土				749		
遺	図		法量(cm) 口径		色調	-	-				_		.lafte. ++12:	残	/#=	考
物	版	器種	器高	外面	外面	素	長	石	雲	角	チャ	そ	焼成	存	備	-
番	番		底径	内面	内面					閃	ì	の	保存		地	Z
号	号		() 復元値			質	石	英	母	石	۲	他		半		
		76-45-1-00	(17.0)	外面:口頸部ヨコナデ。体部ナ	茶褐色	*	o s	Δ M	<b>≜</b> S	o s				口縁	1 D 🛭	7
15		弥生土器 甕	_	デ。 内面:口頸部ヨコナデ。体部ナ デ。	黒褐色	やや粗	L L	IVI	٥	o M			良好	部 1/8	第8層	
16	Ξ	弥生土器		外面:体部右上がりタタキ。底 部裏面ナデ。	茶褐色	やや粗	Os-		O S	O S			良好	底部	1 D 🛭	
		甕	4.5	内面:体部ナデ。底部工具痕遺 存	"	粗	L			L			[QX]	完存	第8層	Š
		弥生土器		外面:体部右上がりタタキ。底	茶褐色	10	Ó	<b>≜</b> S	∆ S	© S				底部	1 C 🛭	7
17	Ξ	- 弥生工品 - 鉢	4.4	部裏面ナデ。 内面:体底部ナデ。	"	やや粗	OS-L	3	3	L			良好	完存	第8層	
			(18.6)	外面:口縁部ヨコナデ他ナデ。	茶褐色		Ō	Δ M	∆ S	© S				口縁		_
18	Ξ	弥生土器 高杯	_	内面:口縁部ヨコナデ他ナデ。	"	良好	O S L	M	S	S			良好	部 1/12	1 CE 第 8 雇	
		弥生土器	_	外面:柱状部ナデ。	茶褐色~		© S	Δ M	∆ S	O S	<b>*</b>			柱状		-
19		高杯	_	   内面:柱状部シボリ目。	淡黑灰色 ″	粗		M	S	S	L		良好	部完存	1 ED 第 8 M	
					茶褐色		L							115		
		弥生土器	_	外面:柱状部ヘラミガキ。	淡茶褐色	ph	OS I	Δ M	A L		M			柱状	1 A 🛭	Ž.
20		高杯	_	内面:底部ナデ。	"	良好	L	171	L		LVI		良好	部完 存	第8月	
			(20.0)	外面:口縁部回転ナデ。頸部カ	淡灰色	1	Δ							口縁		,
21	Ξ	須恵器 広口壺		キ目。   <b>内面</b> :口縁部および体部回転ナ   デ。	"	精良	S L						堅緻	部 1/4	1 DD 第 7 M	
			(16.8)	外面:口縁部ナデ。体部ヘラケ	灰白色									口緑	釉薬の	
22	Ξ	中国産白磁碗	_	ズリ。   <b>内</b> 面:体部ナデ。 	"	精良							堅緻	部 1/8	が悪い 1 E D 第 6 M	<b>₹</b>
			長さ 6.3	外面:ナデ。	灰褐色	や	Õ	o s	À		A				1 7 5	7
23	Ξ	土錘	幅 2.7 孔径 0.9 重さ 75g	内面:両面穿孔。	"	やや粗	O S L	S L	M		M		良好	完形	1 DE 第 7 層	

#### 3. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭および古墳時代後期を中心とした遺構・遺物を検出した。

弥生時代後期の居住域としては、当調査地の東120m地点の中田2丁目29・39で行なわれた第1次調査(NT87-1)で同時期の遺構が確認されており、同一の居住域の広がりとして包 註1 括されよう。ただ、調査地の中央部から西側においては、当該期の遺物包含層である第8層中 の遺物の包含が緩慢であり、さらに西側で行なわれた試掘調査においても、包含層が確認され ていないことから、当該期の集落の西端が本調査地付近であったことが想定される。

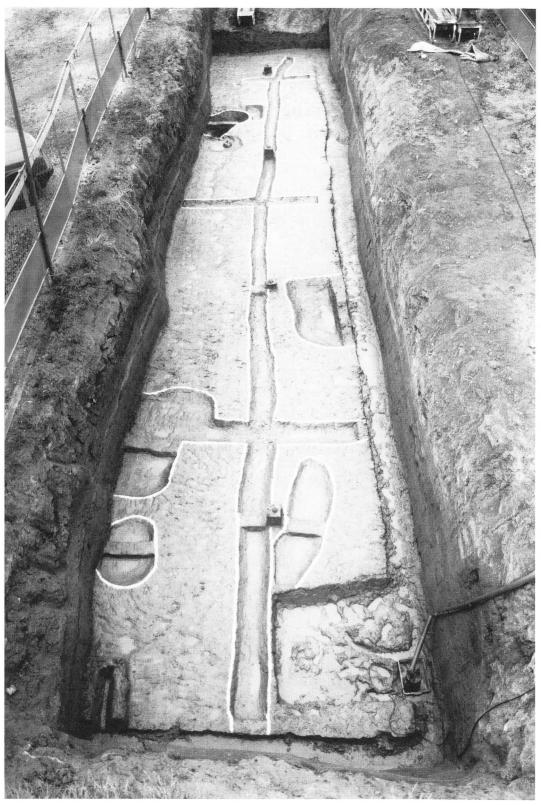
古墳時代前期初頭(庄内式古相)の遺構としてはSW-1があり、2点検出された最古形態の庄内式甕については、河内型庄内式甕成立期における多元的要素を推定するうえで示唆に富む資料を提供している。

古墳時代後期の遺構としては、土坑・溝等を検出している。本来は第7層上面を中心に展開

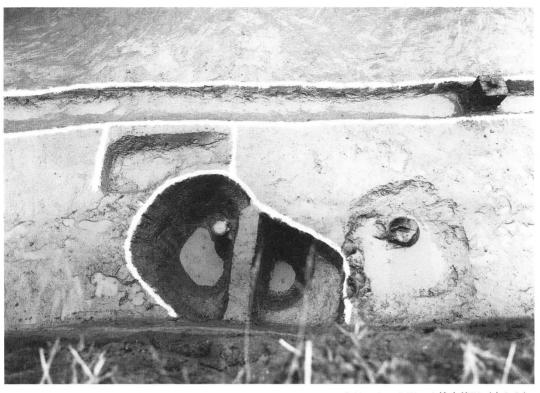
したものと推定され、今後、周辺の調査においては当該期の集落の存在にも注意をはらう必要があろう。

#### 註記

註 1 成海佳子1988「24 中田遺跡(第 1 次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』 (財)八尾市文化財調査研究会報告16 (財)八尾市文化財調査研究会



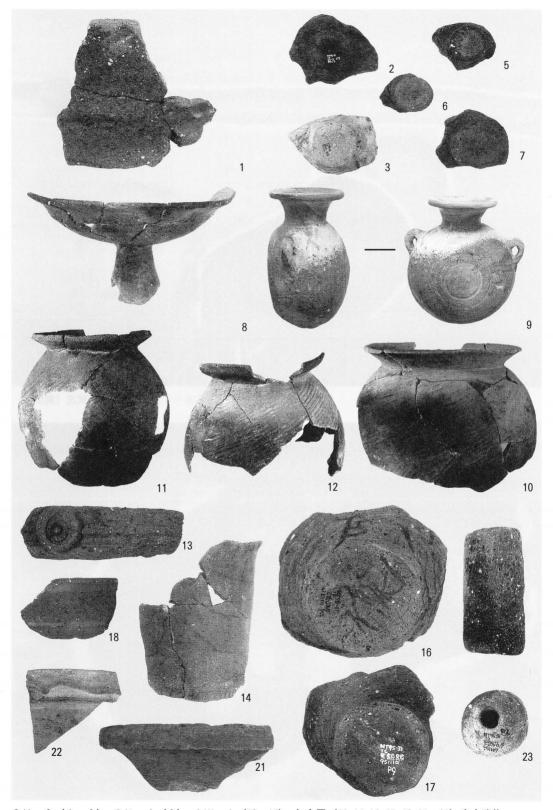
調査区全景(東から)



SK-4、SW-1検出状況(南から)



SK-4検出状況(北から)



SK-3 (1~8)、SK-4 (9)、SW-1 (10~12)、包含層 (13·14·16·17·18·21~23) 出土遺物

# VII 八尾南遺跡第22次調査 (YS95-22)

## 例 言

- 1. 本書は大阪府八尾市西木の本1丁目1番で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査である。
- 1. 本書で報告する八尾南遺跡第22次調査 (YS95-22) の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第埋577-3号 平成7年3月13日) に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が松井義明氏から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成7年4月3日から4月18日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。 調査面積は340㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・赤澤茂美・中谷喜多が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウトー中村百合・西岡千恵子、トレースー市森千恵子が行った。
- 1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

## 本文目次

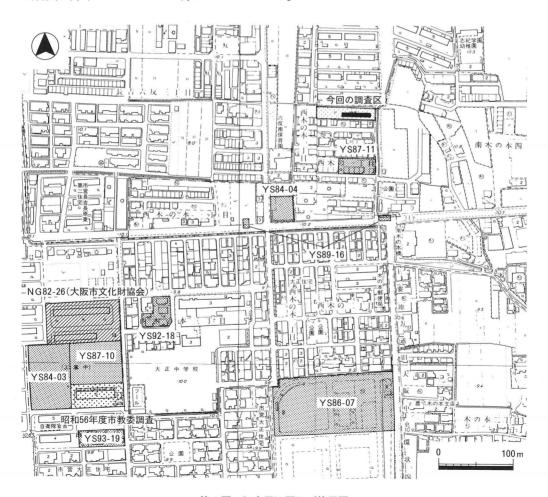
1.	13	tじめに	7
2.	訳	]査概要・・・・・・	3
	1)	調査の方法と経過・・・・・・88	3
1	2)	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	)
	3)	検出遺構と出土遺物・・・・・・・90	)
	4)	遺構に伴わない出土遺物・・・・・・・90	)
	5)	出土遺物観察表9-	1
3.	ま	: とめ······99	)

## WI 八尾南遺跡第22次調査 (YS95-22)

#### 1. はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市の南西部にあたる若林町・西木の本の一帯に広がる遺跡である。 周辺の遺跡には、西側に市域を境とする長原遺跡(大阪市)をはじめとし、東に木の本遺跡、 南西に太田遺跡・津堂遺跡(藤井寺市)、北に城山遺跡(大阪市)が存在している。

当遺跡は、昭和53年度~昭和54年度の2年度にわたり地下鉄谷町線八尾南駅建設工事に伴う発掘調査が実施され、後期旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡として認識された。それ以後、府教委、市教委、当調査研究会により、数十件の発掘調査を現在までに実施している。これらの調査成果から、特に当遺跡の南部には旧石器時代~鎌倉時代に至る遺構・遺物が重複し、広範囲に分布していることが明らかになっている。



第1図 調査周辺図及び位置図

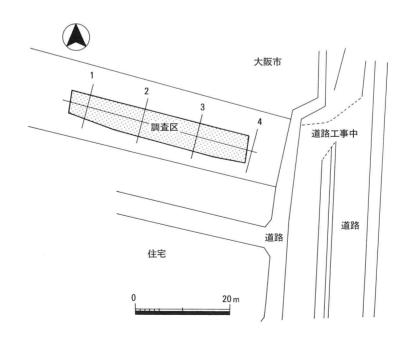
#### 2. 調査の概要

#### 1) 調査の方法と経過

発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、八尾市教育委員会の指示に基づき、当調査研究会が 事業者と協定書を締結して調査を実施した。今回の発掘調査は、当調査研究会が実施した第22 次調査にあたる。調査地(第2図)は、当遺跡の北部の沖積地上に位置し、大阪市との境界に あたる。周辺では弥生時代後期末から中世の遺構・遺物が検出されている。

調査にあたっては、建築基礎杭部分に上幅  $6 \text{ m} \times 45.5 \text{ m}$  (下幅  $4 \text{ m} \times 43 \text{ m}$ ) のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

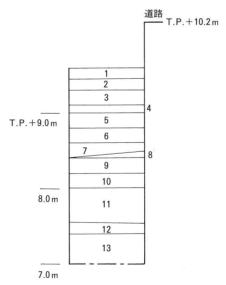
調査の掘削は、市教委が実施した遺構確認調査、当地南部の隣接で実施している第10次調査の成果から弥生時代後期~古墳時代中期にかけての包含層を確認しており、その結果をもとに上部約1.7mについては機械掘削を実施した。しかし、調査を進めるにしたがって壁面の崩壊が著しく、東部の大半は調査不能の状態になった。これらの諸事情により当初設定した調査区が若干である南へずれたかたちとなった。さらに調査区の規模も上部(約48.5m×6.5~7.5m)がやや広くなった。人力掘削については0.3~0.4mの土層を掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。以下、調査成果について述べる。



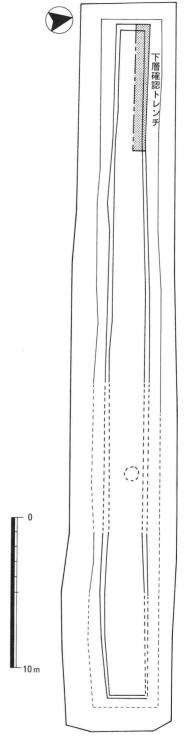
第2図 調査区位置図

# 2) 基本層序

- 第1層 耕土。層厚 15cm前後。調査前までの水田耕 作士。
- 第2層 褐灰色砂質混粘土。層厚15cm。床土。
- 第3層 灰黄茶色砂礫。層厚20cm。0.5~1.0cm前後の砂 粒を含む。
- 第4層 灰茶色細砂混粘土。層厚10cm。
- 第5層 灰茶色~明茶灰色微砂混細砂。層厚20cm。
- 第6層 褐灰青色粘土混細砂。層厚20cm前後。平安時 代以降の洪水層。
- 第7層 灰白色~青灰色細砂。層厚10~20cm。粘土を 含む。
- 第8層 暗灰色粘土。層厚10cm。細砂を少量含む。奈 良時代の遺物を含む。
- 第9層 灰色粘土混シルト。層厚20cm。



- 1 耕土
- 2 褐灰色砂質混粘土 (床土)
- 3 灰黄茶色砂礫
- 4 灰茶色細砂混粘土
- 5 灰茶色~明茶灰色微砂混細砂
- 6 褐灰青色粘土混細砂
- 7 灰白色~青灰色細砂
- 8 暗灰色粘土
- 9 灰色粘土混シルト
- 10 灰色粘土
- 11 暗灰黑色粘土
- 12 暗灰青色粘質土
- 13 青灰色シルト



第3図

第4図 平面図

第10層 灰色粘土。層厚20㎝前後。粘着性の強い粘土。

第11層 暗灰黒色粘土。層厚40~50cm。粘着性の強い粘土である。弥生時代後期末~古墳時 代中期の遺物を含む土層。部分的に炭が多量に含み黒く見える部分が見られた。

第12層 暗灰青色粘質土。層厚20cm。弥生時代後期末~古墳時代中期の遺構面。

第13層 青灰色シルト。層厚40cm。

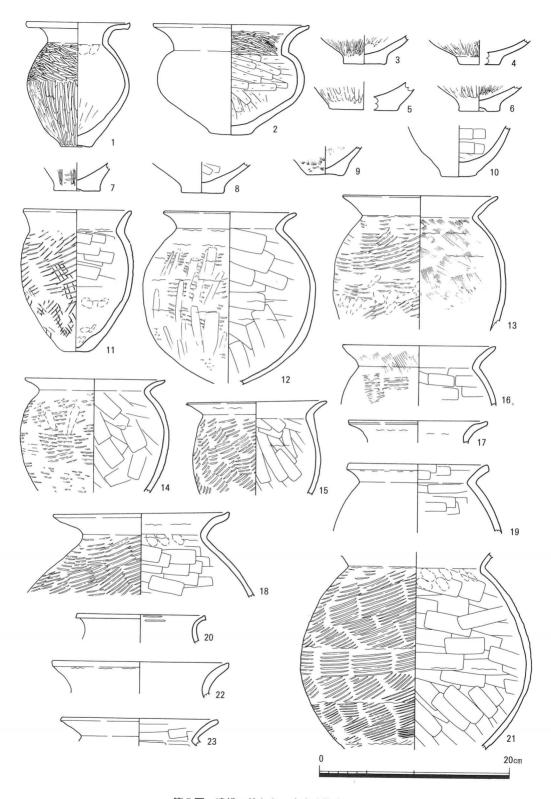
なお、第3図に掲載しているのは、調査区の基本層序の柱状図である。

### 3) 検出遺構と出土遺物

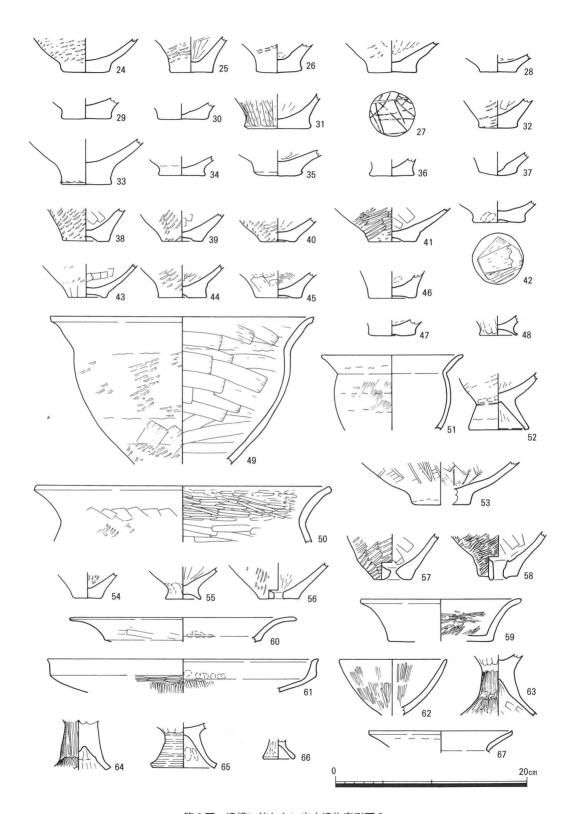
調査の結果、第11層内より弥生時代後期末~古墳時代中期の遺物を出土した。この層は厚く 堆積しており、遺構は第12層上面より切り込んでいるのが見られた。が、地下水位高く、調査 面の土層が浮き上がる。壁面が脆く、崩壊が著しい等の諸事情により詳細な調査ができなかっ た。実測や写真などの記録は取れなかったが、調査区中央よりやや東側で土坑を確認した。ま た、下層確認調査では柱穴と思われるピットを検出した。

### 4) 遺構に伴わない出土遺物

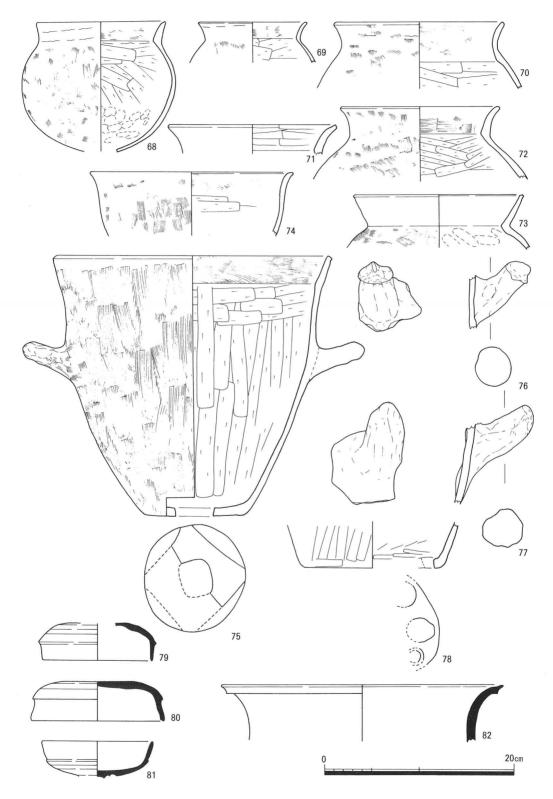
第6層・第8層・第10層・第11層内で出土した。第6層では平安時代末~鎌倉時代の土師器・ 瓦器の小片をごく少量出土した。第8層では奈良時代の土師器の杯片を出土している。第10層・ 第11層では弥生時代後期末から古墳時代中期に比定される弥生土器・土師器・須恵器が混在した状態で出土している。出土遺物はコンテナにして約3箱分を数える。図示できたもの82点で 第10層・第11層から出土した土器である。弥生時代後期末に比定されるものは壺(1~10)・ 甕(11~47)・鉢(48~55)・有孔鉢(56~58)・高坏(59~65)・製塩土器(66)、古墳時 代前期に比定される庄内式甕(67)、古墳時代中期に比定される甕(68~73)・甑(74~78)・ 須恵器の杯蓋(79・80)・高坏(81)・甕(82)である。



第5図 遺構に伴わない出土遺物実測図1



第6図 遺構に伴わない出土遺物実測図2



第7図 遺構に伴わない出土遺物実測図

# 5) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量口径 (cm) 器高	調 整・技 法	色 調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1 三	壶 弥生土器	口径 10.8 底径 3.2 器高 13.4	口縁部内外面ヨコナデ。 体部 外面へラミガキ、内面上部ナ デ・指頭圧痕残存、下部ヘラナ デ、底部外面ナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒 を多量含む(長 石・雲母)	良好	2/3	
2 <u>=</u>	同上	口径 16.2 底径 4.4 器高 11.9	口縁部外面ヨコナデ、内面へ ラミガキ。体部外面剥離の為 調整不明、内面板ナデ	外:暗茶赤褐 色 内:淡灰茶色 ~淡赤茶色	色 内:淡灰茶色 を多量含む(長		2/3	
3	同上	底径 4.2	体部内外面ヘラミガキ。底部 ナデ、モミガラ痕(7ケ)を有 す	外:暗灰褐色 ~淡黄灰色 内:暗灰褐色	4mm以下の砂粒 を少量含む(長 石・雲母)	良好	底部完形	
4 =	同上	底径 4,0	体部外面へラミガキ、内面へ ラナデ。底部外面ヨコナデ	淡緑灰色	4mm以下の砂粒 を多量含む(角 閃石・石英・雲母・ 赤褐色酸化粒)	良好	底部1/2	
5	同上	底径 7.0	体部外面へラミガキ、内面へ ラナデ、底部ナデ。 モミガラ 痕(7ヶ)を有す	外:黒灰色~ 淡茶灰色 内:乳茶灰色	1mm以下の砂粒 を少量含む(長 石・石英・雲母・ 赤褐色酸化粒)	良好	底部1/2	黒斑有り
6	同上	底径 4.0	体部内外面ヘラミガキ、体部 下部外面ヨコナデ、 底部外面 ヨコナデ	外:明橙茶褐色 (内:暗灰茶褐色	1mm以下の砂粒 を微量に含む (長石•石英)	良好	底部完形	
7	同上	底径 4.8	体部外面タタキ後ヘラミガキ、 内面ヘラナデ。底部外面ナデ	明茶灰色	1㎜以下の砂粒 を少量含む(長 石・石英・赤褐色 酸化粒・雲母)	良好	底部1/2	
8	同上	底径 4.0	外面ナデ、内面板ナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒 ※茶灰色 を少量含む(長 右・石英・雲母)		底部完形	
9	同上	底径 3.8	体部外面タタキ後ハケナデ、 内面ハケナデ。底部外面ナデ	淡黄灰褐色	2mm以下の砂粒 を微量に含む (長石・雲母)	良好	底部完形	黒底有り
10 =	同上	底径 3.4	外面ナデ、内面板ナデ	淡灰茶色	3mm以下の砂粒 を多量含む(長 石・石英)	良好	底部完形	黒斑有り
11 =	甕 弥生土器	口径 11.2 底径 2.6 器高 15.2	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕 残存。体部外面タタキ(3本)、 内面上部ヘラナデ、下部ナデ・ 指頭圧痕	暗灰褐色	3mm以下の砂粒 を多量含む(長 石・石英・雲母)	良好	1/2	
12	同上	口径 18.6 最大径17.9	口縁部内外面ヨコナデ。 体部 外面タタキ後板ナデ・接合痕残 存、内面ヘラナデ・接合痕	外:淡茶灰色 内:灰黒褐色	5mm以下の砂粒 を多量含む(長 石・雲母)	良好	1/4	煤付着
13 <u>=</u>	同上	上   日径 10.0   外間グタキ(4本)下部に捕頭   淡黄茶灰色   を多量管		4mm以下の砂粒 を多量含む(長 石・雲母)	良好	1/3	煤付着	
14 =	同上	口径 14.6 最大径15.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。体部外面タタキ(4本)・指ナデ、内面へラナデ・接合痕残存	外:淡黄灰茶 色 内:淡黄灰茶 色~淡黄灰茶 色~淡灰茶褐 色		良好	1/4	煤付着
15 <u>=</u>	同上	口径 14.4	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕 残存。体部外面タタキ(3本)、 内面板ナデー接合痕残存	外:淡黄灰茶       4mm以下の砂粒         を多量含む(長       右・雲母)		良好	1/2	煤付着
16	同上	口径 15.8	口縁部外面ヨコナデ後ハケナデ(7本)、内面ヨコナデ。体部外面タタキ(3本)、内面へラナデ	淡褐灰色	5mm以下の砂粒 を多量含む(長 石・チャート)	良好	□縁1/6	
17	同上	口径 14.4	口縁部内外面ヨコナデ、接合 痕	外:淡褐灰色 内:淡褐灰色 ~灰黒色	2mm以下の砂粒 を含む(長石)	良好	口縁1/5	

遺物番号 図版番号	器種	法量 口径 (cm) 器高	調 整•技 法	色 調	胎土	焼成	遺存状況	備考
18 四	<b>甕</b> 弥生土器	口径 18.3	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕 残存。体部外面タタキ(4本)、 内面板ナデ、上部指頭圧痕残 存	淡茶灰色	4㎜以下の砂粒 を多量含む (長石・雲母)	良好	1/4	
19	同, 上,	□径 14.4	外面ヨコナデ・接合痕残存、内 面ヘラナデ	淡橙灰色	1.5㎜以下の砂 粒を含む(長 石)	良好	□縁1/5	煤付着
20	同上	口径 13.2	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・一部ヘラミガキ	暗灰褐色	2mm以下の砂粒 を多量含む (長石・雲母)	良好	□縁1/6	
21	同上	最大径24.2	口縁部内外面ヨコナデ。 体部 外面タクキ(4本)・接合痕残存、 内面板ナデ・接合痕、肩部に指 頭圧痕残存	淡茶灰色	5mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・雲母)	良好	1/3	煤付着
22	同上	口径 1.4	口縁部外面ヨコナデ・接合痕残 存、内面磨耗の為調整不明瞭	明茶橙色	5mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石)	良好	□縁1/4	
23	同上	口径 16.2	□縁部外面ヨコナデ、内面板 ナデ	淡灰褐色~赤 褐色	3mm以下の砂粒 を含む(長石・ 雲母・赤褐色酸 化粒)	良好	□縁1/5	煤付着
24	同上	底径 2.8	体部外面タタキ(3本)内面磨 耗の為調整不明瞭。 底部外面 ナデ	明茶灰色~乳 灰色	3mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・石英・雲 母)	良好	底部1/2	
25	同上	底径 4.3	体部外面タタキ(2本)下部ナ デ、内面ヘラナデ	外:赤褐色 内:茶灰色	2㎜以下の砂粒 を含む(長石)	良好	底部2/3	
26	同上	底径 4.7	体部外面タタキ、下部ナデ、 内面ナデ・指頭圧痕残存	外:淡茶灰色 内:黒灰色	5mm以下の砂粒 を多量含む (長石・雲母)	良好	底部完形	
27	同上	底径 4.8	体部外面タタキ後ナデ、内面 ナデ後指ナデ。底部外面木の 葉痕を有す	外:淡灰茶色 内:黒灰色	3mm以下の砂粒 を多量含む (長石・雲母)	良好	底部完形	煤付着
28	同上	底径 3.6	体部外面ナデ、内面ヘラナデ。 底部外面ナデ後指ナデ	淡橙茶灰色	1mm以下の砂粒 を微量に含む (長石)	良好	底部2/3	
29	同上.	底径 5.0	体部外面ョコナデ、内面磨耗 の為調整不明瞭。底部外面ナ デ	淡茶灰色	2mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・雲母)	良好	底部完形	
30	同上	底径 4.8	体部外面ヨコナデ、内面へラナデ。底部外面ナデ	外:淡緑灰色 内:黒灰色	4mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・角閃石・ 雲母)	良好	底部完形	煤付着
31	同上	底径 6.0	体部外面へラケズリ、内面へ ラナデ。底部外面ナデ	淡黄灰茶色	4mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・石英・雲 母)	良好	底部1/2	
32	同上	底径 4.2	体部外面タタキ(3本)内面へ ラナデ・ナデ。底部外面ナデ	外:淡赤褐色 内:淡茶灰色	3mm以下の砂粒 を少量含む (長石)	良好	底部完形	黒斑有り
33 四	同上	底径 5.0	外面ナデ、下部に工具痕有り、 内面磨耗の為調整不明瞭	乳灰黄茶色	2mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・石英)	良好	底部完形	
34	同上	底径 4.6	体部外面ナデ・接合痕残存、下 部ヨコナデ、内面ヘラナデ。 底部外面ナデ	外:明茶灰色 内:淡灰茶色	1mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石•石英)	良好	底部1/2	黒斑有り
35	同上	底径 5.1	外面ナデ、内面ヘラナデ	外:乳灰褐色 内:乳褐灰色 ~黒灰色	2mm以下の砂粒 を含む(長石)	良好	底部完形	黒斑有り

遺物番号 図版番号	器種	法量口径 (cm) 器高	調 整・技 法	色 調	胎土	焼成	遺存状況	備考
36	甕 弥生土器	底径 4.2	外面ナデ、内面指ナデ	淡明茶灰色	3mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (赤褐色酸化粒・ 長石・雲母)	良好	底部完形	
37	同上	底径 3.8	外面ナデ、内面板ナデ。 底部 に強い指頭圧痕残存、一底部 外面に粘土補強を有す	乳灰茶色	1㎜以下の砂粒 を微量に含む (長石)	良好	底部完形	
38	同上	底径 4.6	外面タタキ(3本)、内面ヘラ ナデ。底部外面ナデ	外:乳灰茶 色 内:淡橙茶	2mm以下の砂粒 を微量に含む (長石)	良好	底部完形 2/3	***
39	同上	底径 4.0	外面タタキ(3本)、内面へラ ナデ。底部外面ナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒 を多量含む	良好	底部完形	黒斑有り
40	同上	底径 3.2	外面タタキ(3本)、内面へラナデ後指ナデ。底部外面に木の葉痕を有す	暗灰茶褐色 ~明茶灰色	3mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・雲母)	良好	底部2/3	
41 四	同上	底径 4.8	外面タタキ (3本)、内面板ナ デ。底部外面ナデ	赤褐色	3mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石)	良好	底部1/2	
42	同上	底径 4.8	外面ナデ、下部に指頭圧痕残 存、内面ナデ。底部外面へラ ケズリ	外:淡黄灰 茶色 内:黒灰色	3mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (石英・長石・雲 母)	良好	底部完形	
43 四	同上	底径 3.9	外面タタキと思われるが磨耗 の為調整不明瞭、下部へラナ デ、内面へラナデ。底部指ナ デ、底部外面ナデ	外:茶灰色 内:褐灰色	3mm以下の砂粒 を含む(長石・ 雲母)	良好	底部完形	黒斑有り
44 四	同上	底径 4.8	外面タタキ(3本)、内面へラ ナデ。底部外面ナデ	外: 黒灰色 ~乳灰茶色 内: 淡茶灰 色	3mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母)	良好	底部完形	煤付着
45	同上	底径 4.4	外面へラケズリ、内面ハケナ デ。底部外面ナデ	乳灰茶色	4mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母)	良好	底部1/2	
46	同上	底径 4.6	内外面ともにナデ、内面に指 頭圧痕残存	外:乳灰茶 色 内:灰黒色	4mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母)	良好	底部2/3	
47	同上	底径 4.9	外面ナデ、内面ヘラナデ	暗灰褐色	3mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石)	良好	底部完形	
48	鉢 弥生土器	底径 3.7	外面板ナデ、内面へラナデ。 底部外面ナデ	淡灰茶褐色 ~明茶褐色	4mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母)	良好	底部完形	
49 四	同上	口径 27.6	口縁部外面ナデ後ヨコナデ、 内面ヨコナデ。体部外面タタ キ (3本)後ヘラナデ・接合痕 残存、内面板ナデ	外:淡黄灰 茶色 内:淡黄茶 灰色	4mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・雲母)	良好	1/3	黒斑有り
50	同上	口径 30.8	口縁部外面ヨコナデ、内面へ ラミガキ。体部外面タタキ後 ナデ、内面へラナデ	乳灰茶色	3mm以下の砂粒 を微量に含む (長石)	良好	口縁1/5	
51 四	同上	口径 14.6	口縁部外面ヨコナデ、体部ハケナデ (7本)後ナデ・接合痕 残存、内面ナデ	淡褐灰色~ 黒灰色	3mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・石英・赤 褐色酸化粒)	良好	口縁1/5	煤付着
52	同上	底径 6.0	体部外面タタキ後ナデ・指頭圧 痕残存、内面ヘラナデ(工具 痕)。脚部外面ナデ・接合痕残 存、内面ヘラナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・石英・雲 母)	良好	2/3	
53	同上	底径 6.0	体部外面タタキ(3本)後へ ラミガキ、下部ナデ・接合痕、 内面板ナデ後へラで放射状に ナデ	淡茶灰色	2mm以下の砂粒 を含む(長石・ 石英・雲母)	良好	底部1/2	黒斑有り

遺物番号	器種	法量口径 (cm) 器高	謂 整•技 法	色 調	胎土	焼成	遺存状況	備考
54	鉢 弥生土器	底径 2.5	外面ナデ、内面ハケナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂 粒を微量に含 む(長石)	良好	底部1/2	
55	同上	底径 3.6	外面ナデ、下部指ナデ、内 面へラナデ・ナデ。底部外 面ナデ	淡灰茶色	2mm以下の砂 粒を少量含む (長石)	良好	底部完形	黒斑有り
56	有孔鉢 弥生土器	底径 3.6	外面タタキ (3本)、一内 面板ナデ (工具痕)。底部 外面ナデ	淡灰茶色	2mm以下の砂 粒を微量に含 む(長石・石 英)	良好	底部1/2	
57	同上	底径 3.8	外面タタキ (2本)、内面 ヘラナデ。 底部外面ナデ・ 穿孔を有す	乳橙灰色~乳 灰橙色	3㎜以下の砂 粒を多量含む (長石・石英)	良好	底部完形	
58	同上	底径 4.0	外面タタキ (3本)、内面 ヘラナデ。底部外面ヘラナ デ・穿孔を有す	淡茶灰色	4mm以下の砂 粒を多量含む (長石)	-良好	底部完形	
59	高坏 弥生土器	口径 16.4	坏部外面へラミガキと思われるが磨耗の為調整不明瞭、 内面へラミガキ	外:黒灰色 内:乳黄灰茶 色	3mm以下の砂 粒を多量含む (長石・石英)	良好	坏部1/5	煤付着
60	同上	口径 12.0	坏部外面端部調整不明、下 部へラナデ、内面ヨコナデ・ 指ナデ	明赤褐色	3mm以下の砂 粒を多量含む (長石・雲母・ 角閃石)	良好	坏部1/8	
61	同上	口径 28.6	口縁部外面ヨコナデ、内面 ヨコナデ・指頭圧痕残存。 体部内外面へラミガキ	乳褐灰色	2mm以下の砂 粒を少量含む (長石)	良好	坏部1/5	
62	同上	口径 11.0	端部内外面ともにヨコナデ。 坏部内外面ともにヘラミガ キ	端褐灰色	2㎜以下の砂 粒を含む(長 石・雲母)	良好	坏部1/4	
63	同上		体部外面へラナデ、内面ナ デ。脚部外面へラミガキ後 ヘラ押さえ、内面しぼり目、 下部へラナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂 粒を少量含む (長石)	良好	柱状部完形	
64	同上		脚部外面へラミガキ、内面 しばり目・接合痕残存、下 部へラナデ	淡褐灰色	2mm以下の砂 粒を多量含む (長石)	良好	柱状部完 形	
65	同七	底径 6.4	底部外面へラナデ、内面ナデ。胸部外面へラ状のもので横に線状痕残存、下部ココナデ、内面ナデ・指頭圧痕残存、下部ヨコナデ	乳褐灰色	3mm以下の砂 粒を含む(長 石)	良好	脚部2/3	
66 四	製塩土器	底径 3.0	脚部外面指ナデ、内面ナデ	外:暗茶褐色 内:淡灰茶褐 色	1mm以下の砂 粒を少量含む (長石・雲母)	良好	脚部完形	
67	甕 古式土師	口径 15.0	外面ヨコナデー接合痕、内面口縁部ヨコナデ。底部へラナデ	暗灰茶色	1mm以下の砂 粒を含む(長 石・角閃石)	良好	□縁1/5	
68 四	養 土師器	口径 13.4 最大径16.1	□縁部外面ョコナデ・接合 強残存、内面ハケナデ。体 部外面ハケナデ(12本)、 内面ヘラケズリ、下部ナデ・ 指頭圧痕残存	外:明赤茶褐 色~暗灰茶褐 色内:淡灰 茶色	4mm以下の砂 粒を少量含む (長石・石英・ 雲母)	良好	3/4	
69	司上	口径 11.0	口縁部外面ヨコナデ、接合 痕差残存、内面ハケナデ。 体部外面ハケナデ、内面へ ラケズリ	外:明茶橙色 ~暗灰茶褐色 内:暗灰茶褐 色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む(長石・石 英)	良好	口縁1/4	
70 五	同上	口径 17.4	口縁部外面ヨコナデ、内面 板ナデ。体部内面へラケズ リ	淡灰茶色	2mm以下の砂 粒を含む(長 石・赤褐色酸 化粒)	良好	□縁1/7	

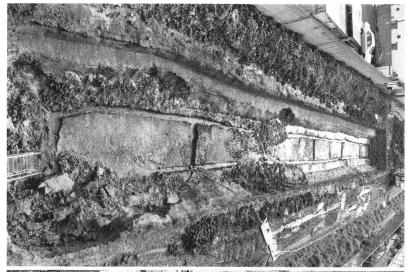
遺物番号 図版番号	器種	法量口径 (cm) 器高	調 整•技 法	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
71	<b>甕</b> 土師器	口径 17.6	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ハケナデ (9本)、 内面指ナデ			良好	□縁1/3	
72	同上	口径 16.4	外面ハケナデ、内面口縁部 ハケナデ。体部ヘラケズリ	淡黄灰茶色	4mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・石英・雲 母)	良好	口縁1/3	
73 四	同上	口径 17.6	端部外面ナデ、口縁部外面 ハケナデ (12本) 後ヨコナ デ・接合痕残存、内面ハケ デ (12本)。体部外面 ケナデ (12本)、内面へラ ケズリ	外:端灰茶色 ~明茶橙色 内:淡橙赤茶 色	3mm以下の砂粒 を少量含む (長石・石英・雲 母)	良好	口縁1/4	
74	甑 土師器	口径 21.0	口縁部外面ハケナデ後 ョコ ナデ、内面ハケナデ、端部 内面ヨコナデ。体部外面ハ ケナデ (B本)、内面へラ ケズリ	淡茶灰色	1mm以下の砂粒 を微量に含む (長石)	良好	口縁1/6	
75 五	同十.	底径 28.8	外面端部ョコナデ、体部ハケナデ(8本)、底部ナデ、 取手上部指ナデ、下部へラ ケズリ、内面口縁部ハケナデ(10本)体部へラケズリ、 度では、10本)体部へラケズリ、 は、10本)体部へラケズリ、 は、10本)体部へラケズリ、 は、10本)を有 す	淡茶灰色	3mm以下の砂粒 を多量含む (長石・雲母)	良好	ほぼ完形	
76	同上		外面ナデ、内面ヘラナデ	淡灰褐色	4mm以下の砂粒 を 多 量 含 む (長石・角閃石・ チャート)	良好		
77 五	同上		外面ヘラケズリ後ナデ、内 面ヘラケズリ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒 を 少 量 含 む (長石・雲母・赤 褐色酸化粒)	良好		
78	同上	底径 14.0	体部内外面ともにヘラナデ。 底部外面ナデ、3個以上の 穿孔を有す			良好	底部1/4	
79 五	坏蓋 須恵器	口径 11.4	外面天井部回転へラケズリ、 口縁部回転ナデ、内面回転 ナデ。底部ナデ	灰黒色	精良	良好	1/2	
80 五	同上	口径 14.0 器高 4.2	外面天井部回転へラケズリ、 口縁部回転ナデ、内面回転 ナデ	外:淡灰色 内:乳灰茶色	3mm以下の砂粒 を少量含む	良好	1/3	ロクロ左 方向
81 五	高坏 須恵器	口径 11.6	外面坏部回転ナデ、底体部 回転ヘラケズリ、内面回転 ナデ	淡青灰色	精良	良好	1/2	
82 五	甕 須恵器	口径 29.8	内外面ともに回転ヨコナデ	灰黒色	精良	良好	口縁1/5	

# 3. まとめ

今回の調査は、隣接する既往調査の成果を踏まえて、調査を進めたが遺構を詳細に明確することはできなかった。しかし、弥生時代後期末~古墳時代中期の遺物を含む層が厚く堆積し、 広範囲に残存していることは明らかである。隣接の調査においても同様の土層状況が確認されている。

### 参考文献

- 米田敏幸他 1981「八尾南遺跡」-大阪市高速電気軌道2号線建設工事に伴う発掘調査報告書-
- 米田敏幸 1983.3「第4章 八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980·1981 年度』八尾市教育委員会
- 駒沢敦 1984「3.八尾南遺跡第1次調査」『昭和58年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告5
- 米田敏幸 1985.3「4.八尾南遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調 香報告11 昭和59年度国庫補助事業
- 西村公助 1988「12. 八尾南遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』(財)八尾市文化財調査 研究会報告16
- 近江俊秀他 1989.3「8.八尾南遺跡 (63-075) の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書 I』八 尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業
- 米田敏幸 1989.3 「7. 八尾南遺跡 (63-084) の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書 I 』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業
- 成海佳子 1989「21 八尾南遺跡(第11次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25
- 高萩千秋 1990「7. 八尾南遺跡(YS89-16)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市 文化財調査研究会報告28
- 西村公助 1993 「VI 八尾南遺跡第7次調査(YS86-7)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41
- 成海佳子 1994「II 八尾南遺跡第10次調査(YS87-10)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化 財調査研究会報告40
- 西村公助 1994 「W 八尾南遺跡第19次調査(YS93-19)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 43』



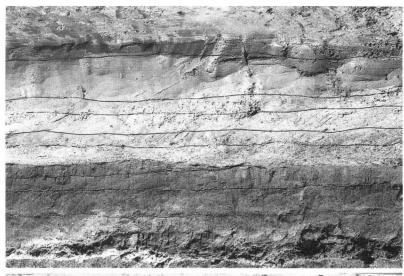
調査区全景(東から)



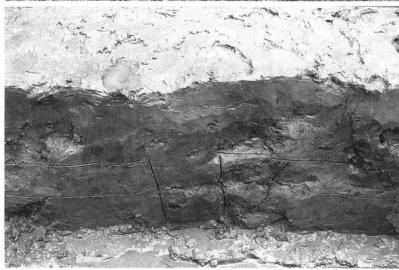
調査区全景(西から)



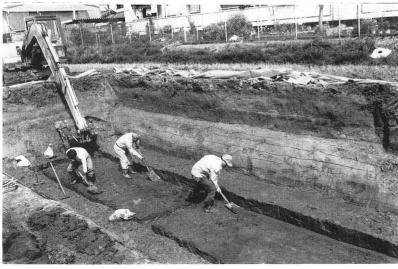
調査区西部 南壁(北から)



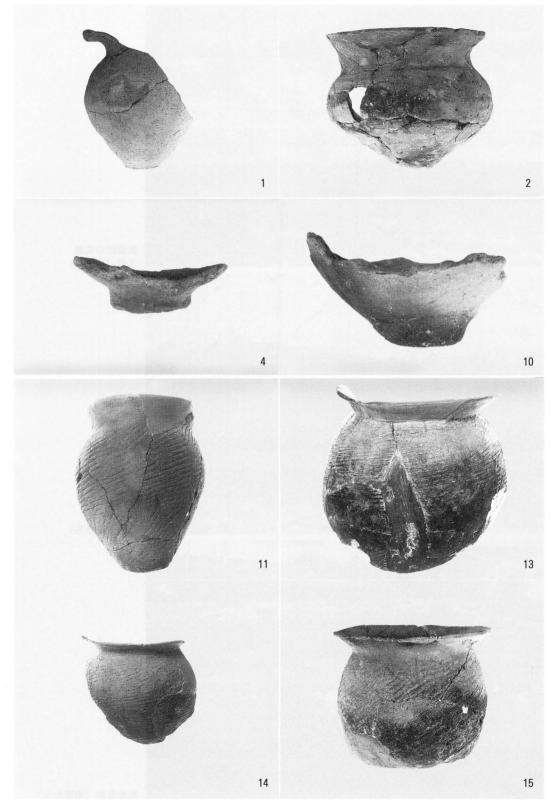
調査区中央部北壁(南から)

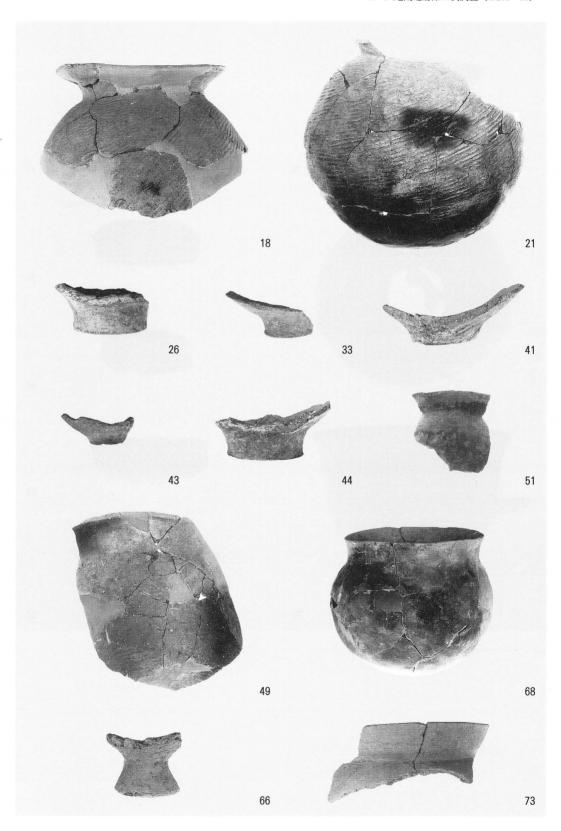


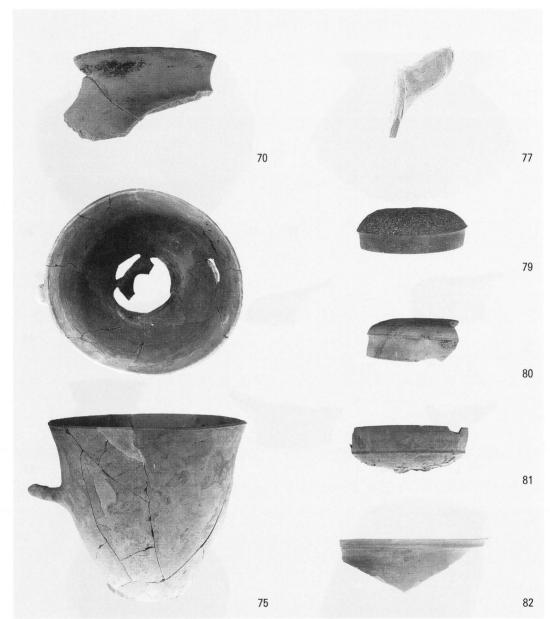
調査区西部 北壁(南から)



調査風景(南東から)







# VⅢ 八尾南遺跡第24次調査 (YS95-24)

# 例 言

- 1. 本書は大阪府八尾市若林町2丁目地内で実施した電気管路埋設工事に伴う発掘調査である。
- 1. 本書で報告する八尾南遺跡第24次調査 (YS95-24) の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第埋294-3号 平成7年8月28日) に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力(株)から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成7年9月27日から9月29日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。 調査面積は34㎡を測る。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレース-中村百合・西岡千恵子・市森千恵子が行った。
- 1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

# 本文目次

1.	Va	まじめに ······	05
2.	訓	g查概要1	07
1	1)	調査の方法と経過	07
6	2)	基本層序	08
(	3)	検出遺構と出土遺物	11
3.	#	sとめ1	12

# W 八尾南遺跡第24次調査 (YS95-24)

# 1. はじめに

八尾南遺跡は、大阪府八尾市の南西部にあたる若林町1~3丁目・西木の本1~4丁目一帯に広がっている遺跡である。周辺の遺跡には、西側に市域を境とする大阪市長原遺跡をはじめとし、東に八尾市木の本遺跡、南に藤井寺市津堂遺跡、北に大阪市城山遺跡が存在している。

当遺跡は、昭和53~54年度に地下鉄谷町線八尾南駅建設工事に伴う発掘調査が実施され、後期石器時代~鎌倉時代に至る複合遺跡として認識された。それ以後も、当遺跡では、現在までに数十件の発掘調査が実施されている。調査主体の内訳として大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・八尾南遺跡調査会・当調査研究会がある。これらの調査成果から、特に当遺跡の南部



第1図 調査地位置図及び周辺図

# 調査地周辺の発掘調査一覧表

	調查原因	調査地	年度	調査主体	文献
1	地下鉄谷町2号線建設	木の本・若林・大阪市長吉	1977	長原遺跡調査会	「長原遺跡発掘調査報告Ⅲ」
1-1	地下鉄谷町線建設	長吉川辺3丁目	1977	長原遺跡調査会	「長原遺跡発掘調査報告 I 」
1-2	地下鉄谷町2号線建設	長吉川辺3丁目	1978	長原遺跡調査会	「長原遺跡発掘調査報告XV」
2	地下鉄谷町2号線建設	木の本・若林町	1978	八尾南遺跡調査会	「八尾南遺跡」1977
3	範囲確認	若林町1丁目	1979	八尾市教育委員会	『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』 八尾市文化財調査報告 6 1981
4	分譲住宅建設	若林町2丁目	1980	八尾市教育委員会	_
5	区画整理事業	長吉川辺3丁目	1980	鲥大阪市文化財協会	「長原遺跡発掘調査報告哑」
6	区画整理事業	長吉川辺3丁目	1981	働大阪市文化財協会	「長原遺跡発掘調査報告X」
5—1	区画整理事業	長吉川辺3丁目	1982	働大阪市文化財協会	_
7	大阪市営住宅建設	長吉川辺3丁目	1982	働大阪市文化財協会	_
8	分譲住宅建設(YS83-2)	若林町1丁目	1984	当調査研究会	「1. 八尾南遺跡(第2次調査)」『昭和59年度 事業概要報告』当調査研究会報告7 1985
9	共同住宅建設	若林町3丁目	1984	八尾市教育委員会	「4. 八尾南遺跡〈若林町3丁目117~119〉」 『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告11 1985.3
10	病院建設(YS87-5)	西木の本1丁目	1986	当調査研究会	「7. 八尾南遺跡(第5次調査)」「八尾市文化 財調査研究会年報 昭和62年度」当調査研究 会報告16 1987
11	事務所建設(YS89-15)	若林町1丁目	1989	当調査研究会	「11. 八尾南遺跡(第15次調査)」「八尾市文 化財調査研究会年報 平成元年度」当調査研 究会報告28 1989
12	大阪市住宅供給公社八尾 南分譲住宅建設 (NG86-3)	長吉川辺3丁目	1986	大阪市教育委員会 助大阪市文化財協会	「XIV. 平野区長原遺跡」『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1988. 3
13	ポンプ場・導人路建設 (YS87-9)	若林町1丁目	1987	当調査研究会	「10.八尾南遺跡(第9次調查)」『八尾市文化 財調査研究会年報 昭和62年度』当調査研究 会報告16 1987
14	公共下水道工事	若林町	1988	大阪府教育委員会	『八尾南遺跡-旧石器出土第 3 地点-』第 31 1989.3
15	工場建設(YS88-12)	若林町2丁目	1988	当調査研究会	「22.八尾南遺跡(第12次調査)」『八尾市文 化財調査研究会年報 昭和63年度』当調査研 究会報告25 1988
16	事務所建設(YS88-13)	若林町1丁目	1988	当調査研究会	「23.八尾南遺跡(第13次調查)」『八尾市文 化財調査研究会年報 昭和63年度』当調査研 究会報告25 1988
17	公共下水道工事(YS87-1)	大阪市長吉	1988	当調査研究会	「24.長原遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』当調査研究会報告25 1989
18	共同住宅建設(YS89-14)	若林町3丁目	1989	当調査研究会	「11.八尾南遺跡(第14次調査)」『八尾市文 化財調査研究会年報 平成元年度』当調査研 究会報告28 1989
19	学園建設(NG89-48)	長吉川辺3丁目	1989	脚大阪市文化財協会	
20	社屋建設(YS91-17)	若林町3丁目	1990	当調査研究会	「19.八尾南遺跡第17次調査(YS91-17)」 『平成2年度動八尾市文化財調査研究会事業 報告』1990
21	共同住宅建設(NG93-1)	長吉川辺3丁目	1993	剛大阪市文化財協会	「古墳時代のまつりのあと」『葦火』
22	共同住宅建設(NG93-56)	長吉川辺辺3丁目	1994	脚大阪市文化財協会	「井戸」『葦火』49号 1994.4
23	電気管路埋設工事 (YS94-20)	若林町3丁目地内	1994	当調査研究会	
24	共同住宅建設(YS95-23)	着林町 3 丁目152	1995	当調査研究会	_

には旧石器時代〜鎌倉時代に至る遺構・遺物が重複し、広範囲に分布していることが明らかになっている。今回の調査地は、当遺跡の西南部に位置し、当調査研究会が実施した第24次調査にあたる。

# 2. 調査の概要

# 1) 調査の方法と経過

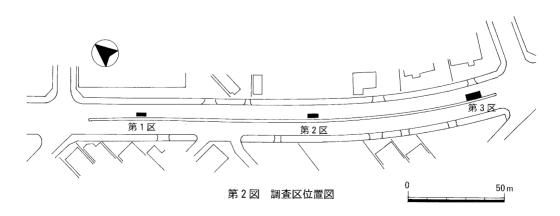
発掘調査は地中配電管路工事に伴うもので、八尾市教育委員会の指示に基づき、当調査研究 会が事業者と協定を締結して調査を実施した。

調査区は、人孔部分の1ヶ所(7.2×3m=21.6㎡)、開削部分2ヶ所(5×1.2m=6㎡)である。総計面積は約34㎡を測る。調査については道路上の規制など諸事情があり、すべて夜間調査となる。まず、北部の開削部分2ヶ所(第1区・第2区)から調査(9月27日~28日)を行う。調査区では東部に隣接する第12次調査(註1)で、古墳時代中期の遺構・遺物が現地表下1.2m(標高10.0m)前後で確認されており、その調査成果を参照にして機械及び人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。また、下層においては工事掘削で破壊される深度部分について地層状況の確認を行った。続いて北部の調査区終了後、第2区の調査区から南東へ約150m地点にあたる人孔部分(第3区)の調査(9月28日~29日)を行う。第3区では南部に隣接する第1次調査(註2)で、弥生時代後期~鎌倉時代の遺構・遺物が現地表下1.2m(標高11.3m前後)で確認されており、その調査の成果を参考に機械及び人力掘削を行う。また、北部の調査と同様、工事掘削深度までの地層状況について調査した。

以下、今回の調査成果について記す。

註

- 註 1 原田昌則 1994 「1.八尾南遺跡第 8 次調査」『八尾南遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註 2 駒沢 敦 1983 「八尾南遺跡第 1 次調査」『昭和58年度事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

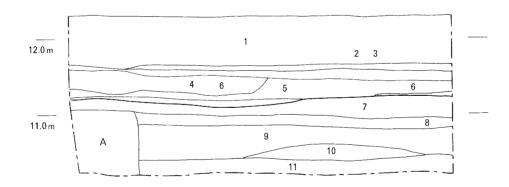


### 2) 基本層序

第2図に掲載しているのは第1区~第3区で確認した断面図である。以下、各区の層序について記す。

#### 第1区

- 第1層 盛土。層厚約65cm。アスファルト・バラス・区画整理で整地した盛土。
- 第2層 旧耕土。層厚10㎝前後。区画整理で整地されるまでの耕作土である。ほとんどが 削平を受けている。
- 第3層 緑灰色細砂混粘質土。層厚5~15㎝。床土である。
- 第4層 暗灰褐色細砂。層厚25~40㎝。中近世の土層である。
- 第5層 灰褐色細砂。層厚5~30cm。
- 第6層 淡茶灰色微砂。層厚15~20cm。
- 第7層 暗灰色粘土。層厚15~40cm。この上面が古墳時代のベース面と思われる。
- 第8層 灰色シルト。層厚15㎝前後。
- 第9層 灰青色粘質シルト。層厚30~40cm。
- 第10層 淡灰色細砂。層厚15~20cm。凸レンズ状に堆積する。
- 第11層 黒灰色粘土。層厚20cm前後。

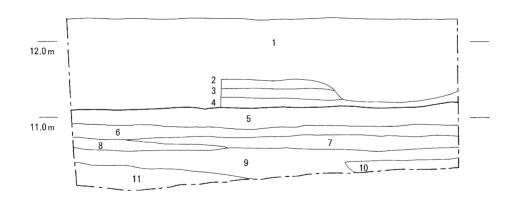


- 1 盛土
- 2 旧耕土
- 3 緑灰色細砂混粘質土
- 4 暗灰褐色細砂
- 5 灰褐色細砂
- 6 淡茶灰色微砂
- 7 暗灰色粘土

- 8 灰色シルト
- 9 灰青色粘質シルト
- 10 淡灰色細砂
- 11 黑灰色粘土
- 12 灰青色粘質シルト
- A 暗灰色砂礫混細砂粘質シルト

第3図 第1区西壁断面図

- 第12層 灰青色粘質シルト。層厚10cm以上。
- 第A層 暗灰色砂礫混細砂粘質シルト。層厚10~15cm。古墳時代以降の溝状遺構。
- 第2区
- 第1層 盛土。層厚120~200cm。第1区と同様、アスファルト・バラス・区画整理で整地した盛土及び埋設工事等による撹乱。
- 第2層 淡茶灰色微砂。層厚10cm。少量の細砂粒が含まれる。埋設工事等で大部分が削平されている。
- 第3層 暗茶褐色砂混まじり粘質土。層厚10cm。第2層と同様、埋設工事等で削平されている。
- 第4層 茶褐色細砂混粘質土。層厚20~30cm。第2層と同様、埋設工事等で削平されている。
- 第5層 灰青色細砂混粘土。層厚10~15cm。古墳時代のベース面と思われる。
- 第6層 暗灰茶色シルト混細砂。層厚5~20cm。
- 第7層 乳灰色シルト混粘土。層厚20~50cm。
- 第8層 淡灰茶色粘土。層厚10~15cm。
- 第9層 青灰色微砂。層厚20~40cm。
- 第10層 茶色細砂。層厚20㎝前後。部分的堆積する。
- 第11層 黒灰色粘土。層厚30㎝前後。北方へ落ち込んでいる。

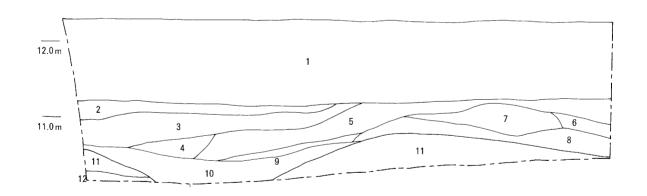


- 1 盛土
- 2 淡茶灰色微砂
- 3 暗茶褐色砂混粘質土
- 4 茶褐色細砂混粘質土
- 5 灰青色細砂混粘土(ベース面)
- 6 暗灰茶色シルト混細砂
- 7 乳灰色シルト混粘土
- 8 淡灰茶色粘土
- 9 青灰色微砂
- 10 茶色細砂
- 11 黑灰色粘土

第4図 第2区西壁断面図

# 第3区

- 第1層 盛土。層厚150~180cm。アスファルト・バラス・区画整理で整地した盛土及び埋設工事等による撹乱。
- 第2層 明茶灰色粘土。層厚10~20cm。
- 第3層 暗灰色粘土と淡茶灰色細砂の互層土。層厚15㎝前後。
- 第4層 暗灰青色粘土。層厚10cm。
- 第5層 茶灰色細砂。層厚20cm前後。
- 第6層 乳灰茶色粘質シルト。層厚20㎝前後。
- 第7層 乳灰茶色粘土。層厚15~40cm。
- 第8層 暗灰色砂礫混粘土。層厚10㎝前後。植物遺体を含む。
- 第9層 黒灰色微砂。層厚10cm前後。
- 第10層 暗灰色粘土と淡茶灰色細砂。層厚30~35cm。薄いスライス状に何重にも重なる。落ち込み状遺構に堆積する層である。
- 第11層 暗青色粘土。層厚30~50cm。炭化物が多量に含む層で、粘着性のある粘土である。
- 第12層 暗灰青色粘質土。層厚20cm以上。

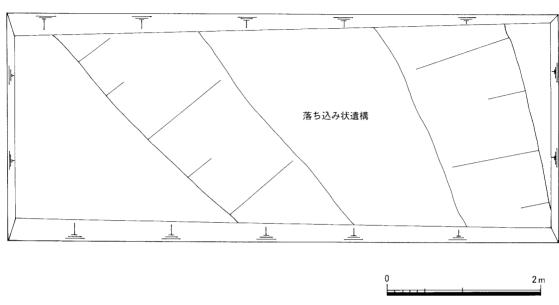


- 1 盛土
- 2 明茶灰色粘土
- 3 暗灰色粘土と淡茶灰色細砂の互層
- 4 暗灰青色粘土
- 5 茶灰色細砂
- 6 乳灰茶色粘質シルト

- 7 乳灰茶色粘土
- 8 暗灰色砂礫混粘土
- 9 黒灰色微砂
- 10 暗灰色粘土と淡茶灰色細砂
- 11 暗青色粘土
- 12 暗灰青色粘質土

第5図 第3区西壁断面図





第6図 第3区平面図

#### 3)検出遺構と出土遺物

# 第1区

調査の結果、現地表(標高12.3m)下約1.1mで古墳時代のベース面(第6層上面)を検出したが、遺構・遺物はなかった。現地表下約1.2mに存在する第7層上面から切り込む溝状遺構1条(SD-201)を検出した。溝状遺構は肉眼で見るかぎりではあまり不純物を含まないきれいな細砂が堆積している。現地表下約2.0mには水平に堆積する黒灰色粘土層がみられた。

# 第2区

調査の結果、第1区同様に現地表(標高12.3m)下約1.1mで古墳時代のベース面(第6層)を検出したが、遺構・遺物はなかった。現地表下約2.0mには黒灰色粘土層がみられたが、北方へ落ち込んでいるのがみられた。

#### 第3区

調査の結果、現地表(標高12.3m)下約1.1mで落ち込み状遺構を検出した。落ち込み状遺構は粘土層で、その上面は細砂~微砂のきれいな層が堆積している。粘土層内には多くの有機物が含まれており、上部は炭化し黒づんでいる。西側の肩部では畦状に約30cmの盛り上がりがみられた。時期については土器など遺物が出土していないため不明であるが、周辺調査の状況から弥生時代後期以降のものと考えられる。

### 3. まとめ

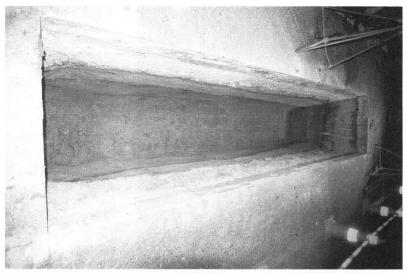
今回の調査は、既往調査地が隣接する部分を対象にした調査を行った。調査区は小面積であり、遺構及び地層の全体像を把握するにはいたらなかったが、当調査区にも古墳時代ごろの遺 構面が存在することがわかった。以下、各区ごとに記す。

第1区・第2区では、遺構は検出しなかったが第12次調査(YS88-12)で検出している古墳時代中期の方墳と同一レベルの遺構面を検出した。下層では第1区で溝状遺構を検出している。この溝状遺構は層位からみて弥生時代後期の前後のころに洪水等できた自然の溝と思われる。

第3区では落ち込み状遺構が検出された。第1次調査(YS83-1)の調査区西部で検出した河 川跡と関連が考えられる。また、この落ち込み状遺構の西側の肩部が畦状に盛り上がっている のが断面で確認された。

#### 参考文献

- 米田敏幸他 1981『八尾南遺跡』-大阪市高速電気軌道2号線建設工事に伴う発掘調査報告書-
- 米田敏幸 1983.3「第4章 八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980·1981 年度』八尾市教育委員会
- 駒沢 敦 1984「3.八尾南遺跡第1次調査」『昭和58年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会 報告5
- 米田敏幸 1985.3「4. 八尾南遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業
- 西村公助 1988「12. 八尾南遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』(財)八尾市文化財調査 研究会報告16
- 近江俊秀他 1989.3「8. 八尾南遺跡 (63-075) の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書 I 』八 尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業
- 米田敏幸 1989.3 「7. 八尾南遺跡 (63-084) の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書 I 』八尾 市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業
- 成海佳子 1989「21 八尾南遺跡(第11次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾 市文化財調査研究会報告25
- 高萩千秋 1990「7.八尾南遺跡(YS89-16)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28
- 西村公助 1993 「VI 八尾南遺跡第7次調査(YS86-7)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41
- 成海佳子 1994「II 八尾南遺跡第10次調査(YS87-10)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化 財調査研究会報告40
- 西村公助 1994 「W 八尾南遺跡第19次調査(YS93-19) | 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』



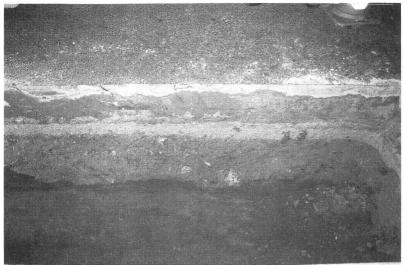
第1区全景 (南東から)



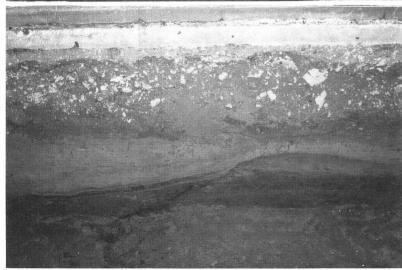
第2区全景 (南東から)



第3区全景 (南東から)



第2区西壁 (東から)



第3区西壁 (東から)



第3区調査風景 (東から)

# 報告書抄録

>	n di i	ts	White the transfer of the tran
సే	י ינג פ	(T	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書		名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 54
副	書。	名	I 小阪合遺跡 (第30次調査) II 竹 渕 遺 跡 (第4次調査) Ⅲ 竹 渕 遺 跡 (第5次調査) IV 東 郷 遺 跡 (第49次調査) V 東 郷 遺 跡 (第51次調査) VI中 田 遺 跡 (第31次調査) VI八尾南遺跡 (第22次調査) VII八尾南遺跡 (第24次調査)
卷	3	欠	
シ	リーズミ	名	(財) 八尾市文化財調査研究会報告
シ	リーズ番	号	54
編	集者:	名	I・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ 原田昌則 Ⅱ・Ⅴ・Ⅶ・៕ 高荻千秋
編	集機	関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所	在	地	〒581 八尾市幸町4丁目58の2 TEL 0729-94-4700
発	行年月	В	西暦1996年9月30日

ふりがな	ふりがな		- F				調査	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	面積(㎡)	調査原因
こざかあい I 小阪合遺跡 (第30次調査)	おおさかふやおしみなみこざかあい 大阪府八尾市南小阪合町1丁日21番地	27212		34度 37分 18秒	135度 36分 58秒	19960108~ 0122	104	共同住宅建設に 伴う事前調査
たけぶち II 竹渕遺跡 (第 4 次調査)	おおさかふやおしたけぶち 大阪府八尾市竹渕 1 丁目223-1、224-1、 225-1、226-1	27212		34度 36分 54秒	135度 34分 18秒	19950619~ 0630	64	共同住宅建設に 伴う事前調査
たけぶち Ⅲ竹渕遺跡 (第5次調査)	おおさかふやおしたけぶち 大阪府八尾市竹渕 4 丁目33-1	27212		34度 36分 54秒	135度 34分 13秒	19950925~ 1004	135	共同住宅建設に 伴う事前調査
とうごう IV東郷遺跡 (第49次調査)	おおさかふやおしひかりちょう 大阪府八尾市光町2丁月20番. 22番	27212		34度 37分 39秒	135度 36分 30秒	19950614~ 0623	140	共同住宅建設に 伴う事前調査
とうごう V東郷遺跡 (第51次調査)	おおさかふやおしひがしほんまち 大阪府八尾市東本町 4 丁目26番地-1	27212		34度 37分 24秒	135度 36分 28秒	19960319~ 0328	175	事務所新築工事 に伴う事前調査
なかた VI中田遺跡 (第31次調査)	おおさかふやおしおさかべ 大阪府八尾市刑部 1 丁目183.184	27212		34度 36分 38秒	135度 37分 17秒	19951106~ 1115	120	共同住宅建設に 伴う事前調査
やおみなみ Ⅶ八尾南遺跡 (第22次調査)	おおさかふやおしにしきのもと 大阪府八尾市西木の本1丁目1番	27212		34度 36分 02秒	135度 35分 14秒	19950403~ 0418	340	共同住宅建設に 伴う事前調査
やおみなみ VII八尾南遺跡 (第24次調査)	おおさかふやおしわかばやしちょう 大阪府八尾市若林町2丁目地内	27212		34度 35分 27秒	135度 35分 06秒	19950927~ 0929	34	電気管路埋設工事に伴う事前調査

所収遺跡	<b></b>	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小阪合遺跡	第30次	集落遺構	古墳時代後期	溝	須恵器	
竹渕遺跡	第4次	集落遺構	古墳時代前期	溝	布留式土器	
竹渕遺跡	第5次	集落遺構	古墳時代中期	土坑•小穴	須惠器	
東郷遺跡	第49次	集落遺構	弥生時代中期	土坑	弥生土器	
東郷遺跡	第51次	集落遺構	古墳時代前期	溝・土坑	土師器	
中田遺跡	第31次	集落遺構	古墳時代後期	溝・土坑	土師器	
八尾南遺跡	第22次	集落遺構	弥生時代後期		弥生土器	
八尾南遺跡	第24次	集落遺構	古墳時代以降	溝		

# **財団法人** 八尾市文化財調査研究会報告54

I 小阪合遺跡(第30次調査)

Ⅱ 竹渕遺跡(第4次調査)

Ⅲ 竹渕遺跡(第5次調査)

IV 東郷遺跡(第49次調査)

V 東郷遺跡(第51次調査)

VI 中田遺跡(第31次調査) VI 八尾南遺跡(第22次調査)

WII 八尾南遺跡(第24次調査)

発 行 1996年9月

編 集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市幸町4丁目58の2

TEL 0729-94-4700

印 刷 明新印刷株式会社

表 紙 レザック66 〈260kg〉

本 文 ニューAG 〈 70kg〉

図 版 ニューAG 〈 70kg〉

